

---

# 遊戯王 LEGENDs ~伝説の名の元に~

廃棄人形

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王 LEGENDS～伝説の名の元に～

### 【Zコード】

N1158Y

### 【作者名】

廃棄人形

### 【あらすじ】

俺、一ノ瀬燈夜は別段変わった生活をしてた訳じゃない。友達と高校行つたり、遊戯王やつたり、デュエルモンスターZやつたり、決闘したり……。

今日も、久し振りのチャンピオンシップ……通称CSに出掛けるところだった。

突如聞こえる声。

次々と倒れる咄。

そして、とうとう俺も……！

次の瞬間。

眼を覚ました俺の前に居たのは、ブランマジヒブランマジガールだった。

『遊戯王 僕らの進んで行く道』と並行して連載する』ことになりました。

向こうは、コラボ相手である『紫苑の槍』様との相談の結果、一週間に一度の更新になりますが、こちらはそういうのも無く、不定期更新になります。

なるだけ早くしたいと思つてますよ、ハイ。

「別れの言葉は、要らないよな……」

事実は小説より奇なり。

真っ先にそんな言葉が思い浮かぶのは、俺が変だからだろうか。いや、俺自身、自分で小説を書いているからだろう。そう思いたい。そういえば……あの小説、今良いところだつたんだよなあ。主人公が最後の戦いへと出向いていったのに、複数のヒロインはそれを知らずに仲間たちと平和な時間を過ごしている。

その時、主人公が行つた言葉はただ、一言。

「別れの言葉は、要らないよな……」

『あの……私の話、聞いてる?』

「何も見えない聞こえない世界は平和です本当にありがとうございます」

ビバ、現実逃避

遊戯王チーム、LEGENDs・伝説という名を付けて、俺たちは活動していた。

活動つていつても、実際はそんなに大逸れたことをしたわけじゃない。各地の遊戯王チャンピオンシップ……通称CSに出向き、デ

ユエル動画を撮影、投稿し……ブログを作ったりして。

メンバーは俺含めて4人だけだ。それぞれ一癖も二癖もある性格だから、人気が分割された。

「あ、～……ねみい」

**瀬野基。**耳にピアス、ドクロのシルバーネックレス。指には指輪……見た目だけならばかなり素行の悪そうな不良だが、実際は心優しい男だ。

俺が初めて会った時は、凄い荒れてたっけな……。

「……お前のことだ。昨日、夜遅くまでデッキの調整でもしていたのだろう?」

……クールだ。凄くクールだ。クールになれよっ! とは言わな  
いし言われもしないだろう。

**瀧川幸仁。**長い髪を後ろに縛っている、メンバー内一番の長身だ。少しで良いからその身長を分けて欲しい。

「今日は久し振りのCSだもんね～。僕も楽しみで眠れなかつたよ  
!」

「コイツは長谷部慧。中世的な顔立ちで、女装させれば凄く似合つ  
んじやないだろうか。

何故か走らないけど、俺に凄く懐いている奴だ。一部ではゲイ疑  
惑も浮かび上がっている。勿論、お相手は俺……やれやれだ。

「なんことより、早く行こうぜ?」

そして俺、**一ノ瀬燈夜。**メンバー内で一番特徴が無い、という嫌

味な理由でリーダーやつてます、ハイ。

……そりゃ、自覚してるけどさつ。3人みたいに顔が良いつて訳でも無いし……頭も良くない、運動神経もびみょー……良く鈍感つて言われるし……あ、涙が。

「なんで泣いてるの、燈夜？」

「……自分が情けなくなつて……つか、ちけえよつー…」

「ああつ」

なんでそんなに残念そつなんだ！？

そんなんだからマン研（マンガ研究会……といつ名の腐女子の集まり）にネタにされんだよつ！ 無駄に絵が上手いのがさらにも力づくー

……閑話休題。何言つてんだか、俺。

『 やつと、見付けました』

「……え？」

声。無駄にイケメンボイスの声が、脳内に響く感じで聞こえてきた。

……とつとう俺も厨二病か！？

「誰だつー」

と思つたら、どうやら聞こえたのは俺だけじゃないらしい。

基が声を張り上げてるし、幸仁は怪訝そうに眉を潜めながら辺りを見渡しているし……。慧に至つては、何故か俺に抱きついてるし。

「階にも聞こえた……のか？」

「ああ……男の声だつた

「だな……」

「うん……」

……4人全員聞こえたつて事は、ただの厨二病の症状じゃないつてことだよな……一体何なんだ?

『私たちの為に、戦つて欲しいのつー!』

「うわつー!?

「……」、今度は女性の声……!? しかも、どこかで聞いたことのあるような……!?

頭が混乱して、訳が分からなくなってきた頃。

基が、ぱたりと倒れた。

「基つー!?

そして、幸仁【が。

「幸仁……!」

最後に、崩れていいくかのよう【に俺の身体から落ちていく慧。

「け、慧……」

何が、どうなつて 。

次の瞬間だつた。

頭が少しづつぼーっとしていく感覺。身体の力が無くなっていく  
感覺。

数分後。

その場には、誰も居なかつた。

「別れの言葉は、要らないよな……」（後書き）

『遊戯王 僕らの進んで行く道』の方と合わせて、感想、評価などお待ちしております！！

「……現実逃避して良い?」

「……え?」

「ハハ、どうだ?」

朝なのか曇なのか分かり難い明るさの空。眼を細めて遠くを見つめるとい、山や海、ガラクタの詰まれた場所……様々などころが見える。

……俺、そんなに眼が良いわけじゃないから見間違いだろつ。若しくは夢だ、間違いない。

やつて俺は頬を抓る。捻るよ<sup>ねじ</sup>り引っ張つた。

「……ひたひ」

馬鹿な……そうか、これは痛みのある夢なんだ!

『お皿覚めですか』

「うひやあつー?」

だ、誰だつ……?

視線を後ろにやると、誰も居ない……訳も無く。半透明で、皿つ皿を浮いている黒い魔道服を着た男性。勿論、右手には杖。

。

「夢だ……皿の前に『ブラック・マジシャン』が居るなんて夢だ……」

「つー

通称B.M.。アニメでパンチラって奴が使つてたギャル風B.M.じかなくて、普通の……普通のつて言つのも変だけど……武藤遊戯が使つてたB.M.だ。

つまりは……マハーダだ、うふ。

『おはよつ、マスター』

「……は？」

……え。まさか、そんな

ブ……！

『《ブラック・マジシャン・ガール》……？』

『マナつて言こまへす。』

「ハハハ。あ、可愛い。

じゃなくて！ え、つまりどうこうこと！ つか、その服、力  
一ドで見てた時も口口いなあ、なんて思つてたけど……実際見ると  
もつとヤヴァイ……！

「やつぱ……夢だ……

しかし、夢でもB.M.G.に会えるなら別にこのままでも……げふん、  
げふん。

『夢では有りません』

「こやこやつ……！ それが夢じゃければ、何が夢なんだよー。」

『ん~、将来の夢?』

……間違つてはいなければ。

「……万が一……万が一、これが夢じやないとしたらわ……なんで俺を呼んだんだ?」

『マスター……燈夜殿には、世界を救つて頂きたいのです』

……何、そのテンプレ発言。

「世界を……救う?」

そりや、アーメではそんなよつなこと起りつてたけどじや。

「……訳わかんねー」

『私たちにも原因は分からぬだよね。なんか突然、色々な世界が崩れ始めちゃつて……既に2つ、滅んじやつた世界もあるし』

は……滅んだ世界? 世界つてやつぱ複数あつたのか? 小説を書いてる身として、異世界の存在があれば良いなー、とは思つてたけど……。

けど、俺は素直に喜べない。滅んだ世界があるつてことは、その世界に住んでいた人たちは死んじやつたつてことだ。

残念ながら、BMとB MGの表情は重い。とても嘘を吐いているように見えた。

「マジ……なんだよな?」

『ええ。そして決まって、滅ぶ世界は「デュエルモンスター」ズ……地球で言う遊戯王が盛んな世界なのです』

もしこれが夢じやないとして、と考える。

今、俺が居るこの場所は精靈界つてところだらう。アニメで見た風景よりもちよ～と違つけれど、B.Mたちが居るんだから間違いない。

そして、遊戯王が盛んな世界。アニメの世界みたいな「デュエルモンスター」ズが絶対の世界もあるんだし、地球は盛んじやない方なんだろう。

そして、何よりも…… B.Mは言った。世界を救つて欲しい、と。

原因が分からぬのに世界を救つて欲しい……つてことは、多分遊戯王が盛んな世界に俺を行かせて、原因を探らせようという魂胆だろう。

「……なんで俺なんだよ？」

『私たちが選んだんだよ。マスターなら世界を救つてくれる、って!』

「……買ひ被りすぎだろ……ん? なあ、つーことは慧たちも……?」

『彼らも世界を救つてくだれる勇者に選ばれたのです。尤も、選んだのは私たちでは』『わこませんが』

つてことは、あいつらもこの世界のどこかに……。

俺は一度、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着かせて、腕を組む。

「……最後に確認。本当に……ほんとーに、夢とかじや無いんだよな？」

『うそ、夢じやないよ~?』

「…………はあ~」

おーけー、夢じやない。信じよつ。B MGが折角笑顔を向けてくれたんだから信じない、なんつー選択肢は無い。  
ただ……信じる代わりに一言言わせてくれ。

「……現実逃避して良い?」

『駄目です』

即答だった。

アニメで相棒や王様、勿論霸王とかが居た世界とはまた違う世界。  
俺は『ブラック・マジシャン』と『ブラック・マジシャン・ガール』……もとい、マハードとマナの導きによつてこの見知らぬ世界に降り立つた。

観衆の元じやなくて良かつた……なんて安堵の息を零す。

あ、そりそり。

BMやBMGの如前はアニメで出したマハーダやマナなど、王様が使用してた存在とは違うんだってさ。俺はそれよりも、王様達が別の世界で実在していた事が驚きなんだけど。

それはともかく、マハーダとマナは正真正銘、俺が初めてのマスターらしい。

人の居ない路地裏を抜け、俺は日の光を浴びた。空には雲一つ無く、地球と変わらぬ広い青空が世界を包んでいた。

ひゅー、と駆け抜ける風は髪を撫で、柔らかく揺れる。

「やうこや、慧たちむの世界に来てるのか？」

『うん、居るよ。一番早い基さんなんて、半年も前から来てるし』

「は、半年ー？」

なんでそんなに時間が空いてんだ……？

『この世界と精霊界は、時間の流れ方が違うのです。幸仁殿は4ヶ月前、慧殿は2ヶ月前に来ています』

……そらのなか。

はあ……しつかし、やつぱり夢じゃなかつたんだな……。

改めて、俺は辺りを見渡す。

この世界はアニメの世界と同じく、デュエルモンスターZが中心の世界だ。道行く人の全員が様々な色のデュエルディスクを手に付けているし、そこらにある店舗の半分以上がカードショップだ。

……カードショップだらけって……競争が激しそうだなあ。

「わい……」れからびすつか……

当たり前だけど、俺は金が無い。いや、元々金欠気味ではあったんだけど……文字通り一銭も無い今よりはマシだった。

そのままじや、世界を救うなんつー大業を成す前にのたれ死ぬぞ。

「きやつ……！」

「ん……？」

女性の声……？

きょろきょろと視線を巡らす。すると、視界の端に路地裏へ連れ込まれていく女性の姿が見えた。周りの人たちは見て見ぬフリをしている。

「…………」

連れ込まれた……？

助けに行かなきや、という気持ちと怖い、という心が交差する。

俺は暫くその場に立ち尽くし、唇を噛んで顔を背けた。

『助けなくて良いの、マスター？』

隣にふわふわ浮いているマナ。

そりや、助けたいぞ……けど、『昔』とは違うんだ。『昔』みたいに無鉄砲じやないって自覚しているし、子供でもない。助けたところで、俺に利なんて無い。

そうだよ……普通なんだ。自分の事だけ考えてれば良い。

「こんな身体になつちやつて……。

「俺は…………」

燈夜に愛される資格、無くなつちやつた。

「…………」

バイバイ。

「……チイツ！」

何、迷つてんだ……俺。後の事なんて考えるなよ……俺らしくねえぞつ！？

一気に路地裏へと脚を動かした。恐怖で奮え、止まつてしまつそうになる度に心中で喝を入れ、走りながら大きく深呼吸した。

路地裏では、3人の男が居た。金髪に赤髪、それと茶髪野郎。少し離れた場所に4つのデュエルディスクが転がっている。1つはピンク色だし、女性のやつだろつか。

アニメで見たデュエルアカデミアの制服みたいな服装は破り千切れ、スカートも切られている。純白の下着がモロ見えだ。プチン、と。

何かの糸が切れる音がした。

「よお……樂しこことしてんじやねHの？」

基みたいな口調になる。イライラとする心を落ち着かせるつもりなど毛頭無く、俺は感情のまま身体を動かす。

「なつ、なんだお前……ー?」

「なんもんどうでも良いだろーが。それより、随分と上玉見つけたな、てめえら」「は、なんだよ……お前、混ぜて欲しいのか? 最後なら別に良いぜ?」

茶髪がそう言うと、身体と口を押さえられている女性の顔がさらに絶望の色へと染まつていいく。

「なら、俺も混ぜてもうつかな……」

近付く。片手で女性を触りつつ、俺は手を

金髪の頬をぶん殴る為に振りかぶる。

「がはつ!?

「て、てめ……がつ!」

「ぐふつ……!?

金髪を殴り飛ばし、赤髪の腹を蹴り、茶髪の鼻つ柱をグーで殴る。さまあ見る。

俺は上着を脱ぎ、女性に掛けてやる。きょとんとした表情の女性は少し可愛らしげけれど、今はそんな事を考えている暇は無い。

「大丈夫?」「は、はい……」「そう、良かつた。立てる?」

「ク、と頷くのを見た俺は身体を支えながら立たせてあげる。そ

してデュエルディスクのあるところまで歩いた。  
ピンク色のディスクを持つて、女性に差し出す。

「これ、君の？」

「そ、そうです……」

それを持つて、路地裏から脱出した歩きを進める。

「ま、待てよ……」

「あ、あ？」

やべ、スゲエ殺氣立つた声出た。

茶髪は見事に気絶しているが、金髪と赤髪はよろよろと立ち上がり、  
ついていた。特に金髪はデュエルディスクを左腕に取り付けていて、  
展開させていた。

「おー、デュエルしろよ

……その台詞、まさか現実で聞けるとは思わなかつた……。しか  
もアニメだと、主人公が言う言葉だしな……。

つか、アレか？ デュエルで自分たちが勝つたら女を置いてけと  
か、そんな感じ？ そんなんぜつてーヤダね。  
とは言え……。

(「……遊戯王が主な世界なんだよなあ……仕方ない）

「「めん、俺、デュエルディスク持つてないんだよね……借りて良  
い？」

「あの……私がデュエルします。元はと言えば、私が

「大丈夫だよ。俺は君を助けに来たんだし、最後までケリ付けない

と

ピンク色のデュエルディスクを左腕に取り付けて（初めてだから少し手間が掛かったのは秘密）、多重スリーブに入ってるデッキを装着する。

……良く入ったな……それにしても、俺がいつも使うメインデッキだけケースに入れてベルトに取り付けといて良かった。

俺がこの世界に持つて来た物といえば、このデッキだけだしな……携帯や財布はバッグの中だけ、そのバッグは多分日本に置いたままだし。

デッキがディスクによつて勝手にシャッフルされる。LCDが4000と表示され、その下にあるランプが光つた。

……4000？ マジで？ 無いわー。

……それにしても。

（……何、このランプ？ 充電切れ？）

「チツ、先攻はお前かよ……」

「仕方ないじやんか。あつちのターンランプが光つたんだからよ。ま、後攻だから攻撃出来るし、良いんじやん？」

……」説明どりも。

んじやん、

「デュエルつ！ って言えよつ……」

……あ、すんません。

「……現実逃避して良い?」（後書き）

マナの性格があやふやだ……っ！

そして、コメ（テ）イつて難しいッス。

誰かおせー（泣）

感想、評価等お待ちしております！

「……初めて、だつたんですね」

「えと……俺のターン、ドローします。スタンバイ、メイン入ります」

「あの……何言つてるんですか？」

「へ？」

……えつと、言つて、変？

「う……地球じゃこれが普通だつたしなあ……アニメみたいにデュエルすれば良いんだよな？ つてことはアレか、効果とかも説明するのか？ たるー……。

「《熟練の黒魔術師》を召喚しま……召喚！」

「……アイツ、なんか変じやね？」

気にするな。

「《魔法族の里》を発動！」

おお、フィールド魔法は横に差し込む場所があつたのか。そういうアニメでもそうだつたな。

辺りに木々が生い茂る。魔法使い族モンスターが住む舞台が整つた。

「自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事が出来ない」

「ちつ……厄介だな」

まあ、デメリットで相手が魔法使いを召喚したり、俺の場に魔法

使いが居なくなつたりしたら意味無くなるんだけどな。特に後者だと、俺が魔法を発動出来なくなつちまつ。

ちなみに、この時《熟練の黒魔術師》に魔力カウンターが乗る。

### 《熟練の黒魔術師》魔力カウンター 0 1 .

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー行くぜっ！」

元気良いな。俺に殴られたからか、鼻の辺りは赤いけど。

「《ジエネティック・ワーウルフ》召喚！」

おお、純粹に強い。

下級通常モンスターでは今のところ、最高攻撃力を持つているモンスターだ。

……ちなみに、遊戯王カードWikiでこのカードを見ると、もしかすると女性かもしれないって書いてあるんだから面白いよな。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「ううん……いいや。俺のターン、ドローっと

「ライフ……4000だろ？ あれ、つーか何で攻撃しなかつたんだ？ 伏せカード警戒？ 俺なら攻撃するのに……まあ、ブレイングは人それぞれだしな。

……一言言うと。

……結構チキン？

「あの伏せ……気になるから、割りに行くかね。俺はまず、速攻魔

サイク

法発動！ その伏せカードを対象にする！』

「チツ……『<sup>リアクティブアーマー</sup>炸裂装甲』が『

……『炸裂装甲』？ 『次元幽閉』じゃなくて？

……まあ、良いけど。

『熟練の黒魔術師』魔力カウンター 1 2 .

うーん……このまま熟練の効果使いたかったけど……ライフ 40  
00だし、別に良いか。

「リバースカードオープン、速攻魔法！ <sup>ディメンション・ドレッジ</sup>自分フィールド上に魔法  
使い族モンスターが存在する時、自分のモンスター1体をリリース  
して手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

……説明つて疲れるなー、つたく。

「『熟練の黒魔術師』をリリースし、『ブラック・マジシャン・ガ  
ール』を特殊召喚！」

『はーい！』

はあ、癒される……。

なんて思っていたけれど、驚いた様子で女性、金髪に赤髪、茶髪  
がマナを見つめている。

……茶髪、いつの間に起きたんだ？ 三沢みたいなエアーマンだ  
な、お前。

「ど、どうして『ブラック・マジシャン・ガール』が……？」

「……なんか悪いの？」

「ふ、《ブラック・マジシャン・ガール》は伝説のカードですよ……！」  
世界で一枚しか作られていないカードですよ……！」

「え……デッキに2枚入ってるけど。

「偽者か……？ いや、偽者じゃあディスクが反応するわけねーし  
……」

偽者なんて失礼な。

「まあ、気を取り直して……さらに《デイメンション・マジック》  
の効果は続く！ お前の場に居る《ジエネティック・ワーウルフ》  
を破壊する！」

「チツ……」

良し、これで相手の場はがら空きだな。

「行くぞ、マナ！！」

『はーい！』

「魔法カード、《賢者の宝石》！ 自分フィールド上に《ブラック・  
マジシャン・ガール》が存在する時、手札またはデッキから《ブラン  
ク・マジシャン》を特殊召喚出来る！」

「え……まさか、《ブラック・マジシャン・ガール》と同じ伝説の  
カードまでー？」

「……プラマジもか。デッキに3枚投入しますけど、何か？

「来い、マハードッ！」

『やつ！』

やべ、デュエルディスク使つてのデュエルつて楽しい！ テンシヨン上がるな、コレ！

場にフライマジとフライマジガールの師弟が並ぶ。ソリッドビジョン  
？ で見るとスゲエ……良い！！

尊・暴・烈・坡!!!

「うあああああああつ！」

金髮 LP4000 2000

「アーマー・マハーデーヴー・黒・魔・導・」

金髮 LP200000

「……大袈裟じやね？」

しかし、本当に氣絶しているらしい男たち三人を見て、俺は凄くスカッとした気分になつた。

「ふわ」

なんて間抜けな声が出てしまつくらい、今、俺が居る家は大きかつた。

それこそ、アニメや漫画、後はTVの中でしか見た事が無いくらいの大きな屋敷。庭もかなり広いし、メイドや執事も大勢。つまりは、

「君つて、お嬢様だつたんだな……」

「そんな、お嬢様なんて……」

その屋敷の中の一室。

無駄にふかふかなソファに座つて、俺は驚きに顔を歪めている。向かい合う形で座つている襲われていた女性はふるふると首を振つた。

「私の事は結姫ユカリつて呼んでください」

「じゃあ、結姫ユカリ……さん？」

「呼び捨てで構いませんよ、燈夜さん」

……それはそれで、緊張するなあ。

彼女の名前は咲之宮結姫さきのみやユカリ。この世界ではかなり有名な企業の三女らしい。アニメで言う海馬コーポレーションとかだろうか。

「本日は、本当にありがとうございました……！　あのままだつたら、今頃……」

「気にはんなつて。当然だろ？」

とか言つて、最初はビビりまくつた俺。けれど、田の前に居るのは凄い美少女だ。格好付けたくなるのは当然……だよな？　ピンク色の髪はセミロングくらいの長さで、凄くさらさらしてゐる。

蒼い瞳は宝石のように綺麗で、ずっと見つめていたら吸い込まれてしまいそうだ。

ドレスの上からでもスタイルは良いし……なんつーか、凄い美人だ、うん。

「それでも……本当に、なんとお礼を言つたら良いか……」

……まあ、気持ちは分からなくないけど。

けど、最初は見捨てようとしたくらいだし、ちつと罪悪感がある……」めん、結姫さん……もとい、結姫。

「あのつ、今日は泊まつて行きませんか！？」  
「はつ？」

「」の子、突然何をつ？

「お礼したいんです。今日はたつぱりお持て成しさせてくださいーー！」

「いや……ほら、ご両親に迷惑だし」

「大丈夫です。この家は私個人の物ですから、父と母は住んでおりません！」

……それ、もっと拙くない？

「それとも……迷惑、ですか？」

「……そんな小動物みたいな顔をされたら……。

「お、お言葉に甘えようかな~」  
「はつー！」

…………断れないって。

凄く嬉しそうに笑顔を浮かべる結姫、ちょっとヒドキッとした俺。勿論、それは秘密だけれど。

それから、凄く大変だった、と言付けしておぐ。

使用人ではなく結姫が作った料理は……正直、美味しいと言つにはちょっと……なんつーか、個性的だったし、結姫の部屋で一緒に寝よう、と言われて一悶着あつたし。

何より、かなり大きな風呂に俺が入つて少ししたら、背中をお流しますとか良いながら結姫が入つて来るんだもんな。勿論、バスタオル一枚を羽織つただけの姿で。

……アレは焦つた。

そして、夜。俺は結局、結姫の押しに負けて彼女の部屋に居座つていた。

現実では始めて見る天蓋付きのベッドに、ピンク色の絨毯。幾つかぬいぐるみも置かれており、なんつうか、ちょっと豪華なところ以外は“普通”的の女の子の部屋だった。

妙にドキドキしながら部屋のベッドに腰を下ろしながら待つといふと、コンコン、というノックと共に部屋の扉が開く。

「お、お待たせしました……」

「…………うう」

当たり前だけど、パジャマ姿だ。黄色いパジャマに身を包み、風呂に入ったせいか頬が紅潮した結姫の姿は……かなり、可愛いし、色っぽい。

俺は無意識にも顔を背けてしまひ。

「じゃ、じゃあ寝るか！」

俺はその緊張感に耐えられなくなつて、結姫より先に布団の中に潜つてしまつ。勿論結姫の場所を空けてだが。力チ、と電気が消される。俺は結姫に背を向ける形で横になつていると、その背中にふによん、と柔らかい感触が……。

「ゆつ、結姫！？」

「温かいですね……」

あ、当たつてる当たつてる……！ 何がとは言わないけど、マシユマロの山が2つう……！！

「……今日は、本当にありがとうございました」

「べ、別にそれは気にしなくて良いって……」

「私、人に助けて頂いたの……初めてなんです」

……え……？

「天下の咲之富家……カード業界や勿論、経済や政界など様々な業界に手を伸ばしている家柄……姉2人は才能があつたのか、どんどん力を付けていきました」

まあ、俺はまだ咲之富家がどれだけ凄いのか分からぬけどそれでも、相当凄いんだろうなあ、と曖昧には分かる。

「……妹も、最年少のプロデュエリストとして、活躍しています……それなのに私は……アカデミアに入学しても、妹には全く勝

てませんし……姉2人にも、置いてきぼりで「……」

「私、捨てられたも同然んですよ。実際、姉や妹は実家で暮らしていりますし……私はこの屋敷を与えられて、複数の使用人と共にここで住め、と……」

気が付くと、結姫の声が震えているような気がした。身体も小刻に震えていて、それが背中を通して俺に伝わっている。

プレッシャー、もあるんだろう。

大きな家に生まれ、育ち、これからも生きていく……その上でのプレッシャーは、俺なんかには想像出来ないものなんだろう。

「今日、私が襲われていた時……心の奥底で思つたんです。ああ、これも良いかな、つて」

「は……？」

「！」のまま襲われてしまえば、自殺する理由が出来るなあ、つて……

……

俺が借りてるパジャマが湿り始めた。

泣い、てる……？

「……初めて、だつたんです」

結姫の腕が俺の身体を抱き締めるように回り込む。脚も絡めて来て、俺の結姫の身体が完全に密着した。

「誰かに、助けて貰うのは……初めてだつたんです……！まるで心の蟻わだがまりが溶けて行く感じがして……」

「ねえ、結姫」

俺は結姫の言葉を遮つて、口を開く。

「敬語、止めて良いよ」

「え……？」

「無理、してるだろ？ 俺はもつ、お前の友達なんだからさ……『気兼ねなんてしなくて良いくて』

「燈夜……さん」

「名前も、呼び捨てで良いくし。なっ」

上半身を起しつつ、まだ少しだけ湿つてこる結姫の頭を撫でる。なるべく優しく、優しく。

「どう、や……」

「何か困った事があれば俺に言え。出来る限りの事はしてやるよ。友達……だもんな？」

「ふ……うええ……」

ちよつとクサかったかな、なんて思つたけど……どうせひこれで良かつたみたいだ。

俺の胸に抱き付きながら、大きな声で泣き崩れる結姫の頭を優しく撫でてやりながら、俺は暫くそのまままで頭でやる。

窓からは、満月の光が俺たちを覗き込んでいた。

「……初めて、だったんですね」（後書き）

小説つて、難しいですね……（汗）

……やっぱりプロットを録に作っていないからツライのか。

ヒロインの人数さえ決めてないしねつ

感想、評価等お待ちしております！！

「なんつーか……運命感じじるな、コレ」

「あ、おはよー」<sup>ハロー</sup>「ます、燈夜さん…」

「ん……おはよー、結姫」

翌朝。

珍しく……とこいつが初めて鳥の轉りで眼を覚ました俺がリビング  
に行くと、既に起きていたらしい結姫の出迎えを受けた。  
そういうや、使用人方が居ない……違う部屋とかかね？

「朝食、出来ますよ」

「ありがと。……とこひで、君が作ったの？」

「い、いえ……。私が作ると……その、美味しくなかつたですし

あ……気付いてたんだ。

なんて思つたけど、口には出せずにあはは、と空笑いしておく。

メイドさんが作つたといつ豪華な朝食の前に俺と結姫は腰を下ろ  
す。

「「頂きます」」

ほぼ同時に食事前の挨拶をして、箸に手を伸ばした。

「ん、美味しい！」

「はい。私のとは大違ひですよね！」

……結構ショックだったのか、お前？

「……今度教えて貰いましょう」

頑張れ。

ちなみに、昨日の夜、口調は碎けて良じよ、とは言つたけれど……昔からこの口調だつたからか、最早これが素なのだと云う。また、呼び捨てだと何故か落ち着かないらしい。姉妹ならともかく。

「さて、と」

朝食を美味しく頂いた俺は、ん~、と伸びをして立ち上がる。隣に浮かぶマハーデとマナに視線を送る。

「んじや、行くかな」

「え……もつ行つてしまつんですか?」

食器を運んでいくメイドさんたちを尻目に、俺はああ、と頷く。

「あの……失礼ですけど、どこに行くか……聞いて良いですか?」

「え? あ~……」

マナに視線を送ると、視線を逸らして頬を搔いていた。んにゅうう……。

「……分かんね。行く場所無いし……適当に歩き回るんじやないかなー」

この世界にや勿論、親や家があるはずも無いし……行く当ても無い。マハーデやマナも、正直今のところは役立たず、つて感じだからなあ……。

せめてもうひとつ準備して欲しかった、うん。

「な、ならっ……」

「へ？ 何？」

顔を輝かせて近付いてくる結姫。  
えと……？

「わ、私と一緒にアカデミアへ行きませんか？」

説明をしてもいい。

今、結姫が通っている第壱デュエルアカデミア 横都校かじどという場所に通っているらしく、今は春休みなんだとか。

後1週間程度で寮に戻るらしいんだけど、その際、俺も編入者として一緒に行かないか、というもの。

「いや、俺、金も持つてないし……学費とか寮費？ とか払えないんだよね……それに、経歴とか無いから編入は難しいと思うよ？」  
「大丈夫です。第壱校は咲之宮家が設立しましたから、例え私でも顔は利きますよ」

「……」

え、何それ怖い。

なんて冗談は置いといて、俺は本気で迷う。

全寮制で、食事や部屋は勿論出てくるし、結姫の話によると島に建っているらしいアカデミア内でアルバイトをする事も可能だとか。

成績も上がれば学費免除、とかで結姫の迷惑にもならなくて済むらしいし……何より。

……今の俺、家無しの上に無一文……うわ、情けねH。

「えと、じゃあ……お願ひします」

「はいっー。」

ホント、いつか恩返ししなきやなー……。

そんな事を思いながら、俺はにっこりと笑つて、この結姫に苦笑を浮かべたのだった。

手続きとかは私がしておきます。私はどこかく、燈夜さんに恩返しをしたいんです！

なんて握り拳を作りながら力説されてしまつたら、俺は何も言い返せない。俺としては、一晩ふかふかのベッドで眠らせてもらつたり、美味しい食事を貰つただけで充分なんだけどな……。

そんな事を言つたら、結姫はまた色々言葉を並べて否定するだろうから黙つておいた。

俺は只今、町を探検中であります。

ちやんとここに帰つて来てくださいね、と念を押されながらも町へと繰り出した俺は、色々なカードショップを見て回りながら進んでいた。

「……なあ」

『どうしたの、マスター？』

俺の声に反応したのは、マナだつた。というより、基本的に俺の傍に居てくれるのはマナらしい。マハードはたまにしか出て来てくれない。

……閑話休題。

「……もしかしてこの世界って、」

『シンクロやエクシーズは無いよ？』

「…………ですよね」

白いカードや黒いカードは勿論、チューナーさえも無いんだからなあ……。俺の予想は大当たりだ。残念な事に。どうするよ……俺のプラマジック、チューナー入つてるぞ？アーカナイトやテンペスター、ライブラなどの魔法使いシンクロモンスターしか基本的に使わないとは言え……はあ。しかも、俺は余りのカードなんて持つていない。カードを入れ替える事すら出来ないなんて……不便だ。

「…………ん？」

テレビだ。ガラスケースの奥にあるテレビに、3人の人間が映つて、俺はふと立ち止まつた。

男2人に、女1人。

銀髪に染めたガラの悪そうな男と、長い髪を結んでいる男。ショートの髪だけど、柔らかい髪質っぽくて結構可愛らしい女の子……

.....?

「は、基！？ 幸仁！？ つて、コイツも……良く見たら慧じ  
やねえか！」

な、なんでテレビに……？ しかも慧に至つては……女装？

.....ほわい？

そつかそつか、コイツラ芸能人になつたのか。慧は……あれだ、  
需要を狙つてとか？

『この3人、実はお知り合いとの事で集まつて頂きました！ 突如  
櫻都町に現れたこの3人こそ、巷で有名なシンクロ召喚、エクシ  
ズ召喚を行う数少ない人材なのですっ！』

あ～、成る程。そういうことか……ちなみに、言い忘れてたけど  
櫻都町とは今俺が居るこの町の事だ。

つまりはアレだろ？ この世界に来たばかりのあいつ等は何も  
知らずにシンクロやエクシーズ召喚をしちまつて、一気に有名にな  
つた。それがこの結果、と。

でも……なんで慧は女装してんだ？

しかも良く見てみれば、基たちが着てているのは昨日、結姫が着て  
いた制服と同じだ。違うところと言えば、基と幸仁が着てているのは  
青だつてところだけ。

慧や結姫の制服は赤のブレザード。

んで……なんで慧は女装してんだ……？

謎だ。

『「Jの3人は今、第壹デュエルアカデミア櫻都校にて、数少ない特待生枠として選出されています！」

「マジか……アイツラ、第壹校に居るのか。

「なんつーか……運命感じじるな、コレ」

「顔が自然と綻ぶ。良かつた……1週間後、俺が編入する頃には会えるんだ。

俄然、やる気が出てきたぜ……！　早く会いてえな！

「チツ、たりー……」

「そう言つな、基」

「るせーよ」

街を歩く3人の男女。正確には格好だけだが。

両手をポケットに突つ込み、元来の目付きの悪さがさうに際立ちながら歩く瀬野基。

後ろで結んだ長い髪を揺らしながら、やれやれ、という感じに肩を竦める瀧川幸仁。

アカデミアの女子専用制服を着込んで、くすくす、と笑みを浮かべている長谷部慧。

「取り敢えず、今日で春休み中の撮影は最後なんだから良いじゃん。ね？」

「チツ……わーつてるよ」

最早芸能人とも大差ない彼ら。実際は約半年ほど前、地球からやつて来た人間だと知る者は居ない。勿論、本人を除いてだが。

「時間は空いちゃったけど、皆集まれて良かつたね」

「ああ、まあな」

「チームLEGENDS……“全員集合”か」

3人で笑う。温かな空気が彼らを覆った。

「これからどうするの？」

「シラネ。取り敢えず、世界の歪みの原因を探すんじゃねえの？」

「そうだな」と幸仁も同意する。

彼らも燈夜と同じく、精霊によつて選ばれた人間達である。しかし未だに、その原因是分かつていらない。

「けど、探すつて言つても……どうやつて？」

「ンな事、俺が知るわけねーだろ。テキトーに待つてりやそつちからくんじゃね？」

「果報は寝て待て、とも言つからな」

尤も、果報では無いのだが……それは3人とも分かつているのか、それに対してもかを言つ事は無かつた。

沈黙が続く。

「なあ……」

その沈黙を破つたのは、基だった。

「…………なんか物足りりねーんだけど」

「うん。僕もそう思つてたところ」

「…………奇遇だな」

何がが、足りない。とても大事な“何か”が……。しかし、考えても考えても思い付く事は無く、時は過ぎていった。

「あ、兄貴…………！」

暫くの後、そつと走つてきたのは3人の男達だった。

金色の髪をした男と、赤い髪をした男。そして、鼻の辺りにガーゼを貼り付けた茶髪の男だ。

「よお！」

「…………また、そういう奴らと一緒に居るのか？」

「別に良いだろ。人の勝手だつつの。じゃあなー！」

手を上げて、基が去つていぐ。その姿を見届けた幸仁は、はあ、と深い溜め息を零した。

「変わらないね…………基」

「…………ああ。…………俺も、この後父上との会談がある。ここにで失礼する」

「あ、うん。じゃあな」

頷いて、幸仁も去つていぐ。

「やつぱつ……なんか、違う」

ぱんつと呼いた慧の声は、喧騒に揉き消されていく。

そして、あつと並んで、一週間が経過した。

「なんつーか……運命感じじるな、『ソル』（後書き）

「メモイ書い『う』としたらシリアルス書いてしまつ……なんてい『う』黙田  
作者。

廃棄人形というハンドルネームもあながち間違いじゃない（汗）

感想、評価等お待ちしております！

「 は？」

第壱デュエルアカデミア 横都校。

特待生枠、5人。今は慧たち3人しか居ないらしいが……それはともかく、かなり有名なアカデミアらしく、時折テレビや雑誌に載ることも多いらしい。

咲之宮家が設立し、早数十年。学費や寮費もそれなりに安く提供していて、且つ設備も良くてプロデュエリストやアイドルデュエリストを幾人も出している功績から、今やこの世界で一、二を争うアカデミアだといつ。

そんな結姫の説明を受けて、俺ははー……としか言い返せなかつた。

執事服に身を包めた格好良い男性に乗せて貰い、俺と結姫は第壱校へと向かう。

「 そういうや、第壱校つて階級みたいのあるのか？」「階級、ですか？」

アニメのGXだと、オシリスレッド、ライイロード、オベリスクブルーに分かれていたからなー。後半はともかくとして、前半のレッドの扱いは酷かった。

特にブルーと教官、クロノスの差別にはアニメながら腹を立てたものだ。

「 ありますよ。第五位から第零位まで」「……」「めぐ、説明お願ひ」

「アニメとは違つただな……世界が違つし、当たり前だけじ。

「はい。一番下の階級が第五位でして、順に第零位まで上がっています。基本的にはテューハルモンスターの成績によつて上下致しますが……家柄などでいきなり第一位、または第一位になることがあるので……」

浮かない顔でそう告げる結姫。確かに、そつこつのはヤダな……。

「ちなみに、お前は何位なんだ？」  
「私は第二位に属しています。学園長には第一位を薦められたんですけど、私は実力で上がりたかったので」  
「へー。俺もそうしたいな」

「ネとかで階級を上げる奴つて、なんか性格悪く感じるんだよな……。

その点、俺は結姫みたいなやつは好きだ。俺みたいな奴に言われてもキモイだけだらうから言わないけど。

ちなみに、その階級によつて寮とかも変わるらしき。制服は変わらず、男が青、女は赤らしい。俺も既に制服に着替えているけど、まだちょっと違和感がある。

ま……そのうち慣れるだる。うん。

「あ……もうすぐ着きますよ」

虎島校長……悪いけど俺、その名前を聞いて少し笑ってしまった。  
だつてアレだぜ？ アニメGXの校長の名前が鮫島だし……え、  
まさか狙つた？ まさかここまで似てるとは思わないだろ、うん。  
と、初対面の人失礼な事を考えながら俺はアカデミアの説明を  
受ける。

……もう結姫に教えて貰つた事ばかりだけど。面倒つたらありや  
しないな。

「ここまでが大まかな説明だ。分かつたかい？」  
「え？ あ、はい……ありがとうございます……」  
「そうか、良かつた。君は第五位からのスタートになるが……」

構いません そう言おうとした時だつた。

部屋の扉がノックされた。虎島校長がどうぞ、と許可を出すと扉  
が静かに開いた。

「失礼しやーす」  
「……失礼します」  
「失礼します」

3人の声。ダルそうに欠伸をしながら中に入つてくる男性が1人、  
物静かに入つてくる男性1人、そして赤い女生徒用の制服を着た人  
1人……。

「基！ 幸仁！ それに慧！…」

そう、その3人だった。

「あ？」

「よ、元気だったか！？ 良かった、この学校に皆が居てさ。実はちょっと不安だったんだよな～……」

結姫が居てくれたとは言え、彼女は階級が違う上に性別も違う。例え同じ階級になれたとしても、男性寮と女性寮に分かれてしまうだろう。

そうなると、どちらにせよ結局は“独り”で頑張る事が多くなってしまう。

と、なると。

俺はやつぱり、皆に再会できて良かったな、って思つ。

そう、俺が安堵の息を漏らしている時だった。  
女性用の制服を着た慧が、首を傾げる。

「…………君、誰？」

「…………は？」

あれ、俺の聞き間違い……か？ それとも人違いかな？

「えと、『じめん……瀬野基に瀧川幸仁……長谷部慧、だよな？』

「…………何故俺たちの名前を知つている？」

「いや、だつて…………え？ ジやあ、その…………地球から来たんじ

「…………や」

いきなりだつた。

俺の言葉を遮るように、基が俺の胸倉を掴む。そして……まるで

仇でも見るかのような鋭い視線を俺にぶつけた。

昔の基を思い出す、冷たく悲しげな視線……！

「テメエ……なんでそれを知つてやがんだ、あア！？」

……やつぱり、基たちは地球……日本から来たんだ。俺と同じで。  
「……冗談、だよな？ ほら、基つてさ……幼馴染居ただろ？ 中  
学ん時にやんちゃしてる時も、ずっと傍に居てくれた……幸仁は大  
学生の彼女が居て、すっげー大事にしてる……慧、お前は男だろ…  
…？ 高校に入つてすぐ、電車の中で痴漢されてさ……泣いてただ  
ろ？」

まさか、という不安が胸中を支配する。基は俺の胸倉から手を離  
して、鋭く睨み付けながら口を開く。

聴くな。

そう制止が脳内で響くも、俺の耳朶は基が発する震動をキヤツチ  
する。

低い……それこそ、針のよつに俺の心臓を抉るものに近い言葉の  
棘……。

「……テメエ、何モンだ？」

棘が、心臓を突き刺す。

「僕の性別も知つてるなんて……それに、なんでそこまで詳しいの  
？」

「それは……  
「怪しいな」

「…………そう呟いた声に反応して、墓があん、と口元を歪ませる。

「テメエ、アレじやねーか？ 精霊どもが言つてた世界の歪みつてのを引き起す存在つてのは」

「はあー？」

「成る程な。一理ある」

ねえよつー

さうい反論しようとしたら、後ろでずっと傍観していたらしい虎島校長の制止によつて止められた。

……空氣読め。

「じつせり、君たちには何かしらの事情があるみたいだが……悪いがこれでお開きにして貰いたい。もう少しで式だ」

「……チツ

確かに、結構な時間が経つている。

第壹校では、教室が1つしかない。それに全ての階級の生徒が集まり、様々な式や講義を受ける事になる。

尤も……アカデミアが行うデュエルトーナメントとかを行う場合はデュエル場で開会式が行われるらしいんだけど。

「…………では、1つ提案が御座います、校長」

「何かね、瀧川君」

相変わらずの長い髪。幸仁は一步前に出た。

「本日の新期式にて、1つの余興をしてはどうでしょ？」

「余興、と？」

「はい。我々、特待生の誰か1人と……本日からこのアカデミアで過ごすという彼のデュエルです。聞けば、咲之宮家のご令嬢のお知り合いらしいですし……良い見世物にはなるかと思われます」

「……相変わらず、ペラペラと言葉が続くな、こいつ。

「成る程……それは良いかも知れないな」

「……僕がやるよ。僕にやらせて欲しい」

そう言つて手を上げたのは、慧だった。

「……分かりました。それでは、それでやつて貰いましょう。それで宜しいかな、一ノ瀬君」

「ああ」

相手は慧、か。

俺という存在が忘れられていた事に心が揺れながら、俺は小さな声で返事をした。

「基、幸仁……慧でさえも、俺のことを敵対視する視線に耐え切れず、俺はそそくさと部屋を出たのだった。

新期式……新たな季節と学期の境目を告げるその式を目前に迫っていた俺は、ギスギスした雰囲気のまま慧たちに案内され、第五位の寮に到着した。

オシリスレッドの寮よりも小さな建物は、風呂もトイレも共同らしい。その上ワントームで、物も殆ど置けない。

……今にもゴキブリとか出てきそうだな。

敷かれていた布団の上には2着の制服と黒いデュエルディスク。それと連絡手段のDP。決してデュエルポイントではなく、デュエルストフォンの略である。しかし、生徒全員にDPが支給されるなんて、リッチだなあ……なんて思つたり。

俺は元々着ていた私服を脱ぎだす。すると、何故か後ろに残つたままだつた慧が顔を背けた。

(……相変わらず、だな)

日本に居た時も、俺が着替える時は極力視線を逸らしていたのを思い出す。しかも顔を赤くして。だからマン研のやつらに……略。制服に身を包んだ俺は、携帯大のDPをポケットにしまい、黒いデュエルディスクを左腕に嵌める。カチッ、という音を確認すると、制服のベルトにデッキの入ったケースを差し込んだ。

良し。

「……んで、テメエは何モンなんだよ?」

待つてくれていたのか、俺の準備が終わると同時に基が口を開く。

「………… わあな

「ああつー? 調子乗つてソッといぶすり殺すぞソー.」

つたく、相変わらず柄悪いな、基は。  
俺はそんな姿に溜め息を零しそうになりながら、制服のポケット  
に両手を突っ込む。

「俺は一ノ瀬燈夜。お前らと同じで地球からやつて來たんだよ」  
「一ノ瀬エ? んな奴、聞いたことねーな……なんで俺たちの事知  
つてんだよ」

やつぱり、記憶が無いのか。しかも俺のことだけ。

「は……めげそつ。

こんな事態、マハーデやマナは知つてたのか? 知つてたとした  
ら、教えてくれても良かつたのにな……。

「なんで、つて言われてもな……」

……言つても良いのか? 言つたら思ひ出すかもしれないしな  
……迷う。

と、脳内で考えてみると、頭に直接響くよつた声が聞こえる。マ  
ハーデの声だ。

『言わない方が良いかと思われます。彼らは今、燈夜殿の事で頭が  
混乱しています。その上、貴方が『学友だと言えば、やうに頭を痛  
ませる原因になります』

ふむ……一理あるな。

俺の頭が痛くなりそうだけど……まつ、コイシカの為だ。

「お前ら、結構有名だつたぜ？ 色んな大会で上位に君臨してゐるしな。遊戯王チーム『LEGENDs』の名前つて、外国にも名前を轟かせてたし」

「これは嘘じやない。パソコンで検索を掛けたら、かなりの数が出てきたんだからビックリだ。

「成る程な……しかし、何故基の幼馴染の事や……俺の恋人の事も知つていた？」

「……そのまま流してくれよ……面倒だな、つたぐ。

「いやー、俺つて『LEGENDs』の大ファンだつたんだよね。言わばストーカー？ お前らが住んでる町まで行つて調べちまつたんだよ。ゴメンっ！」

「……」

軽蔑するような慧の視線が俺に突き刺さる。痛い、痛いつて。それこそ汚物でも見るような眼差しだ。特に基の殺氣なんてスゴイ。ただ、全く変わらない幸仁の視線が実は一番怖かつたりするんだよな……はは。

「……どうか。では、俺たちは先に教室へ向かつている。じゃあな」

「ついて来んじゃねーぞ、ストーカー」

「……それじゃあ」

冷たい瞳のまま、3人は部屋を出て行く。結局、慧が女生徒の制服を着ている理由を聞けなかつた。

『マスター……』

「…………わらい、ちょっと1人にして」

耳鳴りがした。

毎回毎回、話のタイトルで頭を悩ませます……。

そういう小説書いてる方は、曲聴きながら書いてます?

私はWALKMANで大音量ついてるwww

ただ、友達は集中出来ない（歌つっちゃつ）から聴かないみたいですね。

監さんまだひりですか??

感想、評価等お待ちしておりますよー。

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だつたんだ

……新期式。最早俺にとつては入学式と言つても良いソレを受けながら、俺は内心溜め息を零しながら思つ。

……ビニの世界も、校長の話つて長いんだな。

かれこれ30分は経つてゐるんぢやないかと思つぼどじに長い口上が並べられている。良くもまあ原稿も無しにやじまで話せるもんだ。場所はこのアカデミア唯一の教室。

階級ごとに分けられた席順だが、非常に面白い事に、第五位は俺しか居ないらしい。周りは空氣だ。三沢的な意味ではなく、本当に。しかも一番前の列だから、寝る事も出来ない。

「……たりー」

つい小声で呟いてしまつほどには、俺の気は削がれていた。

正直これっぽっちも興味が湧かない虎島校長の話は無視して、俺は教室を視線だけで巡らす。

壇上に居る校長と教卓。その背後には巨大なスクリーンが天井から吊りられている。妙に近未来的な学校だ。教科書やノートなんて物も無く、席には備え付けのノートパソコンが置いてあるんだから。

ちなみに、このノーパソはDPを掲げる事によつて識別番号を認知し、その人個人の情報が表示される。

……DPを落としたら大変だな。

んで、その校長から少し離れた場所に居る優男風の男性。若いけれど、あれで教頭先生らしい。地球の時のイメージが大きいから、

凄く違和感。

その教頭先生の隣に特待生の3人 慧、基、幸仁[が並んで立っていた。

さらに離れて、生徒会長や生徒会副会長など。

一段上がつて、後ろの列には誰も居ない。本来ならその列も第五位の生徒が使うはずだからだ。

そのまた一段上ると、第四位の生徒。そこから2段上がつて、一番数が多いという第三位の人たち。

（以外と女性、多いんだな……）

さりに上……ここからは流石に確認すると、校長たちにバレる。けれどその辺りは第一位のはずだから、結姫はその列のどこかに居るはずだ。

……後で挨拶しないとな。

「 では、私の話はこれで終わりにする」

ふう……やつと終わつたか。

「 虎島校長、ありがとうございました。それでは……ここで、催し物を用意致しました」

催し物？ つてなんだ？

なんかのイベント……？

今までこんなのがあったか？

そんな声が後ろから聞こえてくる。

「まずは本日より第壱デュエルアカデミア 横都校に編入した人を紹介します。どうぞ、前へ」

「あ、はい」

「うわ……結構緊張するな。CSの表彰式に上がった時よりも緊張する。まだデュエル動画撮つてた方が良いな、こりや。」

「えと……一ノ瀬燈夜、です。第五位からのスタートになりますが、皆さんに追いつけるように頑張りたいと思います。宜しくお願ひします」

「良し、結構良い印象与えたんじゃないかな？」

なんて頭を下げながら思つたけど、拍手が疎らだ。それこそ、多くて5人くらい……？

顔を上げる。

……本当にすくねえ。

結姫は大きく拍手してくれている。けれど、それ以外俺に拍手で出迎えてくれているのは2、3人くらいだ。

なんか……もしかして、皆暗い？ 人の事言えないかもだけどさ。

「今回の催しは、彼と特待生の1人、長谷部慧さんとデュエルしてもらう事です」

生徒会長（らしき人）がそういうと、慧が一步前に出る。

最近久しく見ていなかつた真剣な眼差しが俺に突き刺さる。と同時に、何故か教室内に居る男子たちに殺氣が出てきた気がする。

「……どして？」

「もしかして、アレか？ 慧つて人氣者？」

「それでは、デュエルスタンバイをお願いします」  
「あ、はい」

「おおっ！ 教卓が床下に沈んでく！」  
「面白いなー。」

なんて感想を持ちながら、俺はある程度距離を置いて横側に付いているボタンを押してディスクを展開する。

黒いスリーブに入つたプラマジックキーディスクにセットすると、勝手にシャツフルされた。

5枚引く。充電切れ……もとい、ターンランプ？ が光つた。

「始めよう、一ノ瀬さん デュエル！」  
「で、デュエル！」

「は、恥ずい……。」

彼を一目見た時、僕は妙な懐かしさを感じた。

漆黒の髪に黒耀のような真っ黒い瞳。正直、容姿は良くも悪くも無く、平凡。咲之宮家のご令嬢と知り合い、という幸仁の言葉も少し……信じ難い。

けれど彼は、“何か”ある。僕はそう直感していた。

「えと、俺の先攻で良いんだよな……ドローーー！」

彼は僕たちと同じ、地球の日本から来たらしい。もしも同時期にこの世界へ飛ばされたのだとしたら、環境から見て、代行天使や暗黒界とかの可能性が高い。

用心しないと。

「うし。俺はまず、『魔導戦士ブレイカー』を召喚！ このカードが召喚に成功した時、魔力カウンターを一つ置く。それに伴つて、攻撃力もアップ！」

『魔導戦士ブレイカー』魔力カウンター 0 1 ATK1600

1900 .

ブレイカー……かつて禁止カードにもなった、汎用性のある闇属性、魔法使い族モンスター。

確か昔の選考会で、採用率が1位だったんだよね。  
けれど色んなデッキに入るとは言え、これで代行天使や暗黒界の可能性は下がった……かな。

「ターンエンドだ」

「僕のターン、ドローー！」

……まだ基や幸仁には敵わないけれど、これでも第一位の特待生。それに、

「ストーカーさんは、負けられない……！ 僕は《召喚僧サモンプリースト》を召喚！ このカードは召喚した時、守備表示になる！ そして、手札の《古のルール》を捨てて、デッキから《E・HERO プリズマー》を特殊召喚！」

今、手札に上級モンスター やそのサーチカードはない。僕はスカートのポケットの中に入っている一枚のカードに手を伸ばす。

「そして、プリズマーの効果を発動！ エクストラデッキの《E・HERO ネオス・ナイト》を見せて、デッキより、その素材の1枚……《E・HERO ネオス》を墓地へ送る！」

このカード、欲しいのか？

ま、俺は使う気ねーし……やるよ。

コレを機に、お前も遊戯王始めるのか？

ちくつ、と……微かな痛みが僕の頭を襲う。

「つ……僕は、LV4の《召喚僧サモンプリースト》と《E・HERO プリズマー》をオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築……！ エクシーズ召喚！ 《ダイガスター・エメラル》ツ！」

「うあ……やつぱりか」

特殊召喚されるエメラルの周りには、緑色の球体が2つ飛び回っていた。

「　念の為、知らない人が居る可能性もあるので説明しておきます。彼女……長谷部慧さんや瀬野基君、瀧川幸仁君はかの伝説の力ード、《E・HERO ネオス》、《青眼の白龍》、《真紅眼の黒龍》<sup>ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンレッドアイズ・ブラック・ドラゴン</sup>を使用しています。そして且つ、謎のシンクロ召喚、エクシード召喚を行えるのです！」

歓声が沸き起こる。恥ずかしいなあ、もう……。  
一ノ瀬さんも流石に苦笑しているようだ。

……氣を取り直して。

「エメラルの効果を発動！　このカードのエクシーズ素材を取り除き、僕は墓地に存在する効果モンスター以外のモンスターを1体、特殊召喚する！　来て！　《E・HERO ネオス》！！」

出た……このデッキのエース！

うん。僕もやるよ……　君！

一瞬、だけど。

ネオスが僕の方を向いて、悲しげに眼を細めた気がした……見間違い、だよね。

「ばつ、バトル！　ネオスで、《魔導戦士ブレイカー》を攻撃！」  
「うわっ！？」

軽い衝撃が一ノ瀬さんを襲う。

一ノ瀬燈夜 LP 40000 3400 .

「続いて、『ダイガスター・エメラル』でダイレクトアタック！」  
「ぐうう……」

一ノ瀬燈夜 LP 34000 1600 .

「僕はカードを一枚伏せて、ターンを終了するよ  
「ふう……つたぐ、強くなつたな……お前」  
「え……？」

何かを懐かしむように、僕を見つめてくる。

「最初は苛められっ子で、俺の後ろを付いて回るだけだったお前が  
「なんか、すげー懐かしい」  
「あ、え……？」

確かに、僕は苛められていた。女っぽいから、つていう理由だけで。  
そんな僕を見かねたかのように、誰かが助けてくれて……。

あれ。

僕を助けてくれたのは、基？ 幸仁？

誰  
？

「……行くぜ。俺のターン、ドロー！」「

勢い良くカードをドローする一ノ瀬さん。

「俺は手札から、《ガガガマジシャン》を召喚！」

ガガガマジシャン……？

「<sup>ダイメンション・マジック</sup>速攻魔法！」俺の場に居る《ガガガマジシャン》をリリースし、  
来い！《ブラック・マジシャン・ガール》……！」

『れつづ』——。

「なつ……まさか、彼も伝説のカードを！？ 一体どうなつてるん  
だあーつ！？」

生徒会長だけじゃなく、会場に居る殆どの人気が驚いている。  
それは、僕も例外じゃない。

「《ダイメンション・マジック》の効果により、《ダイガスタ・エ  
メラル》を破壊する！」

「え、エメラルを破壊？」

ネオスじゃないんだ……。

ブランマジガールが放った魔法がエメラルに直撃して、見事に粉砕  
する。残ったエクシーズ素材も一緒に墓地へ行つた。

「魔法カード、《賢者の宝石》！ ブランマジガールが俺の場に居る  
時、師匠である《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！ 出て  
来い、マハード！」

『仰せのままに、マスター』

伝説のカード、2枚目。

魔術師の師弟が並び、会場が静まり返る。

「魔法カード、《マジシャンズ・クロス》！俺の場に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、1体を選択！他の魔法使いは攻撃できない代わりに、そのモンスターの攻撃力を3000まで引き上げる！対象はブラマジガール！」

『パワーアップ！』

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK2000 3000 .

「これが勝利の鍵だ……《死者蘇生》！俺の墓地に居る《ガガガマジシャン》を蘇生！そして、効果を発動！1ターンに1度、1から8のレベルを宣言し、そのレベルになる！俺はLV7を宣言！」

《ガガガマジシャン》 LV4 LV7 .

一ノ瀬さんは大きく深呼吸した。  
やっぱり、彼もエクシーズ召喚を……！

「なあ、慧」

「え……」

「俺、本当はこんな事、やりたくないんだぜ？目立ちたくないかつたしさ……俺なんて、地味なモブキャラで充分だつたんだ。けどさ、」

《ブラック・マジシャン》とLV7の《ガガガマジシャン》が、  
小さな光になつていく。

「お前のネオスが、凄く辛そうだからな……感謝しろよな？俺は  
レバフ同士の『ブラック・マジシャン』と『ガガガマジシャン』で  
エクシーズ！ 来い！ 『N.O.·11 ビッグ・アイ』！  
「つ……！」

ようにもよつて、ソレ……！？

「で、伝説のカードだけではなく、エクシーズ召喚さえも行つて見  
せた編入生！ 一体彼は何者……！？」

黒い光となつたプラマジと『ガガガマジシャン』。その中の1つ  
が、ビッグ・アイに吸収されていく。

「ビッグ・アイの効果を発動！ エクシーズ素材を1つ取り除いて、  
相手モンスター1体を選択！」このターン、ビッグ・アイは攻撃で  
きないけど……永続的に、そのモンスターのコントロールを得る！  
じつちに来い、ネオス！」

ネオスが、僕のフィールドから離れていく。  
遠くへ行つてしまつ。

大切なネオスが……。

「あ……」

お前のことは、ボクが守つてやるつて。だから泣くな、  
な？

ボクは一ノ瀬とうやー、これからは、お前の友達だから  
なつ！

「とひ、 や……」

「『マジシャンズ・クロス』の効果は、“他の魔法使い”が攻撃出来ないだけだ。だからネオスは攻撃出来るぜ。元々、ビッグ・アイは効果を使ったターン、攻撃出来ないしな。あ、ちなみに取り除いたエクシーズ素材はブライマジだから、ブライマジガールの攻撃力も上がってるぜ？」

『ブラック・マジシャン・ガール』 ATK3000 3300 .

「バトルフェイズ！ 『ブラック・マジシャン・ガール』で、慧にダイレクトアタック！」

『行くよー！』

「あ……！」

手が、動かない。

赤い火の玉が、僕を襲つた。

長谷部慧 LP4000 700 .

「ネオス……行つけ！ ラス・オブ・ネオス！－！」

『はつ……－！』

ネオスのチョップが、僕に直撃して……。

長谷部慧 LP700 0 .

教室内は静寂に包まれていた。

第五位の編入生に、特待生が負けたんだ。仕方ないっちゃ仕方ないけどな。

俺はデッキをケースに仕舞つて、俺は仕方ないな、と言った感じで溜め息を零した。

「…………無意識に、手加減をしちまつのも…………お前の悪い癖だぜ、慧」

「手加減、とは…………？」

生徒会長がマイクを通して、俺の言葉に反応する。  
俺は肩を竦めて、元の自分の席に戻ろうと背を向けた。

「大方、その伏せカード…………攻撃反応型のトラップだろ。プラマジガールが攻撃しようとしたら、視線がそのカードに向かつたからな」  
そもそも、実はチームLEGENDsで、俺は最弱の部類なんだ。あれを防がれてたら手札は0枚だつたし、危なかつただろうな、うん。

……もつとデッキ、改良しようつと……。

「確かに…………『聖なるバリア・ミラーフォース』」

…………よりもよってそれですか、そうですか。

慧のデュエルディスクから確認したらしいカード。俺は小さく溜め息を零した。

と同時に、教室内の空気が和らぐ。やっぱり手加減してたんだ、とか特待生の人に勝てるわけ無いよな、とか……後、慧タンはあはあ、とか。

最後の奴、潰すか。“アレ”を。

その後。

慧が俺をずっと見続けていた以外は、滞りも無く新期式は終わりを告げた。

「俺なんて、地味なモブキャラで充分だったんだ」（後書き）

タイトル、タイトルが……ッ！

タイトルは後から考えるタイプなので、良いタイトルを考える人は  
尊敬します（笑）

「ああ、可愛いこと思つよ」

第一位、特待生寮の一室。天蓋付きのベッドで横になりながら、長谷部慧は目を閉じていた。

「君、誰？」

「なんで……」

なんで、忘れちゃつていたんだろう。新期式が終わり、數十程度しか経っていない。デュエルディスクは外したとは言え、服装はまだ赤い制服のままだ。

「……燈夜……」

彼は、忘れないで居てくれた。けれど、自分たちを混乱させない為にと嘘を吐いたんだろう。

彼ならそうする。  
彼は優しいから。

しかも、無自覚で……天然なんだ。

「それに惹かれて、僕たちは燈夜の傍に居たんだよ……？」

その言葉に答えてくれる人は、居ない。  
未だに基と幸仁は忘れたまま。

「特徴が無いからリーダー……か。基は照れて、そんな事言つたけど……本当は違うよ？」

段々と涙声になつていいく。

「僕も……基も、幸仁も……君に助けられたんだから。君のおかげで、今の僕たちが居るんだから……なのに、なんで」

なんで、忘れちやつてたの？

自分に問いかけて……答へば出てこない。

「全部……全部、思い出した。僕は」

声にならない声で、呟く。

慧が燈夜と出会ったのは、小学生の時だった。

『お前、本当に男かー?』

『おい、服脱いで見ろよー!』

『もう、止めなよー。ケイちゃんが可哀相でしょー?』

小学校の教室。複数の子供の笑い声が木靈じだまして、幼い慧の瞳に涙が浮かんだ。

喋り方も男らじくなく、仕草も女の子みたいで、顔立ちが可愛らしく、身体付きが華奢で身長が低かった。

その上、明るい茶髪に綺麗なブラウンの瞳は、他の男子よりも随

分違つて見えた。

小さな子供達の間で、田を付けられるのも頷ける。

無理矢理にも脱がせる氣なのか、1人の男子の手が伸びた時。

「まつたしょもねー」としてんのか、お前は？」

慧を面白がつて見ている男子や女子たちと慧の間に割つて入つて  
きた1人の男子。

それが、“一ノ瀬燈夜”だった。

「なんだよ、一ノ瀬。隣のクラスなんだから関係無いだろつ！」

「コイツはボクと同じ人間！ ほら、関係あるだろ？」

「は、はあ？」

何言つてんだコイツ、みたいな眼で燈夜を見付けるリーダーっぽ  
い男子。

しかし、燈夜の言つている事自体、間違つて“は”いない。一応。

「つかお前ら、コイツが嫌がつてんのわかんねー？ だとしたら馬  
鹿だな、馬一鹿！」

「はあっ！？ そ、それくらい分かつてるつづーのー、なつ！？」

その男子の問いに頷く後ろの子供達。流石子供、燈夜の簡単な口  
車に乗せられてしまつた。

「分かつてるならなんで続けるんだ？」

「そ、それは……」

「クラスメイトが嫌がつてる事をやるなんてなー。あつ、もしかし  
て馬鹿じやなくて、大馬鹿さん？ 偉い子はそんな事しないんじや

ない？」

ぐつ、と言葉に詰まる男子。

「け、けどよ……ソイツ、男っぽくねーじゃんか。なんか、オレたちと違うつづーか……」

チク、と慧の胸が痛む。

燈夜は背後に居る慧をじろじろと凝視して、一言呟いた。

「んー？ 何が違うんだ？」

「ひや、ひやひ？」

慧の頬を摘み、縦へ横へと伸ばす。どんどん変わっていく慧の顔に、なんとなく面白くなつた燈夜はふつ、と吹いてしまつた。手を離すと、頬が赤くなつてしまつていい。

涙目になつて頬を押さえる慧に「ゴメン、と一言謝つて燈夜は再び男子達に向かい合つ。

「ボクたちとなんら変わらなくね？」

「え……」

「まあ、確かに髪の色は明るいけど。んなこと言つたらボクとお前じや、ボクの方が背は低いし髪は黒い。そつちの子はちょっと太つてるし、その子は眼鏡掛てるじゃん」

人はそれぞれ、千差万別、十人十色。それを幼い頃から……それも天然で分かつていいからこそ、本氣で不思議だつた。何が違うのだろう、と。

自分も彼も、他の人も、結局は同じ“人間”なのに。

「…………」

燈夜のその言葉に、男子達は何も言えなくなっていた。

「ほらっ！ 人に嫌がつたことをしきやつた時は、まず「ゴメンナサ  
イつて言わなきやね」

燈夜が退いて、男子の背を押す。

「そ、その…………」「、」「めん……」

「ごめん、ゴメン、『免……次々と発せられる謝罪の言葉。慧に詰  
め寄つていた全員が、軽く俯きながら口を開いていた。

「もう良いよ！」「これからは普通に友達にならう？」「ね？」  
「あ、ああ……」

慧が燈夜の方へ視線を向ける。

けれど、その場に燈夜の姿は無く

。

「ふわ～あ」

幼き一ノ瀬燈夜少年は下校途中、大きな欠伸を零した。

眠そうに眼を擦る。

無駄に重いランドセルを背負い直し、帰宅路を歩く。

「…………っ！」

「…………ん？」

声、だろうか。

小さな物音が後ろの方から聞こえてきた。

「…………ノ瀬君ー！」

やつぱり声だった。

後ろを振り向くと、オレンジ色のランドセルを背負った長谷部慧がこちらに向かって走ってきていた。

燈夜の田の前まで来ると、はあ、はあと息を整える。最後に大きく深呼吸して、慧は勢い良く頭を下げる。

「ありがとう、一ノ瀬君ー！」

「は…………？」

意味が分からぬ、と言つた風に首を傾げる燈夜。

「えと…………何が？」

「今日…………助けて、くれて。その上友達も出来たし…………」

「あ～、その事か。アイツラとは仲良くなつてゐる？」

「う、うん。さつままで一緒に居たし…………」

「そつか。んじや、ボクのおかげじゃないな

今度は慧が首を傾げる番だった。

「確かにきつかけを作ったのはボクだけじゃ。結局その後、その子と仲良くなれるかは自分次第でしょ？もしボクが君だったら絶対仲良くなれなかつたもん」

それは胸を張つて言えることだらうか……しかし、燈夜は絶対！と言つて頷いていた。

その姿に、慧がふつ、と笑つてしまつ。

そんな慧に、燈夜もははつ、と笑みを浮かべる。

「それにさ。お前、良く男っぽくないとかなんとか言われてたじやん？けどそれって、可愛いって言われてるんじゃないの？」

「可愛い……？」

「そ。男だらうが女だらうが、可愛いは褒め言葉だと毎ひつよ。自信持てば良いじやん」

ふと。

本当にふと、気になつた事がある。

「その……一ノ瀬君も……僕の事、可愛いって思つたり…………する？」

「ああ、可愛い」と思つよ

ドクン、と……心臓が高鳴る音がした。

小学3年生。

一ノ瀬燈夜と、長谷部慧が初めて出会つた時の事。

「ああ、可愛ことと思つよ」（後輩）

今回は少し短めでした。

うーん、文字数は基本的に4000文字前後を目指しているんですけど、読者にどうすればどちらが良いんでしょ?……?

「……あハ、『マキホール』踏んだ」（前書き）

タイトル？

狙いましたが何か WWW？

「……あつ、『キボール』踏んだ

「凄いですね！ 特待生の方に勝つてしまつなんて「  
ま、手加減されてたみたいだけな」  
「それでも凄いと思いますつ。ただでさえ第五位の人人が特待生の人  
とデュエルする事は珍しいのに……」

あ、やつぱりそなんだ。

とすると、アレかな？ 第五位や第四位の人つて、“ドロップア  
ウトボーキ”みたいな感じに言われんのかな？  
うは……憂鬱。

新期式の片付けは第三位から第五位の人人が行つりしく、丁度その  
片付けが終わつたところだ。  
手伝いたいと言つたが断られた結姫は、どうやらずっと待つてい  
てくれたらしく……これがリア充つて奴か！

「ここが購買になります。購買ではパンやジュースなどは勿論、様  
々なパックが置かれています」

「へ~」

ソレは良いんだけど……金がね。

いつか結姫にも借り、返さないと行けないし……この購買辺りで  
アルバイト出来ないかな？

「ん？ へえ、パック以外にもカード、売つてるんだな」

一種のカードショップだ。ガラスケースの中に幾枚かのカードが  
あるし、ばら売りされてるカードも多々だ。

「ちよつと見ていいか?」

「ええ、勿論」

さんわゆ、と言つてガラスケースの中を見していく。流石に日版ばかりで、米版や韓版は無い。

「……そういや、今俺が喋つたり読んだりしてるので、日本語だよな? けどここは地球じゃないし……お金の単位も円だし……うーん?」

まあ、良いか。

「えと……『聖なるバリア・ミラーフォース』……に、2万!?」

「……? 何を驚いているんですか?」

「え? えと、え? いや、な、なんでも……」

た、たけえ……俺の予想以上にたけえ……。

「『激流葬』……4万……『奈落の落とし穴』……1万2000円……はは、んなアホな」

「冗談は効果だけにしておけってんだ!」

「なあ……!」の購買つて、カード売ることは出来るか?」「はい、出来ますけど……」

「はつ! しまつた、ブライマジック以外のカードは“向ひつ”じゃん……。

『燈夜殿』 地球に置いたままのカードは全て持つてくる事が可能で

すが  
『

「宜しくお願ひしますマハード様」

「な、何してるんですか……？」

はつ……マハードやマナ、結姫たちには見えないんだった……。  
端から見ると、何も無いところに突然頭を下げた変人の絵が……！

ははは。周りの視線が痛いぜ……チクショー。

「……つ、次行こつぜ？」

「え？ あ、はい……」

止めぬ……そんな眼で俺を見るなーッ！

その後、校内を案内されている間……結姫の視線が少し、痛かつ  
たです。

『マスターつて、結構お馬鹿さんだよねー』

「本当の事を言つのは止めようか、マナ。傷付くから

地球上に置いて来てしまったカードを持って来て貰つた。  
そんで、一言言つと。

## 「部屋、狭いツス」

ただでさえ狭いのに、俺のカードが散乱してもうグチャグチャだ。取り敢えず布団が敷かれているところだけは確保。これで俺は眠れる。誰か来たとしても、後1人くらいなら座れるスペースもある。良し。

後は、このカードたちを残す分と売る分に分けるだけだ。

「面倒だけど……やるしかねーよな」

なるべく早く結姫の負担を無くさないと。  
それに、

（何か作業してれば……慧たちの事、考えずに済むよな）

まず、使わない分のカードを集めよう。  
うーん……本当ならラマジックを使いたいなーって思つてる  
んだけど、なんか伝説のカードらしいし……他のデッキも使おうか  
な？

あ、けビシンクロやエクシーズは重しないと……くう、シリイ。

「……先に、使用するデッキ作つまつつか。あー、今日は徹夜か~」

頑張つてつ！ というマナの声援が横から。  
うん。ボクはその声だけで頑張れるよ！ きっと。

なんて自分に喝を入れていたら、ちょっとボロい扉がノックされ  
た。

こんな時間に誰だ……？ もう夜の8時だぞ？

「は～い。ちょっと待つて～あつ、《ゴキボーリ》踏んだ。ゴメンっ！」

ふう……犠牲は《ゴキボーリ》だけだつたか……お前のことは忘れない……決して。

ガチャ、と意外と良い音と同時に扉を開く。そこには、妙に暗い表情のした……、

「慧……じゃない、長谷部……さん？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「燈夜……」

……？

つか、第一位の特待生がこんなところに来て良いのか？ 多分だけど、この学校……もとい、アカデミアも前半のアニメGX同様差別が激しいし、来ない方が……。

なんて思つていると、突然慧がぱつ！ と頭を下げる。

「ゴメン！」

「へ……？」

わっつ……？

「全部……思い出したんだ。一ノ瀬燈夜……18歳、高校2年生……留年しちゃつたから、僕や基とは学年が違うんだよね……」

「え……思い出したのか、俺の事？」

「うん。チームLEGENDsのリーダーは、僕の大切な人だよ」

そつか……そつか……っ！

俺は喜びの余り、慧に抱き付いてしまった。

「と、燈夜……つー？」

「良かつた……俺、なんかすっげー寂しくてさ……他人の空似だつたらどれだけ良かつたかつて……何度も、何度も……！」

「燈夜……」

それ程、俺は弱い人間だった、ということだらう。

1人じや何も出来ない。家族、友達……傍に誰かが居ないと、俺は孤独に耐え切れず壊れてしまう。

マナやマハード、結姫が居たから良かつたもの……1日でコレだ。コレが数日、数週間、数ヶ月とあつたら……。

「ゴメンね……燈夜」

「……ああ、ありがと、慧。落ち着いた」

数分、だろうか。

俺は暫く慧に抱き付いたままだつた。

「ここじゃ何だし、中に入るか？ つっても、スゲエ散らかってるけどな」

「え……えと、良いの……？」

「何遠慮してんだ？ ほら、入れよ」

……相変わらずの散乱で。

なんとかカードとカードの間を通りて、ベッドの位置まで移動する。

ふう、と息を吐きながら腰を下ろし、カードを纏め始める。

「マナ、茶頬んで良いかー？」

『んー』

「えと……燈夜、マナって誰？」

ああ、そつか。慧はアニメや漫画見て無いから、ブライダルガールって言わないと分かんないのか。

……いや、見てても分からないかな？

「マナー。実体化出来るか？」

『これでもお師匠様の弟子だよ？ そんなの簡単、簡単っ！』

個室に厨房は無い。だから、一度部屋を出て廊下の隅にある厨房まで行かないとお茶を入れることは出来ない。

だから、部屋を出て行こうとしていたマナがふつ……、と実体化する。未だに宙は浮いたままだけど、透き通っていた身体が色を持つた。

「わっ！？ ぶ、ブライダルガール！？ なんでっ！？」

「へ……？ いや、俺の精霊だし。ブライダルガールも認めるぞ？ お前もネオスが精霊だろ？」

「せ、精霊つて……知らないよ」

え……。俺はてっきり、慧もネオスっていう精霊が居て、傍に居るんだと思つたからマナを実体化させたんだけど……。

「マナたちに世界の歪みみたいの、聞かされたんじゃないのか？」  
「う、ううう。僕や基、幸仁が眼を覚ました時には世界の歪みにしての知識が頭に入つてて……」

え……んじゃ、聞かされたのは俺だけって事か?  
マナに視線を送ると、私は知らない、と首を傾げられたり。どうやらその理由は分からぬいらしい。

「……まあ、良いか。それより、お茶お願ひ

『はあい』

情報が少ない今、考へても仕方ないしな。

「ところで、燈夜は何してるの?」

「ん~? 幾つか俺が使いそうなテッキを作つて、残りは購買辺りに売つちゃおうかなって

「売るの?」

「ああ。実はさ、こここの学費や寮費つて、結姫……咲之宮の人が大目に見てくれてるんだよな」

「そつか……確かに、この世界に来た時貰つたお金だけじゃ足りないかもね」

「ゑ?」

「え?」

お金を……貰つた?

「誰に?」

「えと……僕たちをこの世界に呼んだつていう人、だけど

……。

『お茶、お待ちどう

』

「なんじやそりや嗚呼ああああアああああああああああああああ！」

『ひうつ！？』

ンだよソレ……不公平だ、不公平すぎる！

慧也 基也 幸仁也 艶顔立ちが整ってるから あにました  
アレか？ つてか！？ 平凡でスママセンね、チクシヨウつ！

え、と、もしかして

いいえ、何でも御座いません」

くそ……やつてられね！。何が世界を救つて欲しいだ、呼んだのはマハードじやなかつたのか、ああ？  
黒幕つて奴か……せめて顔出せや！

『ま、マスター……？』

「今の俺に近付くと、犯されつぞ」

『それは全然構わないんだけど』

構えよ!!!?

精霊といえど、お前は女の子だろ！？

「はあ～……まあ、良いや。とにかく慧」といふで慧

「え？ 僕を……犯すの？」

「犯さないから！」頬を赤く染めるなつ！

だって…

つたぐ、ドイツもコイツも……。

「お前、なんで女子の制服着てるんだ?」

「あ、コレ? コレは、その……」

……?

顔を俯いて、慧は言葉に詰まっている。そんなに言い辛い事なのか……?

「言いたくないなら別に」

「つづん。燈夜には、聴いて欲しいかな……」

「……」

デッキを作つていた手を止めて、俺は真っ直ぐに慧を見つめる。スカートの裾を掴んで、何度も深呼吸している。勇気を振り絞つているんだ。その姿も忘れないよう、俺は視線を逸らさない。やがて、慧の口が開く。

「燈夜は……つ。性同一性障害って、知つてる?」

「……性同一性障害? それってアレだろ? 身体の性別と心の性別が違うって言つて……」

何度も、俺が書いた小説のネタにしているから調べた覚えがある。ん……?

この会話の流れでその病名を出したって事は……。

「……燈夜の思つてる通りだよ。僕はね、生まれ付きの性同一性障害なんだ」

慧は、自分のそりそりな髪を撫でる。ショートの髪は、慧の中世的な顔立ちと相まって凄く似合っていた。

「身体は男だけど……“私”ね、心は女の子なんだよ?」

「…………」

「この世界に来た時……新しい自分にならうって思った。最初は基や幸仁も一線を置かれてたけど……それでも

「お前つて、スゲエ可愛いよな」

え……、と慧の言葉が止まる。

結構恥ずかしい事言つつもりだし、俺は慧に視線を合わせないよう壁に背を預けて、目を閉じた。

「初めて会った時は、性別とか良く分かんなかつたけど。中学、高校つて進むと……お前がどれだけ可愛いか分かつて来たんだよな」

ま、顔立ちの良さつてだけなら基や幸仁も負けて無かつたけど。

「だつて、そこの女子より普通にレベル高いしさ。デザインが好きだから、とか言つてレディースの服着てた時も、男だとは思えなかつたし」

「燈夜……」

「けど、やつぱりアレだな。基や幸仁よりも一緒に過ごしていた時間が長かつた俺からしてみれば、」

一拍。

「慧は慧だな、うん」

「僕は、僕……？」

「そ。男だろうが女だろうが、一人称が僕だったり私だったりしても、長谷部慧は長谷部慧。俺の大切なダチだ」

昔、慧を苛めてた男子に言つた事と同じ。

「イツはボクと同じ人間！」

性別だとか、病気だとか関係なく。俺は俺であるよつて、慧は慧なんだ。

「あ、あはは……なんか、凄くスッキリした。そつか……僕は僕……うん、そうだよ」

じゅうやう、心の蟠りは取れたみたいだな。わだかま

「あ、けどね燈夜」

「うん？」

「僕、心は女の子だからさ……好きになるの、男の人なんだよね」「あ～、そうか。そりやそうだよな……」

ん？

なんでここでその会話？

ま、まさか……。

「お前……もしかして」

「……うん。僕ね」

「基か幸仁のじゅうか好きなんだな……」

「ええっ！…？」

『『』の流れでっ！…？ マスターってやつぱりお馬鹿さん！…？』

だからやれを囁ひなつて… 本当の事だから余計傷付くんだよ…

「ち、違うよっ！… 僕が好きなのは、ずっと昔から燈夜なんだから

…」

「え？」

「……………っ！…」

ぱり、じ。

綺麗にカードを避けながら、慧は部屋を出て行った。

「……………え？」

『『むつ…………なんか、ヤダな』』

……………え？

……………マジ？

「……あゝ、『ヤキポール』踏んだ」（後書き）

特に書くことが無い……ショボーン。

感想、評価等お待ちしております！！

「絶対、好きになつても、ちがひか！」

あの日……慧から想定外の告白を受けて1週間が経つた。

取り敢えず、俺はあれから慧と話していない。というより、俺が近付くとアイツが逃げるんだ。気持ちは分からぬでもないけど。それと、マナも何故か俺の前に出てこない。なにゆえ何故なにゆえ……？

俺の癒しがつ！？

と、本気7割ハナシ3割の事は置いといて。

俺がこのアカデミアについて分かつた事がある。

「アイツだろ？ 第五位の癖に咲之宮結姫様に近付いてる野郎つてのは……」

「なんで第五位なんかが伝説のカードやエクシーズ使えるんだ？」

「結姫お姉さまに近付いたらコロス……」

えと、うん。

差別はそうだけど、何より結姫の人気が高いといつ事。同じくら  
い慧や基、幸仁の人気が高いといつ事。

はあ。前途多難。

「あ、燈夜さん！」

ついでに言つておくと、俺が結姫に近付いているんじゃない。  
事実は逆である。

「一緒に教室まで行きましょう。」

「…………ああ」

殺気が凄く……大きいです……。

先日、俺は幾つかデッキを作り終え、残りの殆どのカードを購買に売った。勿論、高かった聖バリ（ミラフオ？）や奈落、激流とか死者蘇生を筆頭に。

すると、どうだらうか。俺は凄いお金持ちになつた。

…………まあ、殆どは貯金と学費、寮費、その他諸々で済んでつたケド。

貯金つて大事だよねつ。ここまでこの世界に居るか分かんないんだしなつ！

鋭い死線（誤字じやない）に耐えながら教室に入った。  
と。

「つ…………？」

「…………？　どうしたんですか、燈夜さん？」

「い、いや…………」

なんだ、今の…………？　寒氣…………？

背筋が凍るような感覚。恐怖とかとは何かが違う感情が、身体を縮こまらせた。

そのまま一步が動かせない。結姫が心配そうに俺を見つめ、少し離れた場所では慧がどうしたんだねつ、と首を傾げていた。

「…………そつか」

隣で、声。女性のトーンなのに、妙に低い。

「“テメエ”が、オレの敵か」

振り向けない。口内に溜まつた唾を飲み込んで、俺は唇を噛んだ。  
痛い。

その痛みは俺の身体の痺れを解かす。

「つ……！」

意を決して声がした方 結姫とは逆の方向 へ振り向く。

「だ、誰も居ない……？」

「誰だつたんだ……今の。それに、さつきの背筋が凍るような感覚  
は……？」

「 燐夜さん？」

「あ、ああ……なあ、今隣に誰か居なかつたか？」  
「隣ですか？ いえ、誰も見ていませんけど……」

……一種のホラーだな。

「……うへん、気のせいだな。昨日夜更かししてたから？」

「……そつですか？ それなら良いんですけど……」

そうは言つても。

“気のせい”じゃないって、俺は心の奥底で薄々感付いていたんだ。

「はあ……階級毎の『デュエルトーナメント』ですか」

俺は理解不能、と脳内で完結させながら呟く。

只今、本日の最終科目を終えたところ。正直、俺にとつては基礎中の基礎って言って良い事を習い終えて、さあ帰ろう、と思つたところの連絡事項だった。

「半年に一回、第壹校では階級毎に代表者を一人選出し、トーナメントをする。その順位によって階級毎に評価やカードなどの賞品を貰っている」

……なあ。

それってさ、基本的に第一位の奴が優勝しないか？ 何、その変な大会……馬鹿なの？ 死ぬの？

つか、

「それって、俺が代表になるのは確定じゃんか……」  
「そうなるな」

……わざと言っていますね、名も知らぬ一般教師さん。

「開催は明日の朝9時だ」

「早っ！？」

もつと早く連絡しない、普通！？ 一晩しかデッキ調整はさせないってか！

「一応、トーナメント途中のデッキ入れ替えは認められるぞ」

……それ、余り意味無いよな？

何故なら、この世界の殆どが一人一つしかデッキを持つていなければだ。

理由としては簡単。

この世界では、カード1枚1枚の“価値”が高いからだ。

それと、この世界は地球とかとは違つて、自分のデッキに凄い愛着を持つ。人によつては他のデッキを使うと、「浮氣者！」「とか言われる事もあるくらいだ。

「各階級の者は、開催までに代表者を決めておく事。それでは、解散！」

はあ……帰つてデッキ、調整するかね……。

そう思いながら立ち上がると、制服の裾を掴まれている感覚。

「ん……？」

そこに居たのは、かなり身長の低い女の子。俺の胸にも届かないし、見た目だけなら小学生くらいだろうか。

水色の髪はそれなりに長い。髪の毛をツインテールにしていて、肩に触れるか触れない程度まで下りていた。

表情が読みにくいいなー。元々顔色を窺つてその場を切り抜けるタ

イフである俺は、ひょっと厄介。

「えと……どうしたの？」

「…………逃げて」

「は？」

「ボクから……早く」

そう言つや否や、彼女はその場を立ち去る。まるで何事も無かつたかのよつこ、颯爽と教室を出て行った。

「なんだつたんだ……？」

「うーん……コレ入れたいけど……抜きたいカードがねー……」

これ、デッキ編集の時のあるあるなんだよな？

『私はこれがびみょーだと思つんだけど……』

「俺も思つけども……ピン入れとくと役に立つんだよ……初手率高いし」

マナに協力して貰いながらデッキを改造中。

さつき、久し振りにマナが俺の目の前に出て来てくれた。  
嬉しい……物凄く嬉しいんだけど、なんでこの1週間出て来てく

れなかつたのか、理由は教えてくれなかつた。くそ。

それはともかく。

部屋の中で試行錯誤していると、扉がノックされた。

「はーい」

こんな時間に誰だ？ まだ飯前だし、殆どは自分の寮に戻つてるとと思うんだけどな……。

前みたいにカードが散乱している訳でもないので、スマーズに扉前へ。

開けると、なんか久し振りに間近で見たなー、という感じの慧が。

「慧？ どうした？」

「あの……は、話したいことがあって」

「ん、そか。取り敢えず中に入れよ」

第五位の寮だけあって、暖房設備とかそういうのは皆無だ。中はまだ暖かいとは言え、外は冷えるだろう。中に入つて、前みたいに2人で布団の上に座り込む。

「んで、話つてなんだ？」

顔は赤いし、ずっと俯いているし……多分この前関連、だよな？勢いで俺に告白して来たあの事件。俺はまあ、この1週間である程度整理は出来たけど……本人は違うんだろうなあ。

「あの……この前のこと、だけど」

やつぱり。

「その……小学3年生の時、僕を助けてくれたでしょ？」

「ん……まあ」

自覚は無いけど。

「その時から僕……その、す、すす……好きだつたんだ。燈夜の事……」

「……そか」

「けど……僕は男だし……ずっと、告白出来なくて……数ヶ月間も、燈夜の事、忘れちゃつてたし……」

あ、そっか。

俺はまだ数日しか経つてないけれど、基は半年、幸仁「や慧は数ヶ月もの間この異世界に居たんだけな。

「だから……ね。告白の事……忘れて欲しいんだ」「……ん？ 忘れる？」

うん、と慧は首肯する。

「だつて、気持ち悪いでしょ？ 男から好かれても……」

「男つつたつて、心は女なんだろ？」

「うん……けど、」

「なんか、お前らしくないな」

「え？」

なんつーか、こう……慧は笑つてなきやな。

ただでさえ、基は眉間に皺寄つてゐし、幸仁はクールだし。

ん~、なんて言つたら良いんだ?~、直球で言つたか? それとも遠回しに……。

なんて考えていると、再び扉がノックされる。

今度は誰だ?

慧に断りを入れて、扉へ向かつ。

ガチャ、と相変わらずの小気味良い音が鳴る。

「……お前……」

そこに居たのは、さつき俺に「逃げて」って言つた女の子だった。ただ違うとすれば、さつきはツインテールだったのが今度はポニー テールだった事。

いや、別人か。身長が違う。さつきは俺の胸くらいかそれ以下だつたのに、今は俺と同じくらいだ。

それに、髪の色も。さつきの子は水色だったけど、田の前の子は銀髪。翠色の瞳も、紅だ。

なんで一瞬でも同一人物だつて思つちゃつたんだろう?

それにもしても、顔立ちは瓜二つでくらい似てる……双子?

「よお……挨拶に来たぜ、一ノ瀬燈夜さんよ」

「ん……ああ、うん。えと……?」

「オレは鴻<sup>おと</sup>ソル。まつ、好きに呼んでくれて良いぜ。ビーチ短い付き合いなんだからな」

はあ……たいですか。

「じゃあな。今日は挨拶だけだしよ。ルナに宜しくな  
「あ……はー」

ルナ……？ さつきの背の低い女の子の事かな？  
取り敢えず扉を閉めて、慧の下へ戻る。

「どうしたの？」

「いや……別に。それより、時間は大丈夫なのか？」

もうすぐ夕食の時間だ。DPで時間を確認した慧は、あつ！ と  
声を上げて立ち上がった。

「そろそろ戻らないと……」

「はは、やつぱりか。 なあ、慧

「え？」

まあ、本当は色々言いたい事があつたんだけど、時間が無いし…  
… 一つだけ。

「忘れないからな、お前からの告白。そりゃ、今は世界の歪みやら  
なんたらで返事は出来ないけど……」

ちなみにそれは俺の言い訳だ。

世間は俺を、 “ヘタレ” と呼ぶだらう。うん、自覚してるよ?  
ヘタレで何が悪い！

「お前はお前のまま、真っ直ぐ進めば良いだろ？ 初めて他人に力  
ミングアウトするけど、俺って……まあ、男だらうと女だらうと大  
丈夫な奴だから。別に気にしないし」

まあそれは、慧とずっと一緒に居て、なんか段々と吹っ切れて来たからなんだけど……閑話休題。

「つまりはアレだ、その……俺に好きになつて貰いたいなら、努力すれば良いだろ?」

うわ、最低男の発言だ。自分で言いながらうわ~、つてなる。

「……そうだね。うん。ありがとう、燈夜!」

笑顔。

そう、その笑顔だ。その笑顔を待つてたぜ、慧。

「絶対、好きになつてもうつから。覚悟しておいてよ、燈夜!」

「絶対、好きになつてもいいから」（後書き）

慧が吹っ切れた回。

性別なんて気にせず、慧はこれから燈夜にアタックして行くでしょうね。

そんなことよりつ（酷）、燈夜は男でも女でもOKだという新事実！

その辺りは作者と同じ。

所謂“バイ”ですね、分かります。

感想、評価等お待ちしております！！

「ライバル宣言、しちゃいます！」

「ああ……始めよっか

……いや、おかしいだろ、コレ。

田の前に居るのは、どう見ても教師だ。うん、間違いない。第五位の寮長をやつてる、彰正煉昌先生。アキマサ れんしょう彰正が名前だ。無駄に爽やか顔、基や幸仁並かそれ以上の整った顔立ち。優男つてこいついう人を言つんだなあ、なんて思つたり。

「……いやいや、え？」

今日は朝から、疲れる事ばかりです。

今日は朝から、マナの機嫌が悪かった。

何故かずつと姿を現したまま、俺の隣で頬を膨らませたりしていった。

俺が話し掛けると、ふいっ！ という感じで顔を背けられたり。それだけで俺の一日の活力が無くなつた気がする。

しかも、今は他の人も姿が見える状態。そろそろ登校しないと行けない時間帯だから、姿を消してもらわないと……。

「えと……卅、マナ?」

『……何?』

……怖。

「いや、あの、えと……ど、どつして機嫌悪いのかなー、と」

『…………マスターの所為だもん』

「へ?」

俺が何かした……ってこと? いつ? ま、まさか……俺が寝て  
る時に何かしちまったのか!?

『……? なんで土下座してるの?』

「なんかしなきゃイケナイ気がした」

『…………ふつ』

暫くやつしてると、マナが耐え切れない感じで吹き出した。  
そして、あはは……、と無邪気に笑い始めた。

『ははは……。うん、許す。マスターって昔からやつだし……それ  
に、嫌われちゃつたりするよりはマシだもんね』

なんか良く分からぬけど、許してもらえた……? つか、昔か

「……?」

らつて……見てたのか、俺のこと？  
なんて疑問に思つてはいるが、扉がノックされる。

「燈夜ー？ 一緒に行こーよー」

「ん……慧？」

「わ、私も居ますよー！」

「……結姫も？」

第一位と第二位の人が揃つたぞ。

まあ、良いか。

俺はディスクと複数のデッキの入ったバッグを持つと、DPをポケットにしまい玄関へ。  
扉を開けると……。

(え？)

何故か、慧と結姫が見詰め合つて……うん、嘘。睨み合つていた。

Why?

「え、と……おはよう、2人とも」

「おはよう、とう……」

「おはよづじやーこーも……」

……？ なんだ、2人とも？

『……あ。ゴメン、マスター。姿消すの忘れてた

……なん、だと。

つか、慧はマナの事、知つてるだろー！？

「だつ、誰ですかあの人はつ！？」

「いや、えつと……マナ、です」

「そつか……そういうえば、マナちゃんつて燈夜とずっと一緒になんだつけね……」

「いつ……ー？」

ジト～……。何故か結姫に睨まれるマナ。その睨み 자체は怖くなく、どちらかといえば可愛い部類なんだけど……睨む理由が良く分からぬ。

『あはは～。うん、良い機会だよね』

……何が？ 嫌な予感しかしないんだけど……。

マナはさつきよりもさらに現実味を帯びた。気配というか、温度というか……そういう物がハツキリしたように見える。言つならば、普通の人間みたいな感じ？

そんな感じになつたマナは、突然俺の腕に抱き付く……つてええつ！？

「2人には、ライバル宣言しちゃいま～す！」

「「「つー？」」

「ライバルで……お前、デュエル出来たつけ？」

「「「つー？」」

つか、胸当たつてるから！ その格好で近付こいやらぬええ。

「お……俺、先に行つてるからなつ！」

マナから逃れ、俺はその場から逃走。精霊のマナは近くじやなくて良いのかな、なんて頭の片隅で思いながら走つた。

……朝から凄く疲れた。そんな気がする。

んで、9時少し前。階級別トーナメント開催まで後数分、と言つた感じ。

教室の液晶板に写されたトーナメント表と連絡事項を呼んで、俺は唖然としていた。

例えば。

第一位から第五位の代表者他にも、教師群で1人、大会に参加する人が居る、とか。

教師と第一位以外の人気が優勝した場合、その者は昇格する事が出来る、だとか。

優勝した人は、出来る限りの願いを叶える事が出来る、とか。

第一回戦は、第五位の代表者……俺対、第五位寮長の彰正先生、とか（これ一番大事）。

んで、回想終わり。

場所はデュエル場。1階はデュエルスペースになっていて、2階以降は全て観客席になっている。

その観客席に何故か並んで座っている慧、結姫。俺が視線を送ると、2人とも手を振つてくれた……のは嬉しいんだけど、男からの死線が大きいです、ハイ。

……良く見ると、慧、結姫と並んで座っている人も見覚えがある。

「鴻ルナ……だよな？ 多分」

それはともかく、マナは既に精霊化しています。今回は出番が無いから、俺の傍には居ないけど。

『では、階級別デュエルトーナメント第一回戦、第五位代表者一ノ瀬燈夜対、教師群代表者彰正煉昌先生、始め！』

「先攻はどうぞ、一ノ瀬君。第五位の力、僕に見せてみてよ  
「……俺のターン、ドローー！」

ターンランプは向こうは光つていたはずなのにな……流石、教師群の中で一番人気が高い先生なだけある！

「俺は 『サイレント・マジシャン』『4』を召喚！」  
「へえ……」

イラストでは女性と分かり難い魔術師……サイレント・マジシャンが場に現れる。

幼い子供だから、力も弱い。けれど、

「『レベルアップ!』発動! 僕の場に居るLVと名の付いてるモンスターを墓地に送り、そのモンスターに記されているモンスターの召喚条件を無視して特殊召喚する! 来い、『サイレント・マジシャン』LV8!」

「……それは、子供が大人に成熟した姿。攻撃力は3500もある。

「攻撃力3500のモンスターが、手札2枚消費で出てくるとはね……」「それに、このカードは相手の魔法の効果を受けませんよ」

そう、それが地味に効くんだよね。

ライボルだつたり、地割れ、地碎き……その他諸々。俺の好きなモンスタートップ5に君臨するぜ!」

『ありがとう、燈夜様』

「……へ」

『さあ、一緒に戦いましょう』

……空耳ツスか? 空耳ツスよね?

氣を取り直して、と。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

「では僕のターン、ドロー。僕は『グリーン・ガジェット』を召喚。効果により、デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加えるよ!」「つ……ガジェット、か」

結構な古株ながら、結構な頻度で大会に参戦していた強者だ。つわもの

ただ、俺が知ってるガジェットでは除去が多めだとは言え、地砕きとかが多い。LV8にはそれらが効かないから、怖いのは罠力トラップだ……。

「カードを一枚伏せて、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！」

手札は4枚、か。

「……バトル！ 『サイレント・マジシャン LV8』で『グリーン・ガジェット』に攻撃！」

「モンスターの召喚は無し、か。残念だね……罠発動、『狡猾な落とし穴』！ 僕の墓地に罠カードが無い時に発動出来る！ フィールド上のモンスターを2体破壊する！」

げ……。

今、フィールドに居るのはグリーンとLV8だ。

「ゴメン、サイレント・マジシャン……守れね！」

『仕方ないわ。また、近い内に』

……また喋った。

……コイツも精霊、つて奴だろうか。

まあ、良いか。

「メイン2！ 俺はモンスターをセット、カードを一枚伏せてタ

ン終了！」

「僕のターン、ドロー。さて、厄介なモンスターは居ないし動こうか……僕は手札より、《歯車街》<sup>ギャタウン</sup>を発動する」

が、ガジェットはガジェットでも古代の機械関連の方か！

除去ガジェット、代償ガジェット、マシンガジェット……エクシーズは無いにしても、ある程度の候補の中でもさかそれとは。

こりゃ……パワーで勝てるのはサイレント・マジシャンだけだぜ。

「その顔じゃ、《歯車街》の効果は知ってるみたいだね。聰明で何よりだ。このカードの効果により、アンティーケ・ギアと名の付いたモンスターが必要とするリリースは1体少なくなる。そこで僕は、《古代の機械獸》<sup>アンティーケ・ギアビースト</sup>と通常召喚！」

「うわ……よりもよってそれか……」

歯車で出来た街に、機械で出来た獣。LV6で攻撃力は2000と少なめだが、効果が厄介だ。

まず、《古代の機械獸》が攻撃する時はダメステ終了時まで魔法、罠カードを使えない。つまり《次元幽閉》だつたり《炸裂装甲》、攻撃宣言した後だと《月の書》などが打てないということだ。

2つ目の効果は、《古代の機械獸》が戦闘破壊したモンスターの効果は無効化されるということ。

《巨大ネズミ》、《仮面竜》などのリクルーター、《クリッター》などの中のサーチャー、《異次元の女戦士》なども無効化、ということだ。

「続いて、《ダブル・サイクロン》発動。僕の場の《歯車街》と、君の場にある左側の伏せカードを破壊したいな」

「うわー……やべ」

破壊されたのは、《奇跡の軌跡》だ。ミラクルカス

「へえ……相手にドローをせる代わりに、攻撃力を1000上げて2回攻撃させるカードか。確かにサイレント・マジシャンと相性は良いね」

……まあ、そのモンスターが攻撃した時の戦闘ダメージが0になるデメリットもあるけど。

「それじゃあ、破壊された《歯車街》の効果を発動。デッキより、《古代の機械巨竜》を特殊召喚！」

本当に、大きいな……。

つい見上げて、息を吐いてしまう。

戦意が喪失してしまいそうな程の迫力。

……このデッキでアイツに対抗出来る攻撃力を持つてるのは、サイレント・マジシャンだけだぞ。サイマジ以外で最高攻撃力は1600なんだし。

「バトルフェイズ。まずは《古代の機械獣》でセットモンスターに攻撃！」

「く……モンスターは《見習い魔術師》です」

「リクルーター、だね。けれどギアビーストの効果により、無効化されるよ」

……分かつてるよ。

何の効果も発動されず、《見習い魔術師》は破壊され墓地へ行く。

「続いて、《古代の機械巨竜》で直接攻撃！」

「う、うわああああああああつ……！」

一ノ瀬燈夜 LP4000 1000 .

「、こええ……つい俺も大声を出しちまった。

結姫を襲つた不良さん。大袈裟じやね？ とか思つてしまつてマジすんません。こりや、大袈裟にもなりますね、ハイ。

「それじゃ、僕はターンエンドかな」

「くう……俺のターン、ドローー！」

ふう……落ち着け。

まだ大丈夫。

「その眼……まだ諦めてないみたいだね。さあ、君の力を魅せて見て」

「ええ……行きますよー。俺は魔法カード、《トレード・イン》を発動！ 《サイレント・マジシャン LV8》を捨てて、2枚ドローフ！ く……まだだ！ 速攻魔法、《手札断殺》！ お互いに手札を2枚墓地に送り、2枚ドローー！」

「成る程ね。サイレント・マジシャンと相性が良いカードを二つとん積んでるみたいだね」

勿論。

この『デッキの主役は、サイマジだからな！

「 良しつ！ リバースカードオープン！ 《コミット・リバース》！ 戻つて来い、《サイレント・マジシャン LV4》！」

攻撃力が1000の幼いサイマジが復活する。けど、ゴメン。

子供の君は正直……うん、使い回し。

「魔法カード、『レベルアップ!』」

「一枚田だぜ……引けて良かつた、ホント。

「もう墓地に2枚あるけど……もう一枚はまだデッキの中だ!　『サイレント・マジシャン』LV8!」

『今度こそ、行きましょうか、燈夜様』

「ああ!　バトル!　『サイレント・マジシャン』LV8』で『古代の機械巨竜』にアタック!」

サイマジが放った炎は小さく、とても頼りない。けれどその破壊力は、古代の巨竜なんて目じやないぜ!…

「く……つ!」

彰正煉昌 LP4000 3500 .

「俺はこのまま、ターンエンド」

「まさか、ガジェルドラゴンが倒されるなんてね……君が第五位とは、アカデミアも質が落ちたというか」

いや、それ教師が言つちや駄目な気がするよ?　それに俺の場合、編入したてだからつていう理由があるんだし。

「けれど……僕が担当する唯一の寮生が君とは、僕も鼻が高いよ、燈夜君」

「はは……ありがとうございます」やいります

「さて……僕のターン、ドロー！」

「彰正先生は、何を引いた？」

俺が緊張に身を固めていると、彰正先生はふふ、と柔軟に笑った。

「……カードを信頼する事によつて、デッキは応えてくれる。それほど世界でも一緒に僕は思つてゐる」

「……？ はあ」

「事実、君のデッキも応えてくれている。あの状況を、《ブラックホール》などのパワー・カードを使わずに突破されるとは正直、思つていなかつた」

褒めて、くれてるんだよな……？

なんか実感が湧かない褒められ方だ。

「……僕のデッキも、応えてくれたよ。燈夜君

「え……？」

「僕は《レッド・ガジェット》を召喚。効果により、《イエロー・ガジェット》を手札に加え、バトルフェイズに移行する！」

「……？ バトルフェイズ？

パワーでサイマジに勝てない事は誰しもが分かっている事……魔法も効かないし……はつ！？

「ま、まさか……？」

「気付いたかい？ 《古代の機械獣》で《サイレント・マジシャンLV8》に攻撃！」

「……来る！」

「ダメージステップ、《リミッター解除》！ 僕の場に居る機械族モンスターはエンドフェイズに自壊する代わりに、攻撃力が倍になる！」

《古代の機械獣》 ATK2000 4000 ·  
《レッド・ガジェット》 ATK1300 2600 ·

「くそ……もうギアビーストが攻撃宣言してるから伏せカードが使えない……」

俺の伏せカードは《魔宮の賄賂》。これが使えないんだもんなあ。

「スゲェな……先生の言った通りだ。カードを信頼してれば、本当にデッキは応えてくれるんだな……」

「そう。最近の子は、それを分かつてはくれないんだけどね……」

確かに、そうかもしれない。

けど！

「……先生なら、分かるよな。ダメージステップじやなくて、ダメージ計算時に打てるモンスターカードの事」

「ん……っ！ まさか……！？」

「本当に、デッキは応えてくれたぜ……！ 最後の手札の効果を使う！ 《オネスト》お！！」

《サイレント・マジシャン LV8》 ATK3500 7500 ·

「返り討ちにしてやれッ！」

『流石……新しい主人は違うわね。力が漲つてくるわ』

バトル続行！

『「サイレント・バーニング！！」』

彰正煉昌 LP 3500 0 .

そんなこんなで、俺はテュエルに勝利した。

「ライバル宣言、しちゃいますー!」(後書き)

まだ連載始めて10日しか経って居ないのに、メインの『遊戯王』僕らの進んで行く道』を超える勢いのLEGENDs。

……更新速度って、大切だね。

感想、評価等お待ちしております!!

「ソイツが俺の敵か」

ପାତ୍ରାବ୍ଦୀ

歓声が上がる

快く思ってないとは言え  
第五位の人間が教師を破ったのだと  
り上がらない訳がない。

「本当に、デッキは応えてくれたぜ」……か

ツインテールではなく、ポニーテール。

鋭い視線で喜ぶ——ノ瀬燈夜を見詰めながら、はつ、と鼻で笑う。

「物語の主人公みてーな台詞吐くじやねエか……んなもん、糞喰らえだな」

似非主人公は。  
テメエ

「オレがぶつ潰してやるよ」

「まさか、あそこで『オネスト』とはね……負けたよ」「今日は運が良いみたいですよ」

「運も実力の内、か。君は強いよ。このアカデミアでも指折りにね。僕が保障しよう」

「、」ここまで真っ直ぐに褒められると照れる……。

「お疲れ様でした、燈夜さん。凄かつたです！」

「本当だよ。先生もお疲れ様です」

デュエル場から少し離れて俺と彰正先生が話していると、観客席から降りてきた慧と結姫が近付いて来た。

「ありがとうございます。それにしても、僕に勝つんだから、多分すぐにでも第五位を抜けられるんじゃないかな、燈夜君は」

「そうですね。煉昌先生はこのアカデミアでも強い方ですし、間違い無いと思います」

「そうだったのか。

確かに、俺もかなり危なかつたな。彰正先生は『リミッター解除』を引いたとは言え、俺は『トレード・イン』、『手札断殺』とドロー補助をしてやつと『オネスト』だ。

今回は運が良かつたけど、次やつたらどうなることやら。

「それはともかく、次の対戦は……」

「第一位対第三位だよ」

「第一位の代表者は私です。第三位の人は良く知らないんですが、女性だと言う事は聞いています」

デュエル場の向こう側には、既に1人の女性がスタンバつてゐる。

『早速次へ参りましょう。第一位の代表者と第三位の代表者はデュ

エル場へ上がつてください』

「行つて来ます」

「ああ。頑張れよ、結姫」

「はい！」

さて、どんな『テコエルを見せてくれるのかな……？

かなり楽しみにしながら、俺は慧や彰正先生と共に観客席へ向かつた。

『では第一回戦。第一位代表者、咲之宮結姫さん対、第三位代表者、御園凜那さん……始めて下わい』

『テコエル場に立つて『いる結姫に』、緊張感といった類は感じられない。対戦相手の御園つていう人もそうだ。

下半身にまで届きそうなかなり長い髪は俺並に黒い。瞳の色は……遠田だと分かりにくいけど、灰色っぽい。

それにして背が高い。俺と同じくらいだろうか？ 多少、俺よりは小さい印象を受ける。

「先攻は私のようだな。ドローー！」

『うわやあターン！』『は御園さんに灯りを点したらしー。』

「……私はモンスターをセット。ターン終了」  
「私のターンです、ドローっ！」

最初は無難にモンスターをセット、か。

「私は『イービル・ソーン』を通常召喚します！　『イービル・ソーン』の効果を発動！　このカードをリリースして、相手に300ダメージを与える、任意の数、デッキから『イービル・ソーン』と特殊召喚出来ます！」

「く、う」

御園凜那 LP 4000 3700 .

一瞬だけ『イービル・ソーン』がフィールドから消えたかと思うと、今度は2体の『イービル・ソーン』が場に並ぶ。

「このカードはダメージを与える効果は使えません。しかし、私は魔法カード『超栄養太陽』を発動します！　このカードは私のフィールドに居るLV2以下の植物族モンスターをリリースして発動し、リリースしたモンスターのレベル+3以下のモンスターを特殊召喚します！　『イービル・ソーン』をリリースし、デッキより『ローンファイア・ブロッサム』を守備表示で特殊召喚です！」

やつぱり、植物族デッキか。

原作で、5D、5のヒロインである十六夜アキが使つてた種族だよな。正直、アキが使つまではスゴイマイナー種族として有名だったのを憶えている。

「『ローンファイア・ブロッサム』の効果を発動します！　『イー

ビル・ソーン》をリリースし、デッキより《ギガ・プラント》を特殊召喚します！」

「ここはティタニアルじゃなくて、ギガプラか。

俺が前に作つた植物デッキはデュアル軸で、《スペルヴィス》と《血の代償》を使ってワンキルするデッキだつたな。

「バトルです！ 《ギガ・プラント》でセットモンスターに攻撃します！」

「モンスターは《シャイン・エンジェル》だ。リクルート効果により、私はデッキから《クイーンズ・ナイト》を特殊召喚！」

《クイーンズ・ナイト》……つてことは、絵札の三銃士か。  
俺も作ろうとしたけど、納得出来るのが作れなくて止めたな……。

「う……これは嫌な予感がします……私はカードを一枚伏せて、ターンを終了します！」

「私のターン！ ドロー！ 私は手札より、《キングス・ナイト》を通常召喚！ 《クイーンズ・ナイト》が自分フィールド上に存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、デッキより《ジャックス・ナイト》を特殊召喚する！」

一気に並ぶ騎士たち。

「永続魔法、《連合軍》！ 自分フィールド上の戦士族、魔法使い族モンスター1体につき、私の場に居る戦士族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする！」

今、場に居るのは三銃士。

つまり、全員の攻撃力が600ポイント上がるという事だ。

『クイーンズ・ナイト』 ATK1500 2100 .

『キングス・ナイト』 ATK1600 2200 .

『ジャックス・ナイト』 ATK1900 2500 .

ジャックスの攻撃力が、『ギガ・プラント』の攻撃力を超えた。

「バトル！ 『ジャックス・ナイト』で『ギガ・プラント』に攻撃！」

「罠発動します！ 『ゾーン・ウォール棘の壁』！ 私のフィールドに存在する植物族モンスターが攻撃対象にされた時、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊します！」

出た。擬似『聖なるバリア・ミラーフォース』。

「甘いっ！ 私は手札より速攻魔法、『我が身を盾に』発動！ 1500ライフポイントを支払い、モンスターを破壊する効果を持つカードの効果を無効にし破壊する！」

「つ……！」

御園凜那 LP 3700 2200 .

それによつて、『棘の壁』は無効化されて『ギガ・プラント』が破壊される。

咲之宮結姫 LP 4000 3900 .

「バトル続行！ 『クイーンズ・ナイト』で『ローンファイア・ブロッサム』に攻撃！ 続いて『キングス・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「さやああつ！」

咲之宮結姫 LP 3900 1700 ·

「メインフレイズ2へ移行！ 《融合》つ！ 場に居る三銃士を融合し、来い！ 《アルカナ ナイトジョーカー》！…」

かつさえ。

三銃士を融合させて出てきたアルカナに、俺はただその感想を持つた。  
それに、手札は3枚もある。アルカナの効果を使うには充分な数だ。  
その上、《連合軍》の効果で攻撃力が上がる。

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK3800 4000 ·

「さらに私は《フュージョン・リカバー融合回収》を発動！ 墓地の《キングス・ナイト》と《融合》を回収し、ターン終了」

上手い。《融合回収》によつて、アルカナのコストがまかねえている。

「うう……私のターン、ドローします！ モンスターをセットし、ターン終了します」

結姫は防戦一方か。

日本……もとい、地球の植物はシンクロやエクシーズがあるけれど、この世界だとその召喚方法が存在しない。

という事は、優秀なチューナーモンスターの《グローアップ・バルブ》、《スポーツ》などが居ないことになる。

……つてことは、攻撃力3000以上のモンスターを対処する方法は少ないんじゃないだろうか。

「私のターン、ドロー！ 2枚目の《クイーンズ・ナイト》を召喚し、バトル！」

《アルカナ ナイトジョーカー》 ATK4000 4200 ·  
《クイーンズ・ナイト》 ATK1500 1900 ·

「アルカナでセットモンスターに攻撃する！」

「モンスターは《ダンディライオン》です。このカードが墓地へ送られた時、綿毛トークンを2体特殊召喚します」

「成る程。ならば、《クイーンズ・ナイト》で1体のトークンに攻撃」

成す術も無く、1体のトークンが破壊される。

「ターンエンドだ」

さて、結姫はどう出るかな？

「私のターン……ドロー！ 魔法カード、《ブラック・ホール》ツ！…」「つー？」

「うわ、引きつええ……。

アルカナの効果は対象になつた時に発動できる効果。対象を取らないブラックは、《クイーンズ・ナイト》と綿毛トークン1体を巻き込んでモンスターを破壊する。

「永続魔法、《増草剤》を発動！ このターン、私は通常召喚権を破棄して墓地より《ローンファイア・プロッサム》を特殊召喚！」

この流れも強いなあ、やっぱり。

「ローンファイアの効果を発動します。リリースはローンファイアで、その時《増草剤》も破壊されます。デッキより、来て下さい…！」

『《椿姫ティタニアール》…』

出て来た……俺が植物デッキを作った際、いつも初手に居たから周りからは嫁、嫁と言われたカード。薔薇が旋風と共に巻き上がった。

「バトルフェイズです！ ティタニアールで、御園さんにダイレクトアタック！」

「く……、一步足りなかつたか」

御園凜那 LP2200 0 .

意外にもあつさりと。

デュエルは、終了した。

「お疲れ様、結姫。御園さんも」

顔見知りだったのかは分からぬけれど、2人で一緒に観客席ま

で上がってきたのを迎えた。

俺の2つ隣……ルナちゃんは俺に用事があるからこの席は使って良い、と告げてその場から居なくなり、彰正先生も下の生徒会メンバーが居る場所へ行ってしまい、席は2つ空いている。

「ありがとうございます」

「ああ……えつと、確か……」

「一人瀬燈夜だ。宜しくな」

「ひからこそ。私は御園凜那だ。凜那で良い」

差し出された手に応えて、俺は御園さん……凜那と握手する。隣でジト眼になつてゐる慧と結姫は……取り敢えず無視。慧はまあ分かるけど、結姫はなん……？

彰正先生が座つていた場所……つまりは俺の隣に結姫が座り、その向こう側に凜那が腰を下ろす。

『では第三回戦。これが終わり次第、休憩になります。では、第一位の代表者と第四位の代表者はデュエル場へ上がつてください』

マイクを通しての響く声に反応して、2人の人影がデュエル場へ上がる。

1人は幸仁だった。相変わらずの長い髪を揺らしながら、物静かに会場へ上がる。と同時に、女性の黄色い歓声が湧き上がった。

す、スゲエ……スゲエ人気だな、幸仁。それに全く反応しない幸仁も幸仁だが。カイザーミたいな奴だよ。

しかし、GXにてカイザーフていうのも強ち間違いじゃない。幸仁はチームLEGENDsでも一番強かつたしな。

そしてもう1人。

高い身長、結ばれた長い髪。銀色の髪。

アレは、

「鴻ソル……？」

何故かは知らないけど、俺に挨拶しに来てくれた子だ。あの子、代表になつたんだな。

『第一位代表者、瀧川幸仁君。アカデミア最強と言われている、『青眼の白龍』使いの特待生です！ 一方、第四位代表者は鴻ルナ……じゃない、ソル、さん？ えと、情報があんまり有りませんが……と、とにかく始めて下さい』

……？ 情報？

俺は生徒会長が言った台詞に内心首を傾げるけれど、そんなの結構い無しにデュエルが開始される。

「先攻は譲ろう」

「要らないな。オレは後攻の方が好きなんだよ。ターンランプに従つて、テメーが先攻やりやがれ」

「……そうか。では俺のターン、ドロー！」

先攻は幸仁らしい。

「『増援』を発動。デッキより『正義の味方 カイバーマン』を手札に加える。『調和の宝札』。手札の『伝説の白石』<sup>ホワイト・オブ・レジション</sup>を捨て、2枚ドローする。その後、『伝説の白石』の効果によりデッキの『青眼の白龍』を手札に加える」

「おお、一気に手札が回る。

既にブルーアイズを出せる手札にしたな、幸仁。」

「『トレード・イン』発動。手札のブルーアイズを捨て、2枚ドロ一する。『おろかな埋葬』。『伝説の白石』を落とし、デッキからブルーアイズを手札に」

「……嫌な予感がする。

「カイバーマンを召喚し、効果を発動。このカードをリリースし、1体目のブルーアイズを特殊召喚する。『古のルール』。手札に居る2枚目のブルーアイズを特殊召喚。そして、」

「……え？」

「『死者蘇生』。墓地に存在する『青眼の白龍』を場に降臨させる！」

「……え？」

場に並ぶ3体の白き龍。漫画やアニメで見たブルーアイズじゃ眼じゃないくらいの大迫力。

もし俺がアレに成功してたら、『粉碎玉碎大喝采はあーはつはつはー!』みたいな笑いをしていたに違いない。

この光景には、流石の俺や慧も苦笑いを隠しきれない。対戦相手じゃなくて良かつた、と……本気で思う。

まあ、ブラホで一発なのは『愛嬌。

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「はあん……やるじゃねーかよ。流石、御神みかみが選んだだけあるぜ」

「御神……？」

「御神……って、誰だ？」

鴻さん……ルナって子も居るし面倒だな。ソルで良いか……が言った御神という人名。

それに反応したのは、隣に居る慧だった。

「御神つて誰？」

「あ……えと、この前言つたさ」

俺の後ろに居る結姫たちを慧は一瞥し、口を近付けてくる。俺も伴つて耳を近付ける。

「僕や幸仁、基がこの世界に来てから会つた人が、御神つて名乗つてたんだ。その人がこの世界の事とか、養子縁組とか……後、お金とか」

「ソイツが俺の敵か

「……あ、あはは」

御神、御神……覚えたぞ、御神！  
会つたら絶対文句言つてやる！

……と、まあ本音10割冗談無しの事は置いといて。

御神が選んだ、って事はこの世界に連れて來たのは御神つて人なんだよな。世界の歪みとか、そこら辺も分かっている事になる。  
一体何者だ、御神つて……？

「オレのターン、ドローするぜ！ まずはその伏せカードを使わせてやる……『ブラック・ホール』！」

「……カウンター罠、『王者の看破』発動」

「どううな

『王者の看破』。LV7以上の通常モンスターが自分フィールド上に表側表示で存在する時に発動可能のカウンター罠で、ノーコストの『神の宣告』みたいな感じだ。

さて、ソル……ここでブラホを使つた、つてことはあの龍たちをどうにか出来る手立てがある、つてことだよな。看破も見抜いてたみたいだし。

「『闇の誘惑』発動！ カードを2枚ドローして……そうだな、『終焉の精霊』<sup>ジ・エンド・スピリット</sup>は要らねーな。除外だ」

『終焉の精霊』……か。『ネクロ・フェイス』とか、除外を使つたデッキって事だよな？

「さて、瀧川。テーマにやもう未来はねーぞ」「何？」

「……オレは、手札の『墮天使ゼラート』を捨てて『ダーク・グレファー』を特殊召喚するぜ。そして効果を発動！ 『墮天使スペルビア』を捨ててデッキから2枚目の『墮天使ゼラート』を墓地へ送る」

「墮天使デッキか……。『終焉の精霊』も入つてたって事は、除外も存分に使うんだろうなあ……。

「『ダーク・ヴァルキリア』を召喚。このカードをコストに、『前

線復活の代償》を発動するぜ」

……成る程。

《ダーク・ヴァルキリア》はデュアルモンスター。再度召喚されない限りは、通常モンスター扱いされる。

さらに《前線復活の代償》は通常モンスターをリリースして、自分が相手の墓地のモンスターを蘇生させるカードだ。

そして、

「オレの墓地に居る《墮天使スペルビア》を蘇生して、効果発動！墓地に天使族……《墮天使ゼラート》を特殊召喚ッ！」

墓地から蘇生されたから、スペルビアはさらなる天使を呼び出す。

「ゼラートの効果発動！手札の《終末の騎士》を捨てて、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」  
「く……っ！」

ゼラートの効果によって全滅する伝説の龍たち。これで幸仁の場はがら空きだ。

「んじゃ、バトル入るぞ、瀧川サンよ。《墮天使ゼラート》でダイレクトアタックつ！」  
「つ……！」

瀧川幸仁 LP 4000 1200 .

「……なんもねーな？《墮天使スペルビア》でトドメだッ……！」

瀧川幸仁 L P 1 2 0 0 0 .

後攻2ターン目で、幸仁は敗北した。

「ソイツが俺の敵か」（後書き）

今回は一回、デュエルを行いました。

疲れた……。

初ターン、ブルーアイズ3体。

格好良いですね（笑）

しかし、やはりデュエルを考えるのは苦手です。

……うん、頑張ろう。

感想、評価等お待ちしております！

「 ジ、 パラセ ..... シー 」 (前書き)

」の辺りから、なんかグダグダします..... (泣)

「ハ、ハレハ……ッ！」

第一位の人間が、第四位の人間に負ける。

それは、アカデミア全体に多大な動搖とショックを与えていた。  
俺や慧も例外ではない。

……まあ、

「すげ……あの状況から勝つなんてな。あの子ってあんなに強いんだ」  
「す、凄い事ですよ……階級つて、それこそ断崖絶壁な程に実力差  
があるんです。だからこそ生徒たちは上がる事に憧れ、上がる事を  
諦めるんです」

……大袈裟じやないのか、それ。

正直、デュエルなんて時の運。仕組んだりしていない限り、どつ

ちが勝つてもおかしく無い勝負だ。

勝負に、『絶対』は無い。

「……慧も同じ気持ちか？」

「う、うん……仮にもこのアカデミアに3ヶ月も居るし……多分燈  
夜も少し口々に居れば、気持ちは分かる筈だよ」

「……」

そんなモンかね。

まつ、少なくとも今は階級なんて興味無いし、素直にソルの勝利  
を祝うかな。

なんてコトを思いながら、俺は一人で拍手をする。周りが凄く静

かだつたから、たつた1人の拍手だろうと会場に大きく響いた。  
ただ、呆然としている中、俺以外が拍手してくれる筈も無く……  
うん、寂しい。

『……つ、次の対戦は午後の13時30分から行います……それまで休憩で……』

珍しく肩を落として去っていく幸仁に、基が近付いていくのが見えた。

「いや、コレは……ッ！」

か、買つしかないのか……！？ 俺はコレを買つて、腹を壊して午後の対戦を辞退すれば良いのか……！？  
……つと、興奮しすぎた。餅搗け餅搗け。  
しかし、買つて損したくない……うおおつー？

「ええい、1つ買つたあ！」

「……今までどんな葛藤をしていたんだ？」

気にするな、凜那。

俺は金を払い、買つたパンをそのまま開ける。見たところ何の変哲も無い普通のパン。中には餡とかが入つてそうだ。

「こざわ……ドローー！」

アニメでも有名なドローパン。中に入っていたのは……？

「……………カレーパン、ですね」

「……………カレーパン、だな」

「……………カレーパン、みたいだね」

「なんでこんなに普通なんだっ！？ セめてカレーパンでもカレーをそのまま入れるとか工夫しろよっ！？ しかも普通に美味しいし！！」

緊張した俺が馬鹿みたいじゃないか。

なんて妙に心を削るハプニングがあつたりしたが、適当に食料と飲み物を買って中庭へ。

どこかへ行こうとした凛那も誘い、結姫、慧、そして俺。4人で昼食タイム。

うん。

ハーレム状態、とか馬鹿な事言つつもりはないけれど……最近、死線がすぐ隣に居る気がして仕方が無いね。

「さて、食うか」

「……………それ、食べるの？」

「……………男には、收まり付かない時があるんだよ」

「やつつけですよねつ！？」

「流石にドローパン5つといつのは……いや、別に」とやかくは言わないが

良いんだよ。カレーパンなんてつまらないパンを当ててしまった

からにや、変なパンを当てるしかないだろ？

「こりゃ、ドローフー！」

「…………普通のジャムパンだな」

「……食べるのは後！ ドローフー！」

「えと、これは……？」

「……外は他と同じなのに、中身はメロンパンだ。くそ、ドローフー！」

「…………クリームパン、ですか？」

何故だ……普通のしか入ってないとかそんなオチか！？

「後2つある…………ドローフー！」

「…………ふむ。これはチョコレートパンみたいだな」

「…………ラスト、か」

くそ…………これが頼みの綱だ。

「ドローフー…………！」

「ど、どしだつた、燈夜…………？」

これは、まさか…………。

「…………何も入ってない」

結局。

俺は今日当たったパンの中身を混ぜて、自ら外れを出したのだった。

「どうするのです？ 全く情報が無いではありませんか」「ん、どうしようか？」

「変わりはしませんが。私は兄さんを探します。行きますよ、姉さん」

「はい」「ちょっと！ お待ちなさい！」

街中。

人、人、人と溢れ返っている中、3人の少女が居た。

1人は金色の髪をくるくると巻いた少女。蒼い瞳はキツイ印象を与える、豪華なドレスと高飛車な口調はお嬢様を連想させる。次に、間延びした口調の女性。ワンピースを身に纏つた彼女は、自然な茶髪にウェーブを掛けている。

そして、冷淡な口調をした女の子。黒い髪は背中に垂れる程度の長さで、艶やかに光っていた。漆黒の瞳は、宝石のように輝いている。

「全く……感謝なさつてよ。わたくしが着いていなければ、今頃貴方たちはどうなつていたか……」

「その心配は不要です。私たちは御神さんにある程度の協力はして貰えますから」

「む……それはそうですが。わたくしも御神様に頼まれた案内人ですか？ 少しくらい感謝を あの、聞いております？」

黒髪の少女が見詰めるのは、ビルに取り付けられた巨大テレビ。そこに流れているのは、見覚えのある顔だった。

「あれ～？ あれって、幸仁君じゃない～？」

「…………そうですね」

第壱デュエルアカデミア 横都校最強の決闘者デュエリスト、瀧川幸仁。その特集だった。

「…………行きましょう。目的地が決まりました」

「だね～」

「ちょっと…………アカデミアに向かうなら、まず許可を得る為にも御神様の下へ…………つてお待ちなさいな～！」

主役が、集まつていぐ。

もうすぐデュエルが始まる。

13時20分前後……無駄にやるせない昼食を終え、俺がデュエル場に戻るともう殆どの人が観客席に座っていた。

生徒会長たちや教師達も居て、遅れてないのに遅刻した気分になつてしまつ。

『…………既に勝ち残った代表者たちは来ているようですね。咲之宮結

姫さん、鴻ソルさん、一ノ瀬燈夜さん……先にデュエル場まで来て下さい』

ん……俺たちか。

慧や凜那と一言交わし、俺と結姫は観客席から下に降りていく。階段を降り、通路の途中。ソルが腕を組んで壁に寄り掛かっていた。

「よお、燈夜」

「ああ。なんだ、待ってたのか?」

「まーな」

ソルと並んでデュエル場へ向かう。後ろから結姫の痛い視線を感じるが、気にしない。だつて、怖いもん。

「まさかお前が……瀧川に勝つなんてな。正直ビックリしたよ」「あの程度じゃ負けねーよ」

お、スゲエ自信。」しつこいのは嫌いじゃないな。

「燈夜」

「ん?」

もう少しでデュエル場だ。観客席も盛り上がりつて来ている。

「もう少しで、役者が揃つぜ」

「……?」

『では、少し早いですが始めましょうー。今回は変則ルールで、3

人の代表者が一斉に『デュエルするサバイバルとなります!』

ソルが言つた言葉の意味を考える暇も無く、生徒会長がゲームのルールを告げる。

サバイバルか……1対1対1、という事だよな?

だとしたら、サイレント・マジシャンでも良い気がする。『レベルアップ!』を引かなかったら時でも、魔力カウンターが手早く乗るしな。

けど……同じデッキって、なんか味気無え……どうすつか。

「 さん」

『それでは、デュエルフィールドにお並びください!』

「 に」

「 お互い頑張りましょう、燈夜さん」

「 いち」

「 ばん、と。

デュエル場を隔てる扉が勢い良く開く。

俺含め、その場に居た全員がその方向に視線を向ける。

そこには、3人の少女が。

「 ゼロ」

え……いや、え?

まさか……。

「し、 霽…………？」

「…………」

「…………？」

俺の唯一の家族であり、大切な妹と姉…………霽と姉さんの姿があった。

な、なんで……？ ここ、異世界だろ？ まさか、霽たちもこの世界に！？

ゆつくり。勢い良く開かれた扉とは対称的に静かな歩みだ。

「…………」

そして、霽と姉さん、後俺の知らない女性が田の前にやってくる。

「霽…………姉さん…………？」

「やつぱり…………貴方が兄さん、ですね」

やつぱり（…………）…………？

「兄さん…………！」

「わっ！？」

クールな霽には似合わず、勢い良く抱き締められる。あらまあ、なんて呑気に姉さんも微笑む。

「なら、あたしも～」

「姉さんっ！？」

俺の背中に抱きついて来る姉さん。ね、姉さん…………き、田大な胸が当たつてるんですけど……。

「レ…………どうすりや良いつスかね。」

「え~と……うん、生徒会長ー。」

『あ、はい?』

「俺、対戦辞退しますー。ついでに先生ー。ちよーっと早退しますー。」

「はい?」

「うーん」といって。

俺は歩き難いまま、零と姉さんを連れてその場から後退した。

「……わたくしの事は、忘れられて置きますのね」

という訳で、俺の部屋。  
何が“という訳で”なのかは自分でも把握しきれてないけれど……  
俺はマナに3人分のお茶を入れて貰った。  
ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

ちなみに、簡単にだがマナの説明はした。

「あつ~…………ふう。んで、なんで零と姉さんが『アーティア』  
「それよつ~…………君つて、本当にあたしの弟なんだよね~?」  
「は?」

「なんでそんな事訊くんだ……？」

「…………」

「あつ、

「もしかして記憶が……ん？ けど霊はさつき兄さんって……」「懐かしい匂いがしたので。魂が憶えていたのだと思します」

「……んな馬鹿な」

「いや、霊なら有り得るな。」

「例え俺のクローンを数百、数千と作ったとしてもその中から本物オリジナルの俺を見つけ出しかねない。」

「……俺は間違いなく、霊の兄であり姉さん……若菜姉の弟だよ。」

「ノ瀬燈夜だ」

「私は分かつていきましたが」

「ん~……けど実感湧かないね~」

「しかし、なんで霊たちも記憶を失くしてんだ？ 俺は全部覚えてたのに……。」

「……で、結局なんでこの世界に？」

「御神さんに導かれただけです」

「……またソイツか」

「しかも、霊や姉さんはその御神つて奴に会つてるつて事になる。」

「色々この世界の事も教えてもらひつつ~」

「俺には何も言わずに……良し。」

会つたら殴る。

「兄さんもこの世界に来ている、と聞いたので……」

「あたしたち、燈夜ちゃんが居ないと生きられないもんね～」

ちなみに、これは比喩じゃない。

父ちゃんと母さんは訳あって居ない俺たち一ノ瀬家。雲はしつかりしてるけどまだ中学生だし、姉さんはおつとりして天然。バイトなんて出来るはずも無い。

というわけで、収入源は俺だけだった。その上家事が出来ない2人じや、生きられても自堕落に過ごす事になつていただろつ。

……まあ、俺のバイト先の店長は凄く優しい上にお金持ちだったらしいから、俺たちを凄く可愛がってくれた。

だからこそ、俺も趣味の遊戯王を続けられたり出来たんだよな……

…… 閑話休題。

「……はあ。んで、雲たちはなんでアカデミアに？ 制服まで着てる」

「兄さんが居る所、私有りです」

「……つまり？」

「編入する事にしたの～」

ですよね。だと思ったよ。

「本当はね～？ 燈夜ちゃんと同じ第五位にして貰いたかったんだけど～」

「御神さんがこのアカデミアの校長に掛け合つて……第一位の特待生枠に入れて頂いたのです」

「やつぱり……ソイツとは一度語り合つ必要があるな

つか、あれ？

「特待生枠つて、後1つじゃなかつたつけ？  
「御神さんつて、凄いね～」

あ、セイですか。

まあ、雪と姉さんの遊戯王の実力は高いに決ま。実は本気を出せば俺でも勝てないくらい。

.....。

あれ、地球組で一番弱いのつて……俺じゃね？

「……？ 何故膝を折っているのですか？」「自分に絶望していたのさ」

はは。俺つて、弱いね～（自暴自棄）。

なんて【冗談は置いといて、俺は自分用のお茶を一気に飲み干す。少し温くなつていたそのお茶は勢い良く俺の喉を嚥下えんかして、渴きを無くす。

「兄さん……」

「うん？」

「非常に残念なのですが、私たちはこれから校長先生の元へ向かわないと行けませんので」

「あ、そつか」

「また近い内に来るね～？」

そう言って、雪と姉さんは立ち上がる。

入り口まで行つて2人を見送ると、俺は玄関の扉を閉めてそのまま背を預けた。

ふう、と息を吐く。

「……“役者”……か」

ソルが言つた言葉。その言葉の直後に零と姉さんが来た。ソルは、何か知つてゐるのか？ そういう幸仁とデュルしてゐる時も、御神に選ばれたがどうとかつて……。

「……ああつ、もう！ 訳分かんねーッ！－！」

『大丈夫、マスター？』

……大丈夫じゃない。頭がこんがらがりそつだ。

「……マナは何か知らないのか？」

『うん……ごめん。お師匠様も良く分からないつて……』

そつか。

はあー、と大きな溜め息を吐いて、俺はマナに再び、お茶を頼むのだった。

手が……指が勝手にキャラを増やしていく……ツ――！

姉や妹は居る設定だつたけれども、まさか登場するなんて、私も予想外（苦笑）

「めんなさい。

こんな小説ですが、  
感想、評価等お待ちしております！

「マジサーデ、してあげようか？」

「納得できませんわ……何故このわたくしが第一位なのです……」

「……

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

いや、ね？ 愚痴を零すのは良いんだけどさ……。

「……なんで俺の部屋に来てるの？ つか、君誰？」

階級別の大會と零、姉さんとの再会を終えて結構経つた。  
ただでさえ顔立ちの整った零と姉さんなのに、その上第一位の特  
待生となれば人気が上るのは必至。  
……そんな2人が毎晩はずっと俺の傍にいるから、俺に降りかかる  
もの。それは、

『「ロロス……ロロス……』

「ひいツー？」

トイレだって楽に行けやしない……誰か男の友達、欲しいなあ……。

それはともかく。階級別の大会だけど、何故かソルも対決を辞退して、済し崩し的に優勝は結姫になつた。  
素直に喜べないかもだけど、おめでとう。心中で祝福しておくよ。

「いや、まあえっと……落ち着けよ、な？」

結姫に直接言えない訳は、ただ一つ。

……男子に追い掛け回されてます。

「第一位の長谷部慧ちゃんに……」

「第二位の咲之宮結姫様……」

「第三位の御園凜那さん……」

「それなりに人気のある第四位の鴻……」

「拳句、編入してきた特待生の姉妹まで……？」

「いや、な？ ほら、慧は昔から知り合いだし、結姫には世話なんつてるから。凜那は普通の友達で、ソルやルナもあっちから近付いて来てるし、零と姉さんは兄妹だからさ……」

「死に晒せエ——ツ！——！」

人の話聴けよっ！？

からがら逃げ回つて、俺は自分の部屋に帰還した。文字通り“命

からがら”つて奴だ。  
つ、疲れる……。最近はコレばっかりだ。俺の平穀はどこ逃げた。  
しかも、皆気付いてない振りなのかそうじやないのかは知らない

けれど、誰も俺の苦労なんて気付いてないしな。

「はーー」

『大変そうだね、マスター』

「マナ……」

最早俺の癒しは自室しかない。マナが傍に居てくれるだけマシか。それはそうと、マハードは最近俺の傍に居ない。俺が頼んで、零たちがなんで記憶を失ったかとかを調べて貰っている。

……。

「マッサージ、してあげようか?」

「ん……ああ、頼む」

一瞬の内に実体化したマナは、俺に抱きつきながら耳元で囁く。最初はうぶたえた俺だけど、最近じや結構慣れた。マナって人懐っこいんだな。出来れば俺以外にはしないで欲しい……と思つのは、俺の我慢だろうか。

「う、ふう……」

いや~、気持ち良い。マナって可愛いし気が利くし、流石だよな。うつ伏せで横になる俺に馬乗りして、背中を押して貰いながら俺はそんな事を思つ。

と、

「コンコン、と扉がノックされた。

「ん……誰だ？」

「あ？ 私は精霊化してるねー」

そういひと、マナはすぐに俺しか見えない姿になる。  
……よひとマジ サージが名残惜しいのは秘密だ。  
扉を開けると、そこには面たのは……。

「君は……」

確か、雪や姉さんと一緒に面た女の子……。  
お嬢様！ と主張するかのよひなクルクル巻きの金髪に蒼い瞳。

「失礼しますわ」

「お、おこちよつとーー？」

勝手に中に入るなよ！

なんて俺の主張は聞き入れられず、ソイツはじろじろと俺の部屋  
を眺める。

「……狭いですね」

「第五位の部屋だから当たり前だー。」

「…………まあ、良いですわ」

いや、良くねえよ。勝手に座るなって。

んで、畠頭。

無駄に深い溜め息を零しながら、ソイツはぶつぶつと愚痴を零し  
始めた。ここはお悩み相談所じゃないぞ。

「わたくしこそ第一位の座にうつてつけなのですわ……」これまで雪

や若菜を案内したのもわたくしですのに、御神様つたら……」

「今、俺が会いたい奴ノ。・ーの名前が出たぞ」

「……？ 貴方、何故こんな所に？」

「こんな所で悪かったなっ！ つか、お前がこの部屋に来たんだろ

うが！」

「あら

あらじゅねーよつ！

ソイツはすつ、と立ち上がりつて制服のスカートをつまむ。それこそアニメで見たお嬢様がお辞儀をするような仕草だ。

「今まで挨拶が遅れて申し訳御座いませんでした。わたくしは御神様に仕える者。リリア＝フォルゼン・レイランドですわ。リリア、とお呼び頂いて結構です、一ノ瀬燈夜様

「はあ……俺の名前知つてるんだな」

「ええ

まあ、不思議じゃないか。雪や姉さんを案内してくれたらしい。

「姉さんたちを案内してくれたんだっけ？ ありがとな

「…………

「…………びひつた？」

そんな鳩が豆鉄砲喰らつたような顔して。

「……いえ、思ったよりも礼儀が為つていたので、驚いただけです

わ

「……そりゃどうも」

第一印象は悪いんだな、俺。ちょっとガックリ。

リリアは静かな動作で再び腰を下ろして、俺と視線を合わせる。

「しかし……まさか、貴方が……」

「ん？ 俺がどうしたって？」

「…………いいえ、真正面から話すような事では御座いませんから。役者が全員揃つた時にでも」

また、役者か。

「本日は、貴方に御神様からの伝言を伝えに来たのです」

ほお、御神から。

「明日の放課。午後18時頃に、島の外れにある灯台にまで来て欲しい、と」

そこが決着の場所かっ！

ふふふ……やつと、やつとの拳が光る時が……！

「尚、役者は全てこちらが集めるので、貴方はデュエルディスクとデッキを持ってくるだけで宜しいらしいですわ」

「……ああ、了解。午後6時に外れの灯台だな」

憶えたぞ……マナが。

「本日はそれだけですわ。それでは、また」

それだけ告げると、リリアは俺の部屋、第五位の寮から出て行く。

「…………」

決着は明日。

ディスクとデッキを持って来いって事は、デュエルをするんだな？  
なら、俺がやる事は決まった。

「マナ～。デッキ構築、手伝ってくれないか？」

『うそ、良いよ～』

夜は、更けていく。

冷たい風が吹く。下ろした状態の髪が風に流れ、忙しく揺れていた。

まだ日も昇っていない真夜中。肌寒さは寝間着姿の自分を容赦無く襲う。

「…………たのに…………」

呟く声は、波の音にさらわれた。

背後で灯台の明かりが海の向こうまで照らされと背伸びしている。

「…………逃げて…………言つたのこ…………」

“彼”に、逃げる気なんて毛頭無い。そもそも逃げてとは言つたが、説明も無しにはいそですか、と歩を返す理由も無い。そんな事、分かっている。分かっているけれど。

「…………ボクが…………」

彼を、護る。

「マジサーチ、してあげよつか?」（後書き）

マナ可憐（よ、マナ）。

今更ですが。

この小説、登場人物……といふかヒロイン沢山居ます。

……一桁到達しちゃ いそうな程（苦笑）

感想、評価等お待ちしておりますーー！

「わたしが一ノ瀬君を…………譲る」

潮風に身を委ね、青い世界を感慨深そつと眺める。雲一つ無い空。世界を照らす太陽は、広い海を輝かせた。

「さて……」

どんな物語が、始まるかな？

今日は相変わらずだった。

朝、第五位と第一位の寮は遠いといつのこと、わざわざ 態々迎えに来てくれた慧と結姫、雫と姉さん。

昼、凜那を含めた大所帯で昼食。

そして、待ち合わせ時間まで後1時間となつた頃。俺は死線を巡らせる男共（時折女有り）に追い掛け回され。

あつと言つ間に、午後18時になつた。

後ろには俺以外誰も見えない精霊化したマナが居る。

ちなみに俺しか見えないのが精霊化、他人も見えるけど触れないのが半精霊化、誰にでも見えるし触れるのが実体化、と呼ぶ事にしている。

「お……なんかいつぱい居るだ？」「

灯台近くまで来ると、幾つかの人影が見える。

えつと……慧に幸仁、基……雲と姉さん、リリア……ソルも居るな。後は……、

「あれ……結姫と凜那も居る？」「

ソルやリリアが言つてた“役者”つて、結姫たちも含んでたのか？後一人、俺の知らない人が居る。遠田から見てもかなりの美形の男性で、正に優男、という感じだ。

……あの人気が御神、って奴だろ？

「お～い、みん……痛つ！？」

何かにぶつかった。壁か？　いやいや、んな馬鹿な……田の前にや何も無いのに。

手を添えると、硬い物に触れた。

「なんだ……？」

「兄さん…」

俺が困惑していると、雲が声を張り上げる。けど俺の方へ走りうとしたら、御神（多分断定）さんが手で制止した。

一步、一步。

御神さんが俺の方へ近付いて来る。

「やあ。君が一ノ瀬燈夜君だね？　僕は御神新。みかみアラタ宜しくね？」

「宜しくじゃない！　お前……慧たちの前には現れといて、俺の前

「出て来ないってのはどうこう見だよー？」

「おお、怖。それにはちゃんと理由があるから、そつ怒らないでよ

理由……？

何の理由があつて？

「まあ、まずは最初から説明しよう。君は知つてゐるのかな？ この世界が滅びかけている事」

「滅びかけてるつていうか……歪みだかなら聞いたな」

「うん、まあそうだね。僕が幸仁君たちに説明した時もその言葉を使つたし、間違いないよ」

なんだ、その言い方……？ もつと別の言い方がある、みたいな

……。

怪訝そうに俺が見詰めているのに気付いたのか、御神さんはふつ、と肩を竦めた。

「まず、一つ言つておこう。この場に居る全員が、元は地球の人間だよ」

「……は……？」

地球の……？

慧たちはともかく、結姫や凜那たちも居るんだぞ？ 僕に隠してたつて感じもしなかつたし、結姫に関しては姉妹の話も聴いた。有り得ないだろ。

「……いや、全員じゃないか。僕と鴻ソルは違つて ジュウの精霊は、あくまで精霊界の出だ」

その視線の先には、俺の後ろに居るマナに向けられている。

「イツ……マナが見えてるのか？ 今は俺以外には見えない精霊化の状態なのに。

「この世界は壊れかけている。この世界だけじゃなく、平行世界や地球、その他諸々の世界がだ」

数多くの世界、つて事か？ なんか、元々大きかった話がさらに巨大化しそうな勢いだな。

「だから神は、この世界の救世主を選んだ。数ある世界で唯一、遊戯王デュエルモンスターZを考察している地球でね」

そう、驚いた事にこの世界には地球にあつた遊戯王Wikieとかが無い。多分、遊戯王が世界の中心だからこそ、色んな著者がルールとかに関して本を出しているからだろう。

「一ノ瀬雲、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁の5人は君も知つて居る通り、地球で生まれ育つた」

「……」

「く、と頷く。

「ただ、咲之宮結姫と御園凜那は不運だつた。生まれてすぐ事故と病気に罹り死亡。神がこの世界に転生させたのさ。あ、ついでにリリアもそうだよ」

「わたくしはついでですね……」

成る程。だから、“元は地球の人間”、ね。

それにもしても、リリア可哀相。状況が状況じゃなければ、涙が出てきちゃいそうだ。

「じゃあ、ソルはどうなんだよ？」

「オレは、咲之宮や御園よりも特別だった、って事だぜ」

特別……？

確認するように俺が反芻すると、ああ、とソルは首肯した。

「鴻ソルは元々は選ばれた存在ではなく、極普通にこの世界で暮らしていた。しかし、もう一人地球で選ばれていた存在が鴻ソルと魂がリンクしてね」

「もう一人……？」

誰だ？

「君も、会っているだろ？」

「え、まさか」

「そう。鴻ルナだよ」

逃げて。

そう言つた彼女の無表情な顔が思い浮かぶ。

あれ、けどその選ばれた人間が“役者”だとしたら、ルナは一体どこに……？

「地球で育つた鴻ルナは、この世界の鴻ソルと魂が引かれ合い、ほんの3年前、とうとう融合した。GXで言つ、『超融合』で十代とユベルが融合したみたいな感じだね」

「うわ、なんかウゼン。」

しかし、2年前……？ 俺がまだギリギリ中学生の時か？

「志藤彩伽……」

「つ……！？」

「それが、地球に居た時の鴻ルナの名前だよ」

志藤……彩……伽……。

知ってる。

中3の時、俺と同じクラスで……いつも独りで。そんな姿に俺が見かねて話し掛けたんだ。

ただ、卒業式の少し前……倒れて、意識不明になつた、女の子

。

「ふ……。長谷部慧と同じ反応をするんだね、一ノ瀬燈夜君。この子も同じ話をしたら、何も言葉を紡げなくなつたよ」

そりや、そりだろ。驚くつての。

志藤とは、俺だけじゃなく慧も友達になつたんだ。良く話したし、一緒に帰つた事もあつた。

「……んで……志藤は今どこ?..」

「オレの中だよ」

「……は?」

中?

「さつき御神が言つただろ? 融合したつて。時々入れ替わる時はあるけどよ、今はオレン中で話を聞いてるだろーぜ」

それが、融合、か。

一重人格みたいなものだろ?つか?

「…………」

今、志藤はどんな気持ちで俺たちを見ているだろ？。

志藤は、余り喋らなかつたし、笑いもしなかつた。いつも無表情で無口で、感情を表に出すのが凄く苦手で。

なのに動物が好きで、甘い物が好きで、俺が頭を撫でると顔を赤くした。

「…………せよ」

「うん？」

「出せよ。志藤を今すぐ、自由にしおよひ……」

訳分かんねー。頭が混乱して、目の前にある壁に頭突きを何回もしたい衝動に駆られる。

「良いけど、後悔するかもよ？ それでも良い？」

「何の説明も無しに、じゃあ諦めます、なんて言つかよ

「……それもそうか。良いよ。じゃあ 」

ソルが呻く。痛みといつよりは気持ち悪さを抑えるよひに胸元を押された。

そして、ソルが分身するかのようにもう一人の身体がソルから出てきた。ソルよりも大分身長が低く、ツインテールの髪。確かに、と思った。

髪を黒くして、ツインテールじゃなくてショートカットにしたら志藤彩伽だ。

ぱたり、と志藤は静かに倒れた。

「志藤ッ！！」

「さつき言つただろう。魂が融合したんだ。その殆どがソルの中にあるんだし、彼女の中にあるのはもう殆ど無い。欠片と言つて良いね」

「…………

後悔。後悔つて、これの事か。

気付けなかつた自分に歯軋りしていると、ゆっくりとした動作で志藤が動き出した。

ばんつゝと俺は目の前にある見えない壁に手を付ける。

向ひうし、行けない。

「志藤…………」

魂の、欠片。それがどれ程の物かは分からなければ、動くのさえ辛そうな志藤を見ていると酷い状況なんだうな、って分かる。あのメンバーの中で、志藤彩伽の時の彼女を知る唯一の存在である慧が肩を貸していた。

結姫や凜那も、慧に続いて志藤を支える。

「だ、大丈夫ですか…………？」

「…………一ノ瀬…………君」

小さい声だ。俺には聞こえない。

「無理するな。碌に立てもしないと言つのこ…………」

「どん、と。

見えない壁を殴り付けても、傷一つ付かない。それどころか俺の手が痛むだけだ。

「……さて、辛そうではあるものの、命に別状はない。本当の意味で、全員が揃つた今、本題に入ろうつか」

「……本題……？」

『逃げてください、燈夜殿つ！』

は……？

突然聞こえたマハーダの声。振り向くと、血相を変えた顔で杖を俺に構えていた。

『お師匠様……！？』

『黒・魔・導！！』

「わわつ！？」

やべ、死ぬ……！？

マハーダの攻撃が俺に直撃……あれ、してない？

咄嗟に口を閉じた俺だけど、痛みなんて全くない。それどころか、熱も身体を襲つて来なかつた。

「……へ……？」

……壁。俺を囲つよつて、四角い壁が炎から俺を守つてくれていた。

え、と……？

『く……遅かつたか』

も、もしかして、俺……。

「閉じ込められてる……ー?」

「『』が答。流石の高位魔術師も、気付くのが遅かつたみたいだね」  
前、後ろ、左右……下……は地面か。後は上。  
全部見えない壁に閉ざされて、俺は身動きが取れなくなってしまった。

「さあ、本題だ。静かに聞いてくれよ、一ノ瀬燈夜君」

視線を戻す。

慧と結姫に支えられて何とか立つている状態の志藤が視界に写つた。

「『』の場に居る一ノ瀬雲、一ノ瀬若菜、長谷部慧、瀬野基、瀧川幸仁、咲之宮結姫、御園凜那、リリア・フォルゼン・レイランド、志藤彩伽……イレギュラーとは言え、鴻ソル……いや、本名鴻ソフィア」

ア

その名前は呼ぶなつての、とソルが嘆息する声が聞こえた。

……これからソフィアって呼んでやろう、なんて悪戯心が湧き上がる状況を読めない俺。

「9名、然して10名は僕が選んだ。だが一ノ瀬燈夜君。君は違う。僕が選んだ訳では無い。誰が選んだか、僕にも分からなかつた。と、すれば」

……嫌な予感。

「世界を滅ぼす要因は、もしかしたら君なのではないか、と僕は考えた」

……ですよね。

「なつ、ち、ち、違います！ 燐夜さんは世界を滅ぼしたりしません！」

「そりだよ！ 地球に墜た時だつて、いつも僕を助けてくれたし……！」

「基と幸仁も何か言つてよ……！」

「わりいナジよ……俺、お前に説明されてもまだ思い出せねえんだよ。アイツとダチだつたなんてな」

「……同じく」

そんなん、と嘆く慧。

「燐夜ちゃんが世界を滅ぼすなら、あたしも手伝つて」

「ですね。私たちは兄さんこそ世界の中心ですから」

いやいや、ンな事しないから。

「……まつ、オレはどいつも良いな」

「私は……まだ判断しかねるな……」

「わたくしもですわ。元々そんなに接触していた訳では御座いませんし」

なんでこんな事になつてるんだ……？

本当……訳が分からぬ。分からぬぞ。

「ち……がう」

そんな中。

小さな声が、俺の……俺たちの耳朵を叩いた。

「一ノ瀬君は……違つ

「分からぬだらう? 例え違つたとしても、不安要素は消してお

くさ

「なら、ボクが……！」

一歩ずつ、ゆっくりと。

慧たちから離れて、一人で歩いてくる。

そして、俺と皆を隔てる見えない壁に辿り着くと、志藤はその壁に背を預けた。

「わたしが、一ノ瀬君を……護る

やう言つて、志藤はディスクを構えた。

「わたしが一ノ瀬君を…………譲る」（後書き）

さやー、鴻ルナ改め志藤彩伽格好良いー、で今回は終わりました。

「」である程度の秘密、設定は露呈しちゃいました。

勿論、まだ分からないコトは多いんですけど（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「君は、弱いね

ずっと、独りで。  
ずっと、孤独で。

苛められていたという事実は無くとも、クラスメイトに一線を引かれていたのは間違いないと思った。

口数も少なくて、いつも無表情で。わたしは、自らクラスに溶け込もうともせずに本ばかり読んでいた。  
寂しかった……と思う。

けど。

「よ、志藤。何の本読んでるんだ?」

貴方が、わたしの傍に居てくれて

。

「はあん……オレたち全員を相手にしようつてのか、ルナ?……  
いや、志藤彩伽、だつたか?」

わたしは小さく頷く。

「……オレが相手して良いか、御神?」  
「どうぞ」

「うし」

御神新に許可を得て、ソル……ソフィアが数歩前に出る。ソフィアの『テッキ』は知っている……。墮天使を軸とした、闇属性のビートダウン。

「そついや、テメーと『トコエル』するのは初めてだつたな？ 選ばれた存在でありますながら、そつち側に付いたテメーの力……見せて貰おうか？」

「…………」

勿論。  
わたしが、彼を護る。

「『テュエル』！」

「先攻はオレだ、ドロー！ オレは永続魔法、『漆黒のトバリ』を発動！ そして『終末の騎士』召喚！ 効果により、『テッキ』から『ネクロ・ガードナー』を落として、ターンエンドだ」

まずは順当。特に伏せカードも無い……。

「…………ドロー…………」

手札を確認する。大丈夫、悪くない手札。

「…………」

後ろで、彼が見てるのを感じる。

……安心して、一ノ瀬君…………。

貴方の為なら、わたし……命を、張れるから。

「《ヘカテリス》効果……捨てて《神の居城 - ヴァルハラ》をサ  
チ……発動」

「はあん。オレが墮天使ならお前は天使か」

「ヴァルハラの効果により……私は《光神テテュス》を特殊召  
喚……《ジエルエンデュオ》召喚……バトル」

墓地にはネクガ……ソフィアのデッキは、時間が経つに連れて爆  
発力が一気に増す……ここは、攻める。

「《ジエルエンデュオ》で《終末の騎士》を攻撃」

「ツ……！」

ソフィア L P 4 0 0 0 3 7 0 0 .

「……テテュスでアタック」  
「うあああつ……！」

ソフィア L P 3 7 0 0 1 3 0 0 .

……ネクガの効果は使わなかつた……。

……。

「……わたしはカードを1枚伏せて、ターン終了」  
「オレのターンだ、ドローつ！」

にい、と。

ソフィアが笑う。

「こ」の時、《漆黒のトバリ》の効果を発動するぜ。ドローフェイズにドローしたカードが闇属性モンスターだった場合、相手に見せることで墓地に送り、再びドロー出来る。引いたカードは《墮天使エデ・アーラエ》！」

墓地に送られ、再びソフィアがドローする。

「トバリの効果は続けられるぜ。《墮天使アスマティウス》！ ドロー！ 《ダーク・ヴァルキリア》！ ドロー！ ……ここで打ち止めだな」

一気に墓地が肥えてしまった。

今……ソフィアの墓地の闇属性モンスターは5体。

「行くぜ、志藤彩伽。オレのフィールドにモンスターは存在せず、墓地に闇属性モンスターが5体以上存在する時に、《ダーク・クリエイター》を特殊召喚出来る！」

《ザ・クリエイター創世神》のダーク化したモンスター。  
コレは……結構、危ないかもしねり。

「ダクリの効果を発動！ 墓地の《終末の騎士》を除外し、《ダーク・ヴァルキリア》を特殊召喚！」

つ……。

デュアル召喚して、モンスターを破壊するつもり……？

「用心するのはコイツラじゃねーぞ？ 墓地の闇属性の数は3体！ 来い、《ダーク・アームド・ドラゴン》！…」  
「だ、ダムド握つてたのかよつー？」

「後ろで一ノ瀬君が叫ぶ。

駄目……わたしの伏せカードじゃ……勝てない。

「ダムドの効果！ 《墮天使アスモティウス》を除外して、まずはその伏せカードを破壊だ！」

「つ……《光神化》！ ……手札の《マシュマロン》を、守備表示で特殊召喚……！」

「チツ。んじゃ、ダムドの効果を続けるぜ。《墮天使エテ・アーラエ》を除外して厄介な《マシュマロン》を破壊する」

駄目……時間稼ぎも出来ない……。

「《ダーク・ヴァルキリア》を再度召喚！ 魔力カウンターが乗るが……取り除いて、《光神テテュス》を破壊する」

そんな……。

「……《オネスト》警戒、てか。ダムドの効果だ。《ネクロ・ガードナー》を除外して、《ジエルエンデュオ》を破壊！」

これで、わたしの場合はヴァルハラのみ。

「バトル……《ダーク・クリエイター》でダイレクトアタック」

彩伽 LP 40000 1700 .

「《ダーク・アームド・ドラゴン》……」

駄目……殆ど魂の無い今の身体じゃ、あの攻撃に耐えられない……

。。

「めんなさい、一ノ瀬君…………。

「トドメだ」

護れなかつたよ

。

彩伽 LP1700 0 .

静かに、倒れていく。

ダムドの吐く炎に覆われ、何も見えなくなる。

ただ、とてもない量の煙の中に見えた小さな影が、静かに倒れていくのだけは、捉える事が出来た。

「志藤ツ……！」

煙が晴れる。

既にディスクを仕舞い込んだ鴻ソフィア。今にも志藤の方へ飛び出して来そうな慧や結姫たち。

そして、俺のすぐ近くに倒れている、志藤。

「クソ……クソガツ！」

なんだよ、この壁……！ なんで破れねエンだよー…？

「マハーダー マナツー！」

『 黒・魔・導！』

『 黒・魔・導・爆・裂・破！』

……壊れない。

びくともしない。

……どうして？

慧、結姫、凜那、零に姉さん……5人が志藤の下へ向かおうとしている。けれど、御神が制止しているらしい。

俺と同じように、見えない壁があるのか、空気を呑いていた。俺と違うのは、閉じ込められているわけではない、といつどころか。

御神新だけが、静かに志藤の下へ歩いている。

「志藤に、近付くんじゃねエツ！」

「君は、弱いね」

つ……！

「悔しいとは思わないかい？」

悔しいぞ……悔しくて悔しくて、自分を殺したくなー！  
俺じや、何も出来ない。  
俺は、弱いから。

俺は 。

『汝、力が欲しいかえ？』

力……欲しい。

御神をぶつ飛ばせるくらい、強い力がツ！！

『良いじゃろう。妾の力、汝に貸し与えたもう』

どくん。

一際高く、心臓が躍動する。身体中の血液が巡り廻って、噴火しそうなほどに熱い。

「力オス・バースト」

巨大な、爆発。

それは俺を囲っていた見えない壁を破壊し、爆風だけで慧たちの壁をも消滅させるものだった。

「な、に……？」

御神の驚きに満ちた顔なんて無視だ。

俺はすぐに志藤の下へ駆け寄つて、抱き寄せた。

「志藤……」

……氣を失っているだけ、か。

ほつと胸を撫で下ろす。と同時に、慧たちが近くまで近付いてきていた。

「燈夜……どう、志藤さん……」

「……大丈夫だ。怪我は無いし……ただ、」

「魂が無い、かい？」

……その通りだ。

口を挟んで来た御神に、少しイラッとしたけど……間違いないんだから仕方ない。

「どうすれば……」

「うん？」

「……どうすれば、治せますか」

「燈夜さん……？」

御神なんて、嫌いだ。

今すぐにでも殴り倒したい。殴つて殴つて、勝手に選んで……迷惑を掛けた皆に……志藤に、謝らせたい。

けど、駄目なんだ。

それじゃ、志藤はこのまま一。

「…………まあ。本当なら、今すぐにも君を消しちゃいたいんだけど……」

数人が身構える。

「……そんな事をしたら、全面戦争になつそうだね。また今度にするよ」

「今度も今も無いです。燈夜さんは絶対に死なせませんから」

ふう、と嘆息した。

「……分かった。志藤彩伽は治しておくれよ」

「……そんな事、出来るのか？」

「僕は何でも出来るよ。何でも、ね」

そう言って、御神は俺たちに背を向けた。

「明日には眼を覚ますだろう。ただし、覚えておくと良い

もう結構離れているところに、御神の声は良く聞こえる。まるで、頭に直接響いているかのようだ。

「一ノ瀬燈夜君。僕の予感……いや、予言だ。君が僕の敵にしろ味方に付くにしろ……世界は君を中心に傾いていくよ」

そういった御神は、静かに闇に消えていった。

「君は、弱いね」（後書き）

なんかテコヒル……呆氣無也あせたー。

ライフが80000と考えてしまつので、あつ、もつ終わり……  
となるのが多い（汗）

ライフ4000で遊戯王小説を書いている方々は、どう考へていて  
のでしようか？

今回は、志藤彩伽の過去の一片。それと一ノ瀬燈夜に聞こえた“声

”といつ秘密を置きました。

さて……謎あんまりの“声”の正体が分かるでしょうか？（笑）

感想、評価等お待ちしております

「……は、恥ずかしいですか」

日が落ちて、また昇り。

1時限目のはじまりを告げる金の音が響いても、講義が開始される事は無かった。

その理由は簡単である。

「本日から、第五位の教育係りとして、御神コーコーポレーションの会長である御神新さんが来て下さりました」

頭が痛い。

「災難ですね、兄さん」「慰めないでくれ……」

名田上は、俺の教育係り。実際のところは、多分俺の監視つてところだろうか。  
これから同じ寮に住むつて言つんだから、俺の頭痛も分かるだろう?

第五位の寮に住むのは俺と彰正先生だけで充分だ!

「今日から、私が兄さんの部屋で寝泊りしまじょうか?」「なんか怖いからそれは良い」

「……チツ」

舌打ちしたよ、この子。マジで貞操奪う気だつただろ。

同じ理由で姉さんも駄目だ。特に姉さんは零と違つて胸も大きいし、俺の理性が持ちそうに無い。

「……何か失礼な事考えませんでしたか？」

「エスパーか

「考えたんですね」

考えてません、なんて言つてももう遅いか？ 俺の馬鹿。どうどう、と睨んでくる零の静かな怒りを抑えていると、妙なタイミングで姉さん登場。

「う……」

揺れる胸を見て、零が半眼に。

「……どうせ私はお母さん似ですから」

「なんか、『めん。

しょんぼり』とある零に内心謝罪する。

昼休み。

俺は毎日買つてゐるドローパンを食べながら、大人数で中庭に居た。

俺、零、慧、結姫、凜那。姉さんは新しく出来た友達と話していらっしゃく、少し遅れてきた。  
そして、

「志藤、体は大丈夫か？」

「……平気」

志藤彩伽。

志藤は朝、俺が登校途中に起きたらしい。慧がそれを教えに来て  
くれて、俺はすぐに保健室へ向かった。  
身体に多少の疲労が溜まっているだけで、後は健康体そのものら  
しい。良かった、良かった。

「……ところで燈夜」

「どうした？」

「……今日のパンはどうだった？」

「焼きそばパンでしたが、ナニカ？」

しかも俺が買つ前の奴は、最早何が入つているのか分からぬパン  
だった。失神したくらいだし、物凄いのだったんだろう。

……ヤになるね、もう。

……これからも買つけど。

「引き連が強いということで良いじゃないか」

「良くない。これはプライドの問題だ。俺は……絶対に諦めない！」

「そんな格好良い台詞を叫ばれても……」

「じもつとも。

「そんなことよつ～、もつすぐ文化祭みたいだね～」

「そんなこと……姉さん、以外と毒舌ツす。天然だから尚悪い。

「文化祭、ですか」

「階級なんぞ関係なく、数人が集まつて出し物を出せるらしい」

「そうなのか……詳しいな、凜那。

「僕たちも何か出す?」

「……何を……?」

「え? えと……と、燈夜?」

「俺に流すのかつ!?

「あ~……」、「コスプレティュエル?」

「ゴメン。GXの文化祭パクった。

「良いわね~。燈夜ちゃんのコスプレ、見たいわ~」

「こ、コスプレですか……は、恥ずかしいです」

「兄さん、カメラの用意は出来ています」

「撮るなっ!」

「しかもどこから取り出したんだ、その高級カメラ、……。  
これだから零つて油断ならない。

「それなら、コスプレティュエルとコスプレ喫茶を合わせないかい?  
「どうから湧いて出たんだお前はっ!」

「神出鬼没だな、御神。」

「俺の背後に立つて、御神がっこり顔をしている。その無駄な爽やかスマイルが苦手なんだ、俺は。」

「…………「スプレ喫茶…………？」

そしてお前も、良く普通に話せるよな……志藤。

「うん、そう。コスプレしたまま喫茶店をやつて、休憩中とか、デコールを挑まれた時に余興としてデコール。勿論店員さんがデコールするのもオッケー」

「うわ、メンズー…………。

「良いですね、それ

え、マジで？

結姫だけじゃなく、凛那や慧も結構乗り気だつた。予想外だ。

「どうする、燈夜？」

「兄さんの一言で決まりますよ」

「うわー…………視線が集中してるー。

雪や姉さん、慧はともかく……なんで結姫や凛那も俺に任せせるよ？

…………良し。

「文化祭、盛り上げるかー…………」

ぱんつ、と手を合わせながら俺はそう叫んだ。

文化祭で行う出し物の申請も終わり、私、御園凜那は島外れの灯台に来ていた。

「…………」

昨日。ほんの昨日だ。鴻ソフィアの中から志藤彩伽が現れ、一悶着が起こった場所。

まだ然程時間が経っていないというのに、皆…………それこそ、当事者でさえ、元気に講義を受けていた。

異常だ、と……私は表情を歪ませる。

「ん……凜那？」

「つ……燈夜、か」

当事者の1人、一ノ瀬燈夜だ。

ディスクも付けず、制服のポケットに手を入れながら歩いてくる。その視線は海、そしてその向こうへと注がれていた。

「まさか、お前や結姫も元は地球の人間だとは思わなかつたよ」

「……私も、御神に教えられるまでは忘れていたさ」

「そうなのか？」

「ああ。転生したとは言え、記憶なんぞ無い。御園家に生まれ、御園家で育ち、偶然にもこのアカデミアにやつて来たのだからな」

ふうん、と燈夜が呟く。

恐らく、咲之宮もそうだらう。隣で、同じような反応をしていた

のだし、間違いない。

「……私は、」

「うん？」

「…………関係ない。地球とか、救世主とか…………私には関係ない。強くならなくては…………」

階級を上げ、  
Iのアカデミアの誰よりも

つ……燈夜相手に、何を喋っているんだ、私は。思ったよりも滅  
入っているな……。

「……すまない。忘れてくれ」

「まあ、お前に何の二ノハシ似合いかない？」

何を突然……？

しかし、燈夜の眼は真剣だ。

「ううん、やっぱイメージ的に戦士族……か？」凛那つて可愛いと  
いつまでも奇麗だしねー

一一一

「……」コイツは小声で何をつぶやいていたのか、さすがにわからぬ。

頬が紅潮するのが分かる。そんな事言われた事も無いから当然だ。

「俺も、強くならないとな  
……な、え？」

と、当然雰囲気が変わつたな……。

どこか憂いを帯びた様子の燈夜は、眼を細めて真っ直ぐにアカデミアを見つめている。

「…………

その横顔に私は、暫し見惚れてしまっていた。

「……じゃあな。凜那も早く帰れよ？ 女の子の帰り道は危ないぜ？」

「つ！ わ、分かっている！」

笑いを噛み殺しながら、燈夜がその場を後にする。

「私は、何を……」

夜風は冷たい。

けれど何故か、私の身体は少し、火照っていた。

「……は、恥ずかしいです」（後書き）

ここに文化祭の予告と凜那のフラグ立て。

しかし、文化祭開催はまだ少し先です。主要キャラ毎のイベントをやりたいなーと。文化祭前で2・3人……短いですよ？（笑）

感想、評価等お待ちしております！

「それはズルイ、です……」

文化祭の準備も少しづつ始めて来た今日。

世界の救世主（ここ、笑うとこ）メンバーの10人と+（俺と御神）で喫茶店を切り盛りする事に決まって1週間。

最初はギクシャクした仲も、少しづつ改善されてきた気持ち良い日。

それこそ、

「そりいや、志藤を治して貰つた事……御神にお礼、言つてねえな  
なんて事さえ呟いてしまつほどに気分の良い日の朝。  
教室……俺の机の上。

「……果たし状？」

無駄に可愛らしい丸文字で書かれているから、俺にとつて差出人は分かり切つたモノだったとさ。

「……はあ」

「……？ あれ、姉さんは？」  
「若菜さんなら、今頃どこかで告白されてるんじゃないかな？」

「……昨日は雪だつたよな？」

「ちなみに結姫さんは一昨日でした」

「け、けど慧さんはその前でしたよね？」

モテモテだなお前らつ！？

いつもの如く、追い立てる野獣どもから逃げ切つた俺は昼休み、ドーパンを持つて中庭に来ていた。

「……この様子じゃ、明日は凜那か」

「冗談は止してくれ。私なんかを好きになってくれる人など居るのか」

「分からぬぞ？ お前も、このメンバーに負けず劣らずの美人だからな」

全く。少しば俺の平凡な容姿を見習え！

つて……あれ？ なんで固まってるんだ、凜那？ 他の皆も俺を睨んでるし……俺、何かした？

……はつー？

「……お前ら……そつか。このカスタードパン、そんなに食べたかったのか」

「違いますっ！？ といつかなんでそんなにパンがあるんですかっ！？」

「数撃ちや当たる……試してみたんだ。10個……7個がカストードパンだったよ……」

あ、涙が。

つか、パンの事じゃないならなんで俺は睨まれてたんだ？ 首を傾げ始めた俺に、溜め息吐く皆さん。

……あ、諦められた？

「「」れは……苦労しそうです……」

「これからもライバルが増えそつだよ……」

「兄さん……昔から変わりませんね」

……えと、「」めんなさ」?

なんで俺が責められてる感じになつてゐるんだが?……?

「それが燈夜ちやんくおつてじへだからへ」

「わわつ! 姉さんにつの間につ!-!-?」

とこか、抱き付かないで!-

「姉さん。兄さんから離れて」

「嫌よ~」

「……離れなせ~」

「イヤ~」

……あ、俺を挟んで喧嘩しないでくれません?

そして姉さん、俺の頭に柔らかい山が当たつてゐるんだが?へー...

「……燈夜。鼻が伸びてるよ」

「鼻の下な? 鼻が伸びたら血信満々か茹じへば嘘吐きだからな?」

そもそも伸びてねえつー?」

「……」

あの、そろそろ離れて……。

「「デュエル（～）…」」

「一体どんな流れでデュエルになつたのっ！？  
つか、俺を離してデュエルして！ 慧たちも空氣読んで離れなくて良いから！

「燈夜ちゃんが近くに居るから、負ける気がしないわ～」

「く……勝てる気がしませんね」

「じゃあ戦るな！」

「私の先攻です、ドロー！ 私は《セイクリッド・シェラタン》を召喚します。このカードの召喚に成功した時、私はデッキより《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます。カードを1枚伏せて、ターンを終了します」

セイクリッド 現実世界、とこより日本で出たDT13で出たカテーテゴリだ。  
デュエル・ターミナル

雪や姉さんが俺に影響されて遊戯王を始めた時、丁度この弾が出来た時期だから、雪はセイクリッドをずっと愛用している。

「あたしのターン、ドロー。あたしは《ヴェルズ・マンドラゴ》を特殊召喚～」

一方で、姉さんはヴェルズ。雪に対抗したのかそうでないのか、セイクリッドと同じくDT13で登場したカテーテゴリだ。

ちなみに、マンドラゴはフィールドの自分のモンスターが相手よりも少ない時、特殊召喚出来るモンスターだ。

「せりに、『ヴェルズ・ヘリオロープ』を召喚へ

んで、ヘリオロープは通常モンスターだ。攻撃力は1950と中途半端だけど……良く考えたら、それはヴェルズ全体に言えるな。

「バトル。マンドラゴちゃんでショラタンちゃんに攻撃へ」「う……！」

霊-LP 4000 3150 .

「ヘリオロープちゃんとダイレクトへ」「う……！」

霊-LP 3150 1200 .

前から思つてたけど、ライフ4000って少ないよな。『デュエルがすぐ終わっちゃう。

まあ、原作みたいに表側守備表示が無いだけマシだけど。

「カードを一枚伏せて、終了ね～」

はあ……早く終わらせてくれ。

ん？ あれ……もしかして、もし姉さんが勝つたら俺、姉さんに抱きつかれたまま？

それは……色々困る……イロイロ……

「し、霊……も、もし勝つたら……えと、頭撫でてやるや～。私のターン、ドローリーすまー」

……今、霊の眼がキリッとなつた。うし、勝つる。

「私は永続魔法、《セイクリッドの星痕》<sup>セイクリッドの星痕</sup>を発動します。リバースカードオープン、《リビング・デッドの呼び声》。シェラタンを特殊召喚します」

シェラタンのサーチ効果は通常召喚のみ対応して。特殊召喚されて出てきた今は、サーチする事が出来ない。

「私はシェラタンをリリースし、《セイクリッド・スピカ》を召喚します。このカードが召喚に成功した時、効果により、手札より《セイクリッド・エスカ》を表側守備表示で特殊召喚します。このカードもシェラタンと同じくサーチ効果を持っています。シェラタンと違うのは、特殊召喚にも対応している点ですね、兄さん」「何故俺に訊く……まあ、そうだけど」

「エスカの効果により、私は《セイクリッド・エスカ》を手札に加えます」

……まるでガジェットだな。レベル違うけど。

「LV5のスピカとエスカでオーバーレイ・ネットワークを構築。ランク5……来て下さい、《セイクリッド・ブレアデス》！」

来たか……セイクリッドのエクシーズモンスター。  
エクシーズ素材を1つ取り除く事で、フィールド上のカードをバウンスする強力な効果を持つカード。

「セイクリッドと名の付いたモンスターがエクシーズ召喚に成功した時、星痕の効果により1枚ドローします」

引いたカードを見て、雫は成る程、と呟いた。

「……プレアデスの効果を発動します。素材を1つ取り除いて、《ヴェルズ・ヘリオロープ》を手札に戻します」

「チヨーン、《侵略の侵食感染》発動～。1ターンに1度、ヴェルズと名の付いたモンスターをデッキに戻してヴェルズをサーチするのよ～。ヘリオロープちゃんを戻して、《ヴェルズオランタ》を手札に～」

「……そうですか。なら、」

霧は、手札の1枚を抜き取る。

「魔法カード、《簡易融合》発動します。1000ライフコストを支払い、」

霧 LP 1200 200 .

「《おジャマ・ナイト》を特殊召喚します」

「きやあ～、おジャマちゃん邪魔～」

ああ、邪魔だ。おい、お茶飲むな！ そのちやぶ台びいから出しあつ～？」

「墓地の《セイクリッド・シェラタン》をゲームから除外し、《靈魂の護送船》ウル・コンヴァイを特殊召喚します。再びレバ5同士でオーバーレイ！

2体目の《セイクリッド・プレアデス》をエクシーズ召喚します

！」

あ……なんか凄い泣きそうな顔でおジャマたちが消えた。

そういうや、プレアデスはレバ5の光属性2体だったな。《ヴェルズ・バハムート》はヴェルズと名の付いたモンスターが2体だった

から、忘れてた。

「2体目のフレアアーティスの効果により、《ヴェルズ・マンドラゴ》を手札に戻します」

「あ～……」

……ホント、ライフ40000つて足りないよな。

「兄さんの応援を受けた私に、敗北の2文字はありません」

ヤバイ、格好良いよこの子。

「バトルフェイズに入ります。フレアアーティスでダイレクトアタック！」

「きや～」

「う、うわああつー…？」

若菜 LP 40000 15000

お、俺も巻き添えで怖え～……あの、早く離してくれません、姉さん？ 俺も怖いんスけど…………うー？

「2体目のフレアアーティスでトドメです」

「うにゃあ～」

「うにゃあつて何……うわああつー…？」

若菜 LP 15000 0

「むう……仕方ないわね～」

や、やつと解放された……。

そんな何故か疲労困憊の俺に、零はトロトロと近付いてきて、頭を差し出してきた。

「お前……俺に構わず攻撃してきたから、頭撫でるの無しな  
「そんな……」

ショボン。

それこそ仔猫のように肩を落とす零に、俺はふつと少々笑い、  
なるべく優しく零の頭に手を乗せた。

「え……」

「お疲れさん。良いデュエルだったぜ」

ワンキルだけどな。

「……兄さん……それはズルイ、です……」

零の呟いた言葉は、俺の耳には聞こえなかった。

そして、放課。

俺は最近足に運ぶ回数が多いな、と思い始めた灯台の下へやつて  
来た。

「果たし状……ねえ」

可愛らじい丸文字。流石にハートとかは無いとは言え、果たし状  
といつ言葉を無しにすればラブレターに見えなくも無い。

……人生初のラブレターがこの世界、というのもなんか嫌だけど。  
そもそもラブレターって時代遅れ……勿論果たし状も。

さて。

「どこに居るんだ、『瀬野基』さーん」

「チツ……なんで分かんだよ」

「俺に果たし状を送つてきて、且つこんな丸文字の奴なんて、俺に  
はお前しか思いつかなかつたんだよ」

「……慧に言われてもよ。やっぱ俺にや、ストーカーとしか思えね  
H」

ああ、そういうやそんな設定喋つてたな。すっかり忘れてた。

「慧、どんな話したんだ?」

「……別に。慧も、幸二も、俺も……テメエに救われたつて事  
とかな」「

救われた?

……“あの”事か? 慧の時もそうだけど、全然自覚ねえな。  
俺としちゃ、普通に接したりしただけなんだけど。

「俺あ話聞くのは苦手なんだよ。慧の話が本当に、俺とダチだった  
つづーなら分かるだろ、俺の性格

……ああ。

「困った時は、  
拳で語る」

「デュエルッ！」

「それはズルイ、です……」（後書き）

セイクリッドヒューリズ、登場です（早っ）。  
まだカード足りないんじゃないかなー、とか思いながら書いたら  
ました、テヘッ（笑）

この話が出た時はまだDT-13が最新でした。

やばい、そろそろストックが切れそうだ……！  
ストックが無くなつたら、一気に更新速度が遅くなりそう。  
その時は、皆さん、『メンナサイ』（——）を

感想、評価等お待ちしております！

「そいつ等は気付いてねみてえだけだな……」

さて。

俺は意気揚々、といつよりはノリの乗せられた感じでデュエルを始めてしまった訳だが。

アイツの溢れる闘気を、どう沈めてやるつか……？

「俺の先攻だぜ、ドローチ！ 俺あ《黒竜の雛》を召喚！ 効果発動！ このカードを墓地に送つて、手札から……来い！ 《真紅眼の黒竜》 ッ……！」

早速お出ましか……！

基のフェイバリットカード、レッドアイズ。LVが7の割には低い攻撃力が目立つ闇属性ドラゴン族モンスター。

遊戯王チームLEGENDsの主力カードで、一番攻撃力が低い。けれど、それをサポートするカードは協力だ。

例えば、

「魔法カード、《黒炎弾》！ 俺の場にレッドアイズが居る時に、その1体を選択して発動出来る！ 相手にレッドアイズの元々の攻撃力分……つまりは2400ダメージを与える！」

「うあああつ……ー！」

燈夜 LP 4 000 1 600 .

そう、例えば《黒炎弾》。このターンレッドアイズは攻撃出来ないけれど、今のように初ターンならそのデメリットは無い。特にこ

の世界だと、ライフは4000だから《黒炎弾》の有用性は高い。

……そもそも、2400のダメージ自体は高い。

「カードを1枚セットして、ターンエンドだぜ、ストーカー」「ストーカージャ……ねえよ！俺のターン、ドロー！」

伏せが気になるな。もしもデッキ構築が地球ん時と同じなら、基本的にアレは蘇生カードだ。

慧や基、幸仁って俺と違つて手札に主力カードを集めinしな。アレがリビデとかだつたら、離が蘇生されてレッドアイズ2体目、となる可能性がある。

「俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド！」  
「はっ！ いきなり防戦かよ。こつちは攻めて行くぜH……ドロー！」  
《真紅眼の飛竜》<sup>レッドアイズ・ワイバーン</sup> 召喚！ バトル！

着実にアタッカーを増やしてきたか……。

「レッドアイズで伏せモンスターを攻撃！ 黒炎弾！」

……どつちもレッドアイズだ、と突つ込んだら負けだろ？

「伏せモンスターは《見習い魔術師》！ このカードが戦闘破壊されたら、デッキからLV2以下の魔法使い族モンスターをセットする事が出来る！ 俺は《見習い魔術師》をセット！」

「チツ……たりい。ワイバーンでセットに攻撃！」

「《見習い魔術師》、効果発動！ 《執念深き老魔術師》をセット！」

「……俺はこままターンエンドだ！」

良し……特に何も無い。やつぱりあの伏せカードは蘇生系統、と考えるか。

「俺のターン、ドロー！ 永続魔法、《魔法族の結界》発動！」

正直言つ。

……《魔法族の結界》は、使い辛い！

魔法使い族が破壊されるたびに魔力カウンターを最大4つまで乗せ、このカードと魔法使い族モンスターを墓地に送る事で乗つていたカウンター分ドロー出来るカード。

上手く出来れば4枚ドローだけど、時間が掛かりすぎるし、その上自分のモンスターを犠牲にしなきゃ行けないんだからな……。

今のこと、好みで入れてるカードだ。大好きなんだよ、このカード。

それはともかく。

「反転召喚、《執念深き老魔術師》！ リバース効果！ 《真紅眼の黒竜》を破壊！」

「チツ……」

老魔術師の執念のよくな、呪いのよくな……なんか禍々しい気がレッドアイズに纏わりつき、破壊する。

「このお婆ちゃん……」ええ。

「お、俺は《執念深き老魔術師》をリリースして、《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！」

「う……そのカードは……」

「このカードはLV8だけど、魔法使い族モンスター1体をリリースして、表側攻撃表示でアドバンス召喚出来る。そしてこのカード

の召喚に成功したターン、相手は魔法、罠カードを使えない

伏せカードは気にせず攻撃出来る。闇属性だから、《オネスト》の警戒もしなくて良い。

そもそも、元々基のデッキに《オネスト》は入らない！ 光が居ないから！

「バトル！ 《ブリザード・プリンセス》で《真紅眼の飛竜》に攻撃！ フリージング・マジカル！」

命名、俺。ネーミングセンス〇です本当にありがとうございます！」

た。

「くつ……！」

基LP4000 3000 .

「俺はカードを一枚伏せて、ターン終了だぜ」

「……やっぱわかんねエ。なんで慧や咲之宮がお前に惚れんのか……」

「おいおい、慧はともかく結姫は……」

「隠してんじやねエよ。端から見るとバレバレだぞ、お前

……。

「当人……慧とか咲之宮、後は鴻……じやねエ、今は志藤だつたか？ そいつ等は気付いてねエみてえだけどな……俺や幸仁から見りや、一目瞭然つてやつだぜ」

俺ははあ、と溜め息を零す。

「……別に、俺だって好きでやつてる訳じゃねえよ」

「テメエ……いつまでそうしてるつもりだよ？」

「俺はもう、誰も好きにならないし恋人も作ったりしないって決めたんだ」

まあ、それでも慧を振り切れない優柔不断、チキンだけどな。

……慧が笑顔で居てくれないと調子狂うのも事実。そう自分に言い訳しておこう。

「お前こそ、さわさき沢崎<sup>メグミ</sup>……慧美はどうすんだ？」

「め、慧美がなんだってんだよ？」

「……良かった。沢崎の事は忘れてねえんだな」

「あ？」

「……お前が居なくなつて、沢崎、スッゲー怒つてるんじやないかなーつて思つただけだよ！」

沢崎恵美。基の幼馴染で、俺たちが通つていた高校の風紀委員だ。俺から見ても相思相愛だというのに、奥手の基は好きじゃない、とか言つじ。慧美は結構アタックしてるのにな。

「知らねエよ！ 俺は、アイツの事なんか……！ チツ、ドロー！」

途中で言葉を止めたか。アイツも、心の奥底では認めてんだろうな。

沢崎が好きだって。

「リバースカードオープン！ 『リビングデッジの呼び声』！ 広つて來い、レッドアイズ！」

やつぱり、蘇生<sup>ス</sup>系だつたか！

「行くぜ！ 僕は《真紅眼の黒竜》をリリースして、《真紅眼の闇竜》<sup>ラゴン</sup><sub>レッドアイズ・ダークネス</sub>を特殊召喚する！」

「あ……來たか。序盤で出しても攻撃力の上昇幅は低いとは言え、墓のエースカード！」

「このカードは自分の墓地のドラゴン族モンスターの数、攻撃力が×300ポイントずつ上がっていく！ 墓地のドラゴン族モンスターの数は3体！ ょつて900ポイントアップ！」

《真紅眼の闇竜》 ATK2400 3300

《ブリザード・プリンセス》を超えた、か。ヤバイな。

「バトル！ ダークネスドラゴンで《ブリザード・プリンセス》を攻撃！」

「つ……！」

燈夜 LP1600 1100

《魔法族の結界》 魔力カウンター 0 1

「そもそも、ダメージを受けるのは厳しいな。けれど、手札にこの状況を開けるカードは無い。これは……やりたく無いけれど、無理矢理行くか？」

「俺はカードを一枚伏せて、エンドフェイズ時、墓地の《真紅眼の

飛竜》の効果発動！ このターン、俺は通常召喚を行つてない。ワ  
イバーンを除外して、レッドアイズと名の付いたモンスター……『  
真紅眼の黒竜』を攻撃表示で特殊召喚するぜ！』

『真紅眼の闇竜』 ATK3300 2700 ·

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン！ 『リミット・リ  
バース』！ 墓地の『見習い魔術師』を蘇生し、効果発動！ この  
カードが召喚、特殊召喚、反転召喚した時、魔力カウンターを乗せ  
られるカードにカウンターを1つ乗せることが出来る！ 乗せるの  
は『魔法族の結界』！」

『魔法族の結界』 魔力カウンター 1 2 ·

「さらには『リミット・リバース』！ 2体目の『見習い魔術師』！  
効果により、さらに『魔法族の結界』に魔力カウンターを乗せる  
！」

『魔法族の結界』 魔力カウンター 2 3 ·

基は何かをする様子は無い。俺のターンだ。

「ドロー！ 僕は1体の『見習い魔術師』を守備表示に変更！ この  
時、『リミット・リバース』の効果により『見習い魔術師』は破  
壊される！ そして勿論、『魔法族の結界』に魔力カウンターが乗  
る！」

『魔法族の結界』 魔力カウンター 3 4 ·

『『魔法族の結界』の効果発動！ このカードと俺の場の『見習い

魔術師》を墓地に送り、魔力カウンターの数……4枚ドローする。」

「……無茶苦茶だな、お前」

分かつてる。良いじゃないか、別に。

無茶苦茶だつて分かつてるけれど、これで手札は補充出来た。

……そうか。これで“勝て”つて言つんだな?

「行くぜ、墓!」

「来いッ!」

「俺は《熟練の黒魔術師》を召喚! 速攻魔法《ディメンション・マジック》! 俺の場の《熟練の黒魔術師》をリリースして、来い! 《ブラック・マジシャン》!」

『はつ!』

気合いと共に登場するマハード。

行くぜ!

「《ディメンション・マジック》の効果で、《真紅眼の闇竜》を破壊!」

「チツ……!」

「さらに、《千本ナイフ》! 俺の場にブライマジが居る時、相手フィールド上に存在するモンスターを1体破壊する! レッドアイズを破壊だ!」

「く……」

無数のナイフがレッドアイズに突き刺さる。ドラゴンだったからまだしも、もし人間だったら……グロイな。

「……魔法カード、《死者蘇生》！ 対象は、《真紅眼の黒竜》だ！！」

「なつ……ー？」

「 猛れ！ レッドアイズッ！！」

基の墓地から咆哮を上げながら羽ばたく漆黒の竜。格好良いな！

そんな姿に見惚れていたから。

俺は、基の手が一瞬、リバースカードのオープンボタンに行つたのを見逃したんだ。

「行くぜ？ バトルフェイズ！」

「……そつか……やつと、思い出せたぜ……燈夜！」

「つ……！」

そりや、良かつたな。やつぱりお前とは話し合ひより、戦りあつた方が合つてるみてえだ！

「行くぜ、基！ 《ブラック・マジシャン》でダイレクトアタック！ 黒・魔・導！」

基 LP 3000 500 .

「トドメだ！ 《真紅眼の黒竜》でダイレクトアタック……！ 黒炎弾！！」

基 LP 500 0 .

「その……悪かったよ。忘れてて、さ」「別に良いっての。慧もそうだったし、幸仁はまだ忘れてるし。そもそも、そんな事したのは御神だろ?」

「……ああ」

それにしても、良かった良かった。このまま思い出をなにままだつたら俺自信、凄い滅入つてただろうな。記憶を思い出させるにはデュエルが良いのかな。ただ、幸仁に勝つのは……うん、難しそうだ。

「俺、先帰るわ。ちと頭の中整理しねエと」

「……お前、考えるの苦手なんだから止めとけば? 知恵熱出るや?」

「ンだと?」

はは、と笑う。それに吊られたかのように基も笑った。

「じゃあな、燈夜」

「ああ」

その場から基が離れていく。

清々しい気分。

けれど……それを邪魔する奴が1人。

「お疲れ様、一ノ瀬燈夜君」

「……何しに来たんだよ？ つか、フルネームは止めてくれ  
すつげえ違和感がある。

「そうかい。じゃあ、燈夜君で良いかな？」

「……まあ、良いけど」

「そり、じゃあ燈夜君」

俺が海の方に視線を向ける。真っ直ぐに俺を見つめている視線を  
感じるけれど、俺は無視するように視線を逸らした。

「先日。僕が君に言つた言葉は憶えていいかい？」

「言つた言葉？」

「そつ……『君は、弱いね』……と」

……ああ。俺は同意を込めて首を縦に動かす。

良く憶えてる。だからこそ、俺は強くなりたいって思つたんだ。

「彼の最後の伏せカーデ。なんだつたと思つ？」

「……なんだよ、その質問。まさかまた……」

「《激流葬》、だよ

「つ……！」

『《激流葬》……？』

「それ……本当、なんだよな？」

「嘘を言つても、僕にメリットが無いね。本当だよ

「……！」

握り拳が自然と出来る。

慧だけじやない。

基も、手加減しやがつた、のか……！？

「先日、僕が君を消さなくて良かつた、と本気で思つよ

「波の音が聞こえない。

聞こえるのは御神新の声と、

「君程度のイレギュラーなら、僕が手を下す程の存在じやないから  
ね」

煩い程の、俺の鼓動。

「や二つ等は気付いてねHみてえだけひな……」（後書き）

少しずつ、ゆっくりと、一ノ瀬燈夜は悔しさを溜らでこく。

はい、今日は燈夜と基のデュエルでした。

『魔法族の結界』の辺りは大好きです　ｗｗ　ちょっと無理あるかなー、とは思ったけど……（笑）

ヤバイ、明日の投稿間に合つかな……この辺りから少しずつ更新が遅れていくかもしだせん、すみません（汗）

感想、評価等お待ちしております！

「殺されるぞ、視線で……」

文化祭の準備を本格的に始めて数日。

第五位の寮は小さく、食堂も残念ながら喫茶店にするには少し小規模過ぎた。

そこで俺が考えたのは至極当然の答え 外に机を並べてよう、というモノ。

そうすればコスプレデュエル中も観戦できるし、悪くない案だと思う。

そして今日。

俺は今、巻き金髪お嬢様のリリア・フォルゼン・レイランドと2人きりで街に出向いていた。

「……どうしてわたくしたちですの？」

「今更何だよ……。仕方ないだろ？」

なんか、喧嘩し始めちゃったんだから……。

俺は肩を竦めながら、昨日の出来事を思い出していた。

「大分、様になってきたな」

並べられた数十個のテーブルと椅子を眺めながら、俺は腕を組みながら頷いた。

アカデミアの講義も終わり、放課後。ソフィアを除いたメンバーが文化祭の準備をしている今。俺が何故か仕切りながら第五位を喫茶店へと染めて行つてゐる。

「そろそろ材料とか買い集めた方が良いんじゃないかな？」  
「ん？ あ～、そうか……後2週間だしな」

慧の言葉に、俺は文化祭への短さを感じていた。ある程度の材料は前日に御神が持つて来てくれるらしいけれど、一部の人は練習も必要かも知れないしな。

「このメンバーで料理が出来る奴つて誰が居る？」  
「えつとね……燈夜と僕だけ、かな……」  
「…………」  
「…………」

す、少ねえ……。

正直、慧辺りは良い客寄せ虫（言い方悪い）だから厨房よりもホールに行つて貰いたいし……ローテーションするにしても、流石に人数が少なすぎる。

「こりや、明日にでも少し材料を買つてきて、練習して貰つた方が良いか……？」  
「買い物つて、どこに行くんですか？」

休憩に入ったのか、結姫や凜那が近付いて来る。全員集合、つて感じだな。ソフィアや御神は居ないけど。

「ん~、流石に購買じゃ足りないし……島から出て町に行くかな

つ……?

なんだ……今、空気が張り詰めたよつな……つ!?

「それじゃ、私が一緒に行きますよ」

「そんな……僕が行くよ。結姫さん、疲れちゃうでしょ?」

「……わたしと、行こ……?」

あの……俺が行くのは確定なのか? 僕が仕切つてるとは言え、材料書けば俺居なくとも大丈夫だよな?

なんて言つてもその主張は聞き届けられる事は無いだろ? から、俺は空笑いしか出来ない。

「やれやれだな。そういうえば燈夜、町を歩いた事は無いんだつたか……。私が買い物がてら、案内してやる事も出来るぞ?」

「その必要は御座いません。兄さん、私が全身全靈を持つてこ案内いたしますが」

「皆必死ね~。こには一つ、お姉ちゃんと一緒に逃避行しちゃお~?」

どんな妥協案だつ!? つか、逃避行つて言い方はそこはかとなく駄目な気がする!

しかし、ここで「俺は行かないぞ?」とか言つたら咄びんな顔をするだろうか。見てみたい気もする。

「なんつーか、必死だな……将来苦労するぜ、燈夜」

「はあ……既に苦労してゐつづーの」

「……それもそうだな」

基の慰めに、俺は深い溜め息を零す。

「なあ……」  
「で俺が、基と行く、とか言つたらひつなると御ひづへ。」  
「殺されるぞ、視線で……俺が」

……そつか。

流石の基も、恋する乙女には勝てないか……。

「わういえば——ノ瀬様」

今までどこに行つてたのか、何も知らないリリアが近付いて来る。

「第壹校の特待生と仲が宜しいから、とこう理由で注目を浴びているのですが」

ふむ。

「御神様がそれを利用して、町でエキシビジョンデュエルを行いたいらしいのです。なので明日、わたくしと一緒に町へ向かって頂けませんか?」

『え?』

おお……旨息ピッタシだ。

俺もついえ? と聞き返すといひだつたし。

それより……、

「え? ど、どうしてわたくしは旨様に睨まれてますの?...?」

リリア……不憫な子つ……！

そんで、また色々言い争いがあつた上で、俺はリリアと2人だけで町へ来る事に。

その時、またリリアは皆の反感を買つたといつ。

「なんか……災難ですわ……」

「お疲れ様」

同情しておくよ。

俺が<sup>ねぎい</sup>言葉を呟くと、本当に……、トリリアは重たい息を吐く。

「ところで、どうして俺が噂になつてるんだ?」

町で“デュエルした事なんて無い……いや、結婚を襲つた不良たちが居たか。

まあそれも人気の無い場所だったし、そもそも噂の内容は“第壹校の特待生と仲が良い”らしいし、俺はどうやって噂になるのか分からぬ。

「それは簡単ですね。第壹校の特待生は時折、テレビ出演するのはご存知でしょう?」

ああ。俺が第壹校に慧たちが居ることを知つたのもテレビだった

しな。

「その際……好きな人は居るのか、といつ質問に慧様が……」「あ……成る程」

口を滑らした訳ね……。つてことはアレじやね？ 慧ファンの人たちに反感買つてるんじやないか、俺？  
くそ……慧め、厄介な事を……！」

「その上昨日の撮影では、基様が貴方の事を語つてしまい……」

基、お前もか。

「……まだありますのよ  
「今度はなんだつ！？」

「聞くのが怖い……！ けれど聞かないのも怖い……！」

「結姫様が父親に貴方の事を喋つてしまい、本口は家族全員でエキシビジョンマッチを見に来るらしいですし」

咲之宮家全員参加！？

「凛那様の家は幾人ものプロデュエリストを輩出した教育場なのですが……『両親が貴方を見にいらっしゃるといつお話です』」

……おおつ。

「御神様が様々な業界のお偉い方を連れて来ると仰っていましたか  
うう」

御神……やつぱりお前とは、一度拳を交えないと行けないようだな……！

つか、プレッシャーヤバつ！？

「俺……今日を乗り切つたら、」

「文化祭を頑張りますのでしじう？ 分かっておりまわ

死亡フラグを切られたつ！？

空氣読めよ、リリア！ そういうの、“KY”って言つんだぞ！

「はあ～……」

今日一番の溜め息を、俺は零したのだった。

「うわあ……」

と俺が声を上げるのも最もだと思つ。

櫻都町の真ん中に位置する中央公園が、俺のエキシビジョンデュエルをする場所だというから来て見れば、そこには人、人、人。

それこそどこのライブのように入人が集まり、フェンスで前へ出て来られないように遮られている。

そのフェンスの前に居るのは、椅子に座つた複数の大人たち。

「前に居る方たちが、咲之富家や御園家……その他、有名な企業や会社の方々ですわ」

「マジか……」

ざつと2・30人は居るんじゃないだろうか。俺の緊張も鰻上りである。

「あそこに居るのが咲之富家の一家です」

そう言つてリリアが指差したのは、並ぶ椅子の中心辺りに居た家族だ。

なんと言つか、厳格そうな男性とずっと微笑んでいる女性。女性の方は母親だらうか？ 子持ちとは思えないほど若そうだけど、結姫に似てる。

そして並ぶ3人の女性たち。約2名は、俺よりも少し年上か？ という感じだ。一番隅に座っているのは、小学生……くらい？ の女の子。

……なんか、無表情だ。腕を組んで、脚を貧乏揺すりしている。

(あれが……結姫の家族、か)

姉2人は勿論、妹にさえ劣っている、と泣きそうな声で話していくのを思い出す。

私、捨てられたも同然なんですよ。  
自殺する理由が出来るなあ、って……。

「…………」

「……？ どうか致しましたの、一ノ瀬様？」  
「……いや。なんでもない」

大きく深呼吸する。

……良し。頑張るかね。

そう気合を入れると、俺は両頬を2回ほど叩いた。程好い痛みが気付けとなつて、身体の強張りを消していく。

『本日は皆さん、良くお集まり頂きました!』

やつと開始か……と、俺が会場に視線を送る。  
と、

「……司会はお前かよ」

御神新が、マイクを持つて微笑みを持ちながら喋っていた。

『……と、前口上はこの辺りにしておきましょう。今や世界中でも注目を浴びている第壱テュエルアカデミア櫻都校……その特待生筆頭、瀧川幸仁君を呼びましょう!』

はつ……！？ 幸仁、來てるのか！？

俺がキヨロキヨロと視線を泳がせると、リリアの後ろで静かに立つている姿が見えた。

なんつーか……前の世界でもそうだったけど、影薄いな、お前。  
無口だからだろ？ 俺が。

『瀧川幸仁君、どうぞ…』

無言で会場に顔を出す幸仁。その瞬間、耳を劈くような歓声が沸き起こつた。

主に、女性の甲高い声。

「凄い人気ですね……わたくしには、あの方の良さは分かりかねますわ」

……まあ、顔だろ。好みじゃないんだろうしな。  
なんて言つたらおしまいな気がして、俺は黙した。

『続いて、1ヶ月前に第壹校へ編入し、特待生の一ノ瀬若菜、一ノ瀬零と血を通わし、瀬野基と長谷部慧と友人関係を結んでいる注目の人間！ 一ノ瀬燈夜君の登場です、どうぞ！』

う……来たか。

俺はもう一度深呼吸して、会場へと一步踏み出す。

歓声は無かつたけれど、壮大な拍手と共に俺は生睡を呑み込む。

『質問タイム……と言いたいところですが、まずはデュエルから参りましょうか！』

え、いきなり？

「燈夜君、幸仁君。準備は良いかい？」

マイクから口を離し、御神は俺たちに問う。  
幸仁は静かに頷き、ディスクを構えただけだった。

「ふう……良し。大丈夫だ」

昨日調整が終わつたばかりの「テッキだ。  
いつも思うけれど、事故らないでくれよ……？

「——ノ瀬燈夜」

俺は「テッキに祈りを捧げていると、静かな口調で幸仁が話し掛け  
て来る。

「俺にはまだ、お前と過ごした記憶は無い……」

……。

「だが基も慧も、そして俺も……記憶が無かつた数ヶ月間、何かが  
“足りない”と感じていた」

俺は、ディスクから「テッキを取り出し、ベルトに取り付けたケースに入っている「テッキ」と入れ替えた。

「その足りない“何か”がお前なのか……試させて貰う」「  
上等だ。お前こそ腕が鈍つてないか、試してやるよ」

「「テュエルツ——！」」

「殺されたるぞ、視線で……」（後書き）

やつべー、ここの先の展開考えてねー（汗）

（どひょひ……どひょひ……） 本気で考えてない奴  
これは……読者様には少し待つでもうつしか（ry）

感想、評価等お待ちしております。はあ。o-rz

「確かに、じいが懐かしい感じがある」

「俺の先攻、ドローー！」

先攻は俺だ。

幸仁に出し惜しみなんてしていたら、一発でライフは0だ。ただでさえライフポイントは少ないのに。

「俺はモンスターをセット！ ターンエンド！」

「……ドローだ。俺は手札よりファイールド魔法、《竜の渓谷》を発動する」

辺りが竜の飛び交う渓谷へと早代わりする。

元々はドラグニティで活躍するよう作られたカードだが、実際、《竜の渓谷》はデッキから好きなドラゴン族を落とせる効果を持つ。そこに、 “ドラグニティ” の要素は必要無い……！

「《竜の渓谷》の効果を発動する。手札の《青眼の白龍》を捨て、デッキから《伝説の白石》レジェンド・オブ・ホワイトを墓地へ送る。この時、《伝説の白石》の効果によりブルーアイズを手札に持つてくれる」

手札の消費は無いに等しい。

この動きをしたところでは、幸仁の手札にはドロー強化のカードがあるはず。

「《トレード・イン》発動。手札のLV8モンスター……ブルーアイズを捨て、2枚ドローー」

やつぱぱつたか。

「《シャインエンジエル》を召喚し、バトル。《シャインエンジエル》でセットモンスターを攻撃する」

「つ……モンスターは《水晶の占い師》！ リバース効果により、俺は《デッキ》の上から2枚めくる！」

めぐられたカードは《魔導戦士ブレイカー》と《魔法族の結界》。

「……」

「俺は《魔法族の結界》を手札に加え、ブレイカーを《デッキ》ボトム……《デッキ》の一番下に戻す」

手札にブレイカーはある。後続を加えておくのも良いけれど、これはドロー強化しておこう。

……ま、時間も遅いし成功するかも分からんんだけど。

「俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドローっ！」

さて、どうしようか。

出来れば《シャインエンジエル》は戦闘破壊したくない。だからと言つて、《竜の渓谷》も残しておぐと後々厄介そうだ。  
……と、すると。

「俺はまず、《魔法族の結界》を発動！ そして相手の場にモンスターが存在し、俺の場にモンスターが居ない場合、このカードは特殊召喚出来る！ 《太陽の神官》！」

サイドラのような—SS（特殊召喚）方法を持つ《太陽の神官》。

別に効果は意味がない。

要は、“魔法使い”族である事が重要なんだ。

「俺はチューナーモンスター、『ナイトエンド・ソーサラー』を通じて召喚！」

チューナーモンスター、ところが俺の言葉に観客席がざわわつく。  
それはそうだろう。

チューナーといえば、シンクロ召喚の際に必要なモンスターであり、この世界ではその“シンクロ”は未だに田の田を浴びていないのだから。

「そして LV5の『太陽の神官』に、LV2の『ナイトエンド・ソーサラー』をチューニング！」

「はは……叫ぶしかないよなっ！？」

「魔導の道標を、至高の光よ！ 今此処に、全てを解き明かし式を並べん！ シンクロ召喚！ 『アーカナイト・マジシャン』！」

うは、厨一病くせえ……とは思にながりも、妙にワクワクした気持ちが踊る。

ちなみに今の台詞は既興だ。適当に呟んだけれど、それなりに言葉になつて良かつたと思つ。

「シンクロ……って、確か……」

「ああ、第壹校の特待生しか知らなかつた召喚方法……」

「それも、特待生から話には聞いたけど、実際見るのは初めてだよな……」

…… そうなのか？

まあ確かに、幸仁や基、慧は勿論、この前初のテレビ出演を果たした零と姉さんもシンクロはしないしな。

幸仁はシンクロモンスターのカタストルが嫌いで、総じてシンクロはしたくないらしいし、慧はシンクロするとネオスの影が薄くなりそうだから、だと。

んで基は、「レベルの計算が面倒臭エ」らしい。

「《アーカナイト・マジシャン》がシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ乗せる！ このカードの攻撃力はこのカードに乗っている魔力カウンター1つに付き1000ポイント上がる！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター 0 2 .

《アーカナイト・マジシャン》ATK400 2400 .

「《アーカナイト・マジシャン》の効果を発動！ フィールド上の魔力カウンターを1つ取り除き、フィールド上のカードを1枚破壊出来る！ 対象は《シャインエンジェル》！」

「く……」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター 2 1 .

《アーカナイト・マジシャン》ATK2400 1400 .

「2回目の効果！ 《竜の渓谷》を破壊する！」

《アーカナイト・マジシャン》魔力カウンター 1 0 .

《アーカナイト・マジシャン》ATK1400 400 .

そういうライフは4000だつ……一度《竜の渓谷》を残して

ダイレクトアタックしても良かつたんじゃないか？

……けどそれだと、攻撃力400のモンスターがそのままになっちゃうか。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

何はともあれ、俺のターンは終了。  
怖い、幸仁のターンだ。

「ふつ……成る程。確かに、どこか懐かしい感じがする」

「幸仁……？」

「俺のターン、ドロー」

今、何を呟いたんだ？

「俺は『サファイア・ドラゴン』を召喚する。バトル！　『サファイア・ドラゴン』で『アーカナイト・マジシャン』を攻撃！」

アーカナイトの守備力は1800。1900の攻撃力を持つサファイアには勝てない。

『魔法族の結界』魔力カウンター 0 1.

「メインフェイズ2。カードを1枚伏せ、ターン終了」

あの伏せ……1枚は『正当なる血統』の可能性が高いな。  
墓地にはもうブルーアイズが居る。用心しておかないと。

「ドローっ！……良し、やるか。俺は『永続魔法』、『魔力僕約術』  
を発動！　これで、魔法カードを使う際に払うライフコストを払わ

なくても良くなる。そして、《黒魔術のカーテン》……「

奈落とかは、無いでくれよ……そう願いながら、俺は一度大きく息を吸う。

「このカードはライフを半分支払い、デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する……」

《ブラック・マジシャン》、とこうモンスター名を告げたからか。再び周囲のざわめきが強くなる。

これで俺も注目の的なんだろうなあ……御神辺りは、その辺りを分かっている上でこのデュエルを計画したんだろう。なんか、簡単に踊らされてる気がするのは癪だけど……今は良い。

いつか見返そう、と決意しながら俺はデュエルを続ける。

「来い、マハーダッ！」

「魔法力ード、《黒・魔・導》！ 俺の場にブライマジが存在する時、相手の魔法、罠カードを全て破壊する……」

「魔法力ード、《黒・魔・導》！ 俺の場にブライマジが存在する時、

相手の魔法、罠カードを全て破壊する……」

擬似《ハーピィの羽根箋》だ。

幸仁は何を発動するまでも無く、大人しく破壊されていた。

《正当なる血統》。案の定、つて感じだな。

「バトル！ 《ブラック・マジシャン》で《サファイア・ドラゴン》を攻撃！ この時、伏せから《マジシャンズ・サークル》発動！

お互に攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！ 来い、マナ！』

『いっくよー！』

「……俺のデッキに魔法使いは居ない

良し、押し切れる！

「続行！ マハード、あのドラゴンに攻撃だ！』

『はあっ！』

幸仁 LP 40000 34000

「続いて、《ブラック・マジシャン・ガール》……マナでダイレクトアタック！』

『えいっ！』

幸仁 LP 34000 14000

なんか……マナの気合の入れる声、可愛いです。  
和むなあ……なんて、言つてる場合ぢやないつての、俺！

「俺はこのままターンENDだ！」

「ふ……」

俺がエンド宣言をすると、幸仁が静かに笑っていた。

「一つ訊きたい。お前は……舞のことを、知つてゐるのか？」

舞 興野舞。幸仁の恋人で、今は大学2年生だ。  
活発な性格で、中学、高校と陸上部で走り回っていた、というのを俺は聞いていた。

「ああ」

「……そうか。やはりな」

物静かに納得する。三度ふつ、と笑みを浮かべた幸仁は静かな動作でデイスクに手を乗せる。

「俺のターンだ。ドロー」

ドローカードを暫く見つめる幸仁。そして成る程、と肩を竦め、違うカードを手札から抜き出す。

「魔法カード、『思い出のブラン』。墓地の存在する『青眼の白龍』を特殊召喚する！」

つ……来たか。

「さりに『古のルール』……手札のブルーアイズを、特殊召喚するツー！」

に、2体目来たあ……！

「LV8の『青眼の白龍』の2体でオーバーレイ・ネットワークを構築する」「え……」

「ランク8……『サンダーホンド・ドラゴン』、エクシーズ召喚……！」

ま、まさかそっち……？ 地球に居た時はそのカード、使って無かつたぞ！？

「1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、このカード以外のモンスターを全て破壊する……！」

『く………』

『きやあつ！』

マハード、マナ！

うわあ……まさかの全滅。その上、

『魔法族の結界』 魔力カウンター 1 2 .

同時破壊だから乗るカウンターの数は1つだけ……つ、辛い。

「バトルフェイズ。『サンダーホンド・ドラゴン』でダイレクト」「うああっ！」

燈夜 LP 4 0 0 0 1 0 0 0 .

歓声が湧きあがる。勿論女性の黄色い歓声の方が大きい。

うああ……耳が痛い……つ！

それにして……ヤバイ状況だ。俺の場には伏せカードが1枚と『魔力僕約術』、2つのカウンターが乗っている『魔法族の結界』のみ。

その上……俺の手札は0枚だ。

「俺は……このまま、ターンを終了する。来い、一ノ瀬燈夜」

「つ……」

仕方ない……合計3枚のドローに賭けるか！

「エンドフェイズ時、リバースカードオープン！《リミット・リバース》！墓地の存在する《水晶の占い師》を特殊召喚する！そして俺のターン、ドローツ！！《魔法族の結界》の効果を発動！俺の場に居る《水晶の占い師》とこのカードを墓地に送り、俺は2枚ドローする！」

……。

成る程な。ここで引くのか……。

「幸仁！」

「……？」

「俺は慧とデュエルして、基とデュエルして……次はお前だろうな、つて勝手に思つてたんだ。だから俺は、お前とのデュエルの為に数枚、このデッキに加えられたカードがある」

デュエルをしたら記憶が戻るんじゃないか、と思った。もしかしたら本当に葬なかもしれない。

けれど……2人のデュエルでは、共通点があつたんだ。

慧はネオス、基はレッドアイズが俺の場にやつて来た時……2人の記憶は戻つた。

なら。

「まずは、俺もお前と同じカードを使わせて貰うぜ。《思い出のブラン》！ 墓地の《ブラック・マジシャン》を蘇生させる！ そして《千本ナイフ》！ 《サンダーハンド・ドラゴン》を破壊する！」

「つ……」

これで幸仁の場はがら空きだ。

「お前とのデュエルの為に入れたカード……見せてやるよつ！ 俺は装備魔法……《自立行動ユニット》を発動する！」

成る程、と言つた様子で幸仁は息を吐く。

「このカードのライフコストは1500……それは《魔力検約術》で不要になつてゐる。相手の墓地からモンスターを攻撃表示で特殊召喚して、このカードを装備する。対象は、《青眼の白龍》だ！」

俺の場に降臨する神々しい龍。白銀の身体は太陽の日差しに煌き、つい息を呑んでしまうほどに威圧感に溢れていた。目を見開いて、幸仁の時が止まる。

「バトルフェイズ。《青眼の白龍》で、幸仁にダイレクトアタック！」

幸仁 LP 1400 0 .

“滅びのバーストストリーム”が、幸仁を包み込み。

エキシビジョンデュエルは、俺の勝利に終わつた。

「確かに、ヒロが懐かしい感じがある」（後書き）

私って、『魔法族の結界』……好きだなあ（笑）

そして『魔法族の結界』に助けられる主人公、一ノ瀬燈夜。  
せうには何気にこの小説初のシンクロ召喚。

ふう……疲れた（爆）

シンクロ召喚の時の台詞とか、全て血口流なんで……考えるの辛い  
ですよ

感想、評価等お待ちしておりますね！

「その時は、お前も守らせてやる」

……勝つた……。

信じられない……。

けれど、幸仁の場に伏せカードは無い。慧や幸仁のような“手加減”は無い。

俺は　！

『なんと、勝者は編入生である一ノ瀬燈夜君でした！　しかし驚愕に満ちている方、『安心ください。瀧川幸仁君の持つ、たった一枚の手札……』

まさか……。

『『死者蘇生』でした。《サンダーハンド・ドラゴン》の効果を服用後、『死者蘇生』により墓地の『青眼の白龍』を蘇生させれば幸仁君は勝っていましたので』

心に、影が差す。

まるで太陽がどす黒い暗雲に隠されていくように、俺の目の前も闇が覆づ。

君は、弱いね。

御神の鋭い台詞が、的を射る。

「燈夜……そ、うか、思い出した。何故忘れていたのか……」

幸仁が近付いて来る。

思い出してくれた。それは凄く嬉しい事だ。嬉しい、はずなのに

……！

「 来るなッ！…」

俺は、気付けばそんな言葉を吐いていた。  
はつとなつて、俺は辺りを見渡す。

御神は全てお見通し、という様子で俺を見つめている。珍しく目  
を見開いて俺を仰視する幸仁。

観客席には、様々な視線が俺を突き刺す。結姫のご家族も、凜那  
の両親も。

「 ……ッ」

逃げる。

この視線から、早く……！

「 一ノ瀬様っ！…？」

俺はその場から、背を向けて走った。

どれくらい走つただろうか。

気が付くと、そこは公園だった。中央に噴水があり、その周りにはベンチが4つ。四方向に分かれた道はどこまで続いているのだろう……？

俺は1つのベンチに腰を下ろして、はあ、と息を零した。

「何やつてんだ、俺……？」

そんな自問には、誰も答えてくれたなかつた。

『死者蘇生』、『激流葬』、『聖なるバリア・ミラーフォース』……はは、パワーカードのオンパレードじやんか。  
俺、やっぱ弱いんだなあ……。

もしかしたら……いや、もしかしなくても、他の奴より俺は弱いんじやないか？

雪と姉さんには何回も負けてるし、結姫の植物デッキもシンクロが無い分、コントロール色が強いだらうし……そもそもティタに苦戦しそうだ。

凛那のアルカナも、かなり苦労するだらうし……そもそも、展開力が早すぎだろ。

志藤の巨大天使にはパワーで押し切られて、ソフィアの除去能力の高さは折り紙付き。

リリアのデッキも、前デュエルしているのを見た時……俺のデッキには結構刺さつたし……。

「……ここにこらしたの

「……」

リリアだ。

顔を上げると、そこに額に汗を垂らしたリリアが肩で息をしていた。

「……俺を追いかけて来たのか？」

「ええ。」、座らせて貰いますわ

もう言つてリリアは俺の隣に座つた。  
少しの間、沈黙が続く。

「…………悪かったな」

「え？」

「…………突然、逃げ出しちゃつてさ」

頬を搔きながら、俺はそう切り出した。

「俺、強くならないとな」

歯を、守れるよつ。

「世界を守るとか、歪みがびつとか……そんなの俺には分からない。  
非現実的過ぎて、寒感が湧かないんだよ……」

「それは歯さん、そうだと思いますわ……事実、わたくしもそうでしたし」

「…………ナビ

俺は、強くなる。

「歯を守れるよつ……強くなりたいって思った。御神に弱いって  
言つてから、ずっと考えていたんだ」

「そうですの……」

俺は小さく頷く。

俺は弱い。

弱いからこそ、強くなりたい、という想いは人一倍強いんだ。

「その時は、お前も守つてやるよ

「え……？」

世界は要らない。

俺が守りたいのは、『世界』じゃない。

「俺は俺の友達……仲間だけ守れれば良いんだ」

仲間、なんて言葉……地球に居た時は臭いなあ、なんて思つてた  
けど……。

自然と俺の口から出たのは、仲間、とこう一言だった。

「……そりー

俺は勢い良く立ち上がり、リリアに手を差し伸べる。

今はまだ、俺は弱い。

けど、少しずつで良い。俺は強くなつてこりつ……そう決意して。

「御神や幸仁には悪いけど……買い物、行こうぜー！」

平々凡々だけど、他の殿方よりは礼儀の為つた男性。

そんな何とも言えない印象だった彼、一ノ瀬燈夜様。  
正直、会つて見なければ彼のことは全く分からなかつた、というのが本音でしたわ。

雪に彼の事を訊けば、「絶対至高の存在」。

若菜に彼のことを訊けば、「愛すべき愛弟」。

それも、血の繋がつた家族とは思えない惚ノロケ氣を延々と聞かされるのですから、彼女たちに一ノ瀬様の事を訊くのは自分の中でタブーとなっていました。

そんな彼が、真摯な瞳でわたくしを見つめながら言つた真つ直ぐな言葉。

その時は、お前も守つてやるよ。

「はふう……」

正直、ドキッとしましたわ。

わたくしが今まで接した事がある殿方と言えば、御神様とレイランド家の財産を狙つて近付いて来た打算的な男性のみ。  
けれど……一ノ瀬様の瞳は、濁つていなかつた。

と、言つ事は。

「衣装は慧と基が作つてくれるらしいし……やっぱ問題は料理だよな。当曰は購買にある程度のを予約したけど……練習、必要だよな」

全く。

」の心臓……早く、収まって下れこまし……。

「その時は、お前もやつてやるよ」（後書き）

今日は短いです。

リリアのフラグを無理矢理立てました。ニヤニヤ（笑）

次は誰か、皆さんならおお気付きますよね？ 私は作者の癖に、思い出すのに数分掛かつてしましました……。

決意を新たにする燈夜。しかし、その胸の奥には、本人も気付いていないどす黒い感情が。 え、ネタバレ？

違います、未来予告です。きっと。

感想、評価等お待ちしております！

「…………」の前は、燈夜さんを私の部屋に招待したつい

アルバイト。

俺はカードを売つて結構な金銭を得た……つん、それは良かった。要らないなー、というカードも良い金になつてくれた。

けど、それは卒業までの学費や寮費、その他諸々に使う為、俺が自由に使える金は少ない。

イコール、デツキを強化出来ない。その上文化祭に使うお金を富豪の娘達 まあ結姫とかリリアとかに払わせるのは、男として恥ずかしいと思つんだ、俺。

……全部御神が出してくれれば良いのに……あ、冗談な、冗談。多分。

てなわけで 俺は購買のお姉さんに頼んでアルバイトをさせて貰つている訳だが。

「いやまあ落ち着けよ、餅搗けよ、おこ餅はどうだマシュマロ口でも良いぞ『マシュマロロンのメガネ』はどうだつー?」

「可愛いわよ、燈夜ちゃん」

「…………」の慧かイケメンの基や幸ひで良いだろ、おいつー!?

「ああ……脚がスースーする……ハイソックス? そんなん知るかつて話。

第五回 ホルニアカデミア 檜都校。そこは購買の他にも、食堂と呼ばれるレストランのような場所もあるといつ。俺は初めて知ったんだけど。

俺がアルバイトをする、と言つて連れて来られた場所がこの食堂だつたわけだ。

どこのファミレスや喫茶店のようて、他にもアルバイトしている子たちが制服を身に着けて動き回つてゐる。

そして 俺、一ノ瀬燈夜も同じく。

女性用の制服を着せられ、どどのつまり女装、している訳だ。ゴト寧にウイッグ（カツラ？）を取り付けられて。

「もう……お嫁行け……じゃない、お嫁さん貰えない…………」

「あらあら。それならお姉さんが貰つてあげるから大丈夫よ?」

「全然大丈夫じゃ有りません。眼がギラギラしてるんですけど……」

何ソレ怖い。

はあー、と溜め息を零す。ここまで重い溜め息を零したのはいつ振りだらうか。この世界に来た時もここまでじやなかつたぞ。

「うーん、やつぱりお姉さんの思つたとおり、可愛いー！ 女装つてね、瀬野君や瀧川君みたいな“格好良いイケメンタイプ”、よりも一ノ瀬君のような平凡な顔立ちの方が映えるのよ?」

「知りたくなかった新事実、……」

「どうか、平凡な顔立ちつて……。まあ、自覚してるけどさ。俺はこれで接客しろ、という事だらうか。多分そつなんだらうなあ。」

「どうか、化粧つて面倒臭いな。して貰つた俺が言つのもなんだけど、こんなのを毎日している女性方は、最早尊敬に値するね。」

「今日は料理を運ぶのと、注文を聞きに行くのをお願い。さつき教

えたとおりだからね

「はあ……」

「あ、後なるだけ声は高くな。今でもやいまで低いわけじゃないけど、とにかく高く、それと女性らしさを意識すれば大体は騙せるか

「う

さこですか……。

俺はやる、と決めたからには最後までやつとおすタイプ。数回咳払いして、軽く息を吐く。

高く……高く……。

「い……いりっしゃいませ」

「お……予想以上！ うん、オッケーだよ。アルバイト中は燈夜、じゃなくて燈歌トウカって名前でね」

なんか……キヤバクラみたいだな。燈歌って言つのは源氏名？  
とやうで。いや、キヤバクラとが行つた事無いんだけど。

「それじゃ、お願いね

「はあい……」

高めの声で、俺は溜め息交じりに返事を返したのだつた。

「新人さん？ 俺、第一位なんだけど……」Jの後一緒にどう？」「

「おい、抜け駆けは無しだぜ。俺と一緒にさ。」

「いえ……すみません、まだまだ終わりそうに無いので……」

失礼しますね」

はあー……ナンパも日常茶飯事、か。

「どうが、俺が男って気付けよ……骨格とか肩幅とかで気付かなければ、普通？　いや、慧みたいに華奢だと分からないだろうケド……俺は普通だぞ、普通！」

## 一度ホーリに戻る。

少しの間静かな空間が支配する。水を貰って飲み込むと、さよならと落ち着いて来た。

。

「つかー！  
腹減つたぜ」

「…………思つたよりも長引いたからな」

は、墓に幸ひで！？

「燈歌ちゃん、瀬野君と瀧川様にメニュー訊いて来て」

お、俺がっ！？ つか瀧川“様”  
すか、そうですか。  
うあー、緊張する……。  
つて……。ファンクラブの方で

大きく深呼吸して、いざ、出陣！

「JR、注文はあります（ ）か？」

…………」、声裏返つた一つ……

顔が赤くなつていくのを感じる。けれど流石幸仁、何の反応もなく日替わり定食を頼んだ。

基は少し怪訝そうに俺を見つめていたが、無視するよつて醤油ラーメンを。

「日替わり定食一つと、醤油ラーメンを一つですね。ありがとうございました」

素早く礼をして、俺は速早くその場から離れようとして背を向ける。

「なあ、お前……」

ビクウッ。

「…………いや、何でもね。気のせいだら」

「し、失礼しますー…………」

し、死ぬかと思ったー……ヤベえよコレ、ヤベえよコレ。大事な事だから2回言いました。

これ…………いつバレるか分かんないぞ、本当に。

再び溜め息を零したい気分になるも、どうにか俺は抑えたのだった。

基と幸仁が帰つて、俺も安堵しながら仕事を続けた。

人間、慣れというものは怖いもので、俺は高い声を出し続けるのも女装でさえ楽、と感じるようになつていて。

……なんて思つていてから、神は俺に試練を『えたんだわ。

「燈夜、ビニに行つたんだわ!」

「…………行方不明…………」

「アルバイトする、つて言つたのは分かつてゐるんだがな……購買には居なかつたし」

「教えてくれませんでしたしね…………」

「おかしいです。兄さんレーダーが反応しません」

「うへ……燈夜ちゃん成分が足りないいへ」

「…………雲様と若菜様の発言には、突つ込んで宜しいのでしょうか?」

「…………おい、どんな仕打ちだコレは?」

「あいつ等、いつもは中庭で食べてるじゃないか!? なんで都合良くへいひひ元氣來るんだよ!-?」

「結構な団体さんだねー。それも、皆君と一緒にてゐる女の子達だよね?」

「…………ええ、まあ」

「行つてらっしゃい」

「…………」

「悪魔つ!-? 僕には行つてらっしゃいの漢字が誤字変換されて、逝つてに聞こえたぞ!-?」

「行かなきゃお給料は無いよ?」

「楽しんでる…………絶対楽しんでる…………!」

ええい、行つてやるわー、行けばいいんだろ、逝けばつー？

「「「、「「「、」」」注文はお決まりですかー？」

ひい……怖い！ 特に靈にバレた時にや、俺の貞操が……危ない！

「あ、私は

「くんくん……兄さんの匂いがします」

お前は犬かつ！

なんて突っ込みを入れるわけにもいかずに黙つていると、7人の視線が俺に集中する。

これは……絶体絶命のピンチ……！？

えと……えと…？

「お、お兄さんって、一ノ瀬燈夜さんの事ですか？ それなら当た  
り前ですよ。私、燈夜さんと仲良いですしー」

……何言つてるんだ、俺？

いやしかし、言つてしまつたからには、これで突破するしかない！

「仲が良いつて……どうこいつことですか？」

あれ……視線が怖い。それも皆だ。姉さんでさえ微笑みながら眼  
が細まつてゐる……！

「私の名前、燈歌つて言つんですけど……名前が似てるのと、好み  
とかが似てるから気が合つちゃつて……この前は、燈夜さんを私の

部屋に「」招待したりー

な、何言つてるんだこの口はつ！

アレだ……俺はモテないからって、見栄を張つているんだ。うん、見栄張りたくなるよな？ 俺、実は結構モテるんだぜ！ みたいな…… 離や姉さんの前でこれを言つたのは、間違いだったと思うけど。

死亡「フラグ」です。

「……今日は帰らせて頂きますね  
「私もお供しよう」  
「僕は一度、第五位の寮行くから……」  
「校舎内はお任せくださいまし  
「見つけたらDPで連絡ね～？」  
「兄さん……ふふふ」

……俺、バイト終わつたら死ぬ？ 死ぬよな、コレ？

ふらふらとしながら食堂を出て行く6人の美少女達。凄くシユールだけど、そんな事を考える暇も無く、俺は命の危険を感じていた。

「……」

くい、と。

制服の裾を掴んで、志藤が俺を見上げていた。

「……」

「……一ノ瀬君……バレてる」

「え……」

「……図星？」

う……。

「……良く分かつたな。需でさえ分からなかつたのに」

「……カマ……かけた」

「え？」

「一……事は俺、今自分でバラしたつてことかー? うわあ……何してんだよ、俺。阿呆か。

はあー、ヒ溜め息を零す俺。

「一ノ瀬君……燈歌」

「うん? じゃなくて……はい、なんでしょうか?」

一応、今はアルバイト中。高い声を出しながら、俺は接客を続けた。

「……オムライス」

後日談。

志藤にはバレたけれど、特に問題は無く。

女性6人に問い合わせられたけど、適当に言い逃れて……それも特

に問題は無く。

問題は、1つ。

『わーい、燈歌ちゃん可愛いーー！』

『確かに……慧殿にも負けず劣らずです』

「いつの間に写真撮ったんだお前いつーー？」

マナとマハーナの手元には、3枚にも及ぶ写真の数々。

軽いパンチラまでは、俺の精神を大きく削る、といつか……。

「あ、燈歌ちゃんってパンツも女性用だつたんだね？」

「もう止めてくれーー！」

御神にもバレていた俺は、本気で不登校になりかねなかつた、と。

はあ……。

「…………」の前は、燈夜さんを私の部屋に招待したつー（後書き）

や、やつてしまつたー…………！

もう一つの遊戯王小説、通称“僕らの”でもやつた女装ネタ。まさか燈夜までも犠牲になるとは…………！

燈夜には…………頑張つてもうらいたいです。色々な意味で。

感想、評価等お待ちしております！

「俺が、友達になつてやるよ」

講義も終わり、アルバイトも終わり。

とつとつ明口は、待ちに待つたアカデミア行事 文化祭だ。

時刻は夜。

薄暗闇が島を包み込む、睡眠の時間。  
彰正先生と御神も眠つてゐるだらう遅い夜中の時間帯……俺は最後の見直しをしていた。

『元気だね、マスターは』

「まあな」

講義中、ずっと寝てたしな……げふん、げふん。

そんな事実は全然全くこれつぴちも無きしにもあらずだから。なんてマナに言つても無駄だらうケド、心中で言い訳をしておく。

幾つも並べられた机と椅子の数を確認……良し。

更衣室の代わりとなつてゐる第五位の寮の食堂奥。衣装の数……良し。

昼間に貰つた食料……良し。どれくらい繁盛するかは分からぬけど、充分足りるだらう。

主に女性陣がやつてくれた飾り付け……うん、良し。結構様になつてゐる。

「明日は、マナとマハードも手伝ってくれよな

『はーい』

『わ、私も……ですか』

「モチ。期待してるぜ?』

基、幸仁、そしてマハード……御神も顔は滅茶苦茶良いし、人気の高い彰正先生も手伝ってくれるという。女性客は集まるだろう。男性客? 言わずもがなだろう?

唯一浮くのは俺なんだけど……まあ、俺はキッチンで仕切つてりや良いだろ。ナンパしてくる輩が出てきたら仲裁役として俺が出て行く程度で。

『 燈夜殿』

俺が外に並べてある一つの椅子に腰を下ろすと、どこか真剣な表情でマハードが話し掛けて来る。

ちなみに、マナはいつも通り俺にくつ付いて来ている。マナの顔が俺の真横にあつたり胸が背中に当たつたりとかなりの役得具合だが、正直慣れっこなので無視。

『あの日……御神新殿が全て話した時の事を、憶えてありますか?』

『…………』

あの日は、色々あった。

御神との出会い。結姫たち含め、全員(正確には“殆ど”)が元は地球の人間だという事、ソフィアの中から志藤が出てきて、ソフィアとのデュエル。

そして、俺は 弱さを、突き付けられた。

『志藤殿がデュエルに敗北し、倒れた時……燈夜殿から起つた突如の爆発。あれは一体……？』

「俺を、選んでくれた奴だよ」

『つ……！？』

マナが俺から離れる。

俺から放たれる異質な気配……オーラを感じ取ったのかもしれない。

『燈夜殿を、選んだ……？』

『けど、マスターを選んだのは私たちのはずだよ。』

ああ……そうだ。

「俺を選んだのは、マナとマハードだよ、間違い無く。けどお前らの他にも、俺を選んでくれた奴がいるんだ」

『それは、一体……？』

『……』

「まだ、その“時”では無い。」

脳裏に、あの時聞こえた女性の声が響いた。

「まだ秘密だな。近い内に、ちゃんと教えてやるよ」

「……誰と話してやがんだ、オメー？」

「つ……なんだ、ソフィアか」

「その名前で呼ぶんじゃねーよ」

気が付くと、ソフィアが怪訝そうに俺を見つめていた。

当たり前だけど、精霊化しているマナやマハーデは他人には見えない。慧や結姫たちも見えないんだから、ソフィアが見えるはずもない、か。

だから、俺が独り言を喋っていたように見えた、と。

「うわー、痛い子だわー、俺。

「で、誰と話してたンだよ？」

「え？ えっと……わざわざまで居たんだけど……どうか行つたかな？」

「…………」

「…………」

「…………」

けれど無理矢理納得してくれたのか、ソフィアは静かに椅子に座り込んだ。

「お前はどうしたんだよ？ 明日にや文化祭だぜ？」

「別に……オレ、元々夜行性だからよ。いつもこの時間は適当に歩き回つてんだ」

「へー。んじや、講義中はどうしてんだ？」

「まあ、サボり?」

「…………」

居眠りしてゐる俺より悪いな、こいつ。だからつて寝眠りを留めやつ

ちやこけない気がするけど。

「……あの、よ」

「ん?」

暗くて、ソフィアの顔は見え辛い。どことなく顔が赤く感じるのは、照れているからだろつか?

「彩伽は……アイツは、元氣かよ?」

彩伽　志藤彩伽。

へえ、と俺は笑みを浮かべる。

「心配してんのか?」

「べつ、別にんなんじゃねーよー。ただ、その……」「、このアカデミアに来てからずっと一緒にだから……」

それが、心配してることなんだよな。

とは言わぬが、俺はソフィアに感じていた印象が変わるのを感じていた。

「元氣だよ。相変わらず口数は少なかつたりするけど、ちゃんと周り見て行動してるし、何より結姫や凛那みたいな友達と一緒に入って、楽しそうだ」

「……そうか」

笑っていた。

ソフィアは微かに、口元を緩ませていた。陰になつて良くて見えなかつたけれど、それだけは確かだ。

「お前はどうなんだ?」

「……オレ？」

「ああ。お前は友達、つべり」

「イラねー」

俺の言葉を遮るように、ソフィアが拒絶する。

「ダチなんて、裏切るだけじゃねーか。どれだけ一緒に居て、親友だと何かほざいても……結局、最後はオレの傍から居なくなつちまつ」

過去……ソフィアの過去に、何があつたかなんて俺なんかには想像出来ない。

それと同時に、ソフィアはその過去を話したくないんだろう。誰にだつて、話したくない過去はあるもんだ。

それが大きいか小さいかの違いはあれど、な。

「 地球に居た時、」

「は？」

俺にだつて話したくない過去の一つや二つ、ある。だから無理に聞くなんて野暮な事はしない。

「慧つて、お化け屋敷が嫌いでさ。基は逆に大好きで、いつもお化け屋敷に連れて行こうとしてた。幸仁はその仲裁に入つて、俺はその後、いつも一手に分かれよう、なんて妥協案を出してた

「な、何言い出しだんだ？」

「……俺が通つてた高校の文化祭に雪が来た時、喫茶店の接客して

きた俺を単独指名、とか言って教師を困らせてた。姉さんさ、なんだかんだ高校のミスコンに出て、優勝しちまって……優勝者の特権で、俺にキスしようとして来てさ。あの時は焦った

「おい、一ノ瀬……？」

「遊戯王の大会に出た時、スゲエ気の合つたプレイヤーが居てさ。俺、一回戦負けで慧たちをずっと待つてたんだけど……その人とずっと話し込んでたんだ。会社に対する不満とかぶつけ合つて、途中、2人で強制退場されるところまで盛り上がったんだぜ？」

「おいッ！」

「つと、話しそぎたか？」

ノリに乗つて零と姉さんの話までしちまつたぜ。やれやれ、自重しないとな。

「友達つてさ、結構大事なんだぜ？ そりや、家族だろうが友達だろ？ が、『他人』に変りないし……何考てるか分からない」

「当たり前だ。

『二次元の世界とかならともかく、相手の気持ちが全て分かる人間なんて居ない。

「もしかしたら、疎ましく思つててるんじやないか？ 俺の発言に、怒つてるんじやないか？ 嫌われて、しまったんじやないか……？」

俺も、昔はそんな事ばかり考えて、他人と触れ合つのが怖くて仕方が無かつた。

まあそれは、零や姉さん、慧と触れ合つててる内に解けていった

んだけぞ…… 閑話休題。

「けど分からぬか」ソフィア、友達同士は笑い合える。そう思わないか?「

「……笑い、合える……」

「“ああ、コイツ、俺の此処が嫌いなんだ……”って思つたら、笑い合えないだろ?」

なんか、説教みたいになつちまつたな。

ここいら辺で切り上げるか。

それこそ、こんな説教垂れて嫌われちゃヤだからな。

「俺が、友達になつてやるよ」

「……とも、だち?」

「ああ。俺がお前の友達第1号だ! んでもつて、明日の文化祭にや雲や姉さん達含め、皆お前の友達だ。裏切るとかそんなの考えず」  
「一緒に過ごす仲間 な?」

最後、ちょっと臭かつたか?

ソフィアは暫く無言だった。俺も夜風を感じながら、沈黙を守る。

「……今日は、帰るな

「……ああ。お休み、ソフィア

「……その名前で、呼ぶなつての」

静かな抗議をして、ソフィアが帰つていぐ。

「……わてー。」

明日は、文化祭だ。

「俺が、友達になつてやるよ」（後書き）

デュエル？ 無いですねー。『僕らの』でもそうですけど、私が書く遊戯王の一次創作はデュエルが少ないみたいですね。反省。しかし、私はストーリー重視！ プロットとかそんなの有りませんけどストーリー重視！

ちなみに、この小説のストーリーはカップ麺が出来る程度の時間で確定しました（爆）

感想、評価等お待ちしております！

番外編～誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜～（前書き）

今回は番外編です。

ですので短いです……すみません（汗）

ゲストは我等が主人公、一ノ瀬燈夜！

## 番外編～誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜～

作者「わーい、初めての番外編だー」

燈夜「……なんで棒読みなんだ？」

作者「眠い」

燈夜「一睡もしないで書いてるからだろ！？」

時刻は午前7時前です。

作者「しかも書いた日の前日は友達の家に泊まりに行つててさー。  
疲れた、疲れた……」

燈夜「帰つてから早々アニメばっか見てるしな。仮眠取れよ」

作者「だ が 断 る」

作者「はてさて、この番外編では、この小説の誕生秘話（笑）と…  
…最後には主人公、一ノ瀬燈夜の紹介をしようかと思つていたりして  
てるんだと思われると思つよ？」

燈夜「なんか、凄い曖昧だな」

作者「……眠いからテンションがおかしいんでございます。大事  
じゃないから1回程度しか言わなかつたんじゃないかな？ だよね

？」

燈夜「俺に訊くな」

作者「てなわけで！誕生秘話を……ーーー！」

燈夜「（餡<sup>あん</sup>の入ったドローパンを食べ始める）」

作者「メインの方の『遊戯王 僕らの進んで行く道』で、今とある理由で番外編STORYをやっているんです。遊戯王の一次創作なのに遊戯王が殆ど出てこないから、なんかしつくり来なくて……といつわけで、この小説を書こうと決めました」

燈夜「んぐつ……。けどさ、設定とか殆ど練つてないんだろ？ 現在進行形で」

作者「えへ。だつてぶっちゃけると、ソフィアの“友達”に関する過去……全く考えてませんもん、テヘ」

燈夜「それはぶっちゃけ過ぎてないか！？」

作者「世界の名前も考えてないし……文化祭の内容も全然だし……その他色々なイベントも考えてない！」

燈夜「威張んな！」

作者「まあある程度考へてゐる事と言へば燈夜の過去や留年の秘密（留年していく、基や幸仁よりも1つ年上、という事を忘れている人は多いはず）」

燈夜「ふむふむ」

作者「基と燈夜の馴れ初め。謎の声の正体。御神の秘密……程度？」

燈夜「少なつ！ 良くそんなんで投稿しようなんて思えたよな」

作者「そういうえば、忘れかけてたけど燈夜も小説書いてるんだよね。  
君はどうなの？」

燈夜「俺はちゃんとプロット作ってやつてる。0から全部作って、  
話の流れを書いて、後は腕次第って感じだ」

作者「尊敬するよー。流石私の書いた人物！」  
キャラクター

燈夜「……」

作者「それはともかく……ヒロイン、多いよねー」

燈夜「お前が言うのが、それをつー？」

作者「零と若菜……結姫に凜那、慧、彩伽やソフィア、リリア……  
そしてマナたち」

燈夜「待て。零と姉さんは……まあ、まだ良いとして、だ。マナ“  
たち”ってなんだ」

作者「え？」

燈夜「“なんでそんな事説くの？”みたいに首傾げるなよ。」

作者「君は知っている、という設定にしよう。燈夜は僕が書いてるメイン小説、“僕らの”は知ってるでしょ？」

燈夜「なんか突然頭に浮かんだ内容だけぞ、まあ一応」

作者「私の中では、主人公の諏訪<sup>すわアキラ</sup>晃の精霊は皆ヒロインって感じだよ？」

燈夜「多すぎじゃね！？ “LEGENDS” なんて田舎じゃないよな！？」

作者「……と、“僕らの”も読んで下さっている方でしか分からないお話はここまで。話を戻すと、今の私たちの会話……精霊のヒロインはまだ増えるつて言つフлагだよ？」

燈夜「お前つて……」

作者「例えば、『サイレント・マジシャン』LV8辺りは既に喋つたよね」

燈夜「お前つて……お前つて……」

燈夜「ところで、毎日更新とか凄いらしいな」

作者「そりゃ凄いことだよ！ 私だって驚いてるもん！」

燈夜「して、頑張っている理由は？」

作者「早めに完結させて“僕らの”のストックを作りまくつて、何よりオリジナル小説を書きたい」

燈夜「……そつか」

作者「ただね？　こんな設定をちゃんと練つていない小説なのにメインの“僕らの”を超える人気だつていつ……」

燈夜「分かる、分かるよお前の気持ち。そういうのってなんか、すげえやりきれないよな」

作者「やっぱ質、シリアルスばつかの“僕らの”より（超苦手な）ロメディ入れてゐる“LEGENDs”の方が良いんだね」

燈夜「それと、早い更新も関係あるんだろうな」

作者「ですよねー」

作者「眠い……けど後は燈夜の設定を少しだけ書き込むだけだ」

燈夜「ああ、頑張れ」

作者「うあ……適当のモン加えて良いよね？」

燈夜「止めるよ？　霧に殺されるぞ？」

作者「…………あい」

一ノ瀬燈夜。  
いちのせとうや

主人公。

年齢：18歳。

性別：男性。

身長：考えていない。平均辺り。

体重：同じく考えていない。平均辺り。

趣味：遊戯王、料理、小説執筆、読書

特技：特に無し。

メインデッキ：《ブラック・マジシャン》軸の魔法使い族デッキ。

本作、『遊戯王 LEGENDS～伝説の名の元～』主人公。

平均だけどどことなく童顔氣味の顔立ち。しかし、女装が似合つ辺り結構に中世的な顔立ちなのかもしれない。

実はバイ。バイとは、男性でも女性でも恋愛関係、若しくは性行為を行える事である。

食堂でアルバイトしている。その際は常に女装していて、その時のお名前は燈歌。この事を知っているのは数少なく、精霊以外のヒロイック勢だと彩伽のみ。

両親は既に居らず、高校に通いながらもアルバイトをして生計を立

てていた。そのアルバイトも、数件を掛け持ちしていた。そのアルバイトの際、料理に興味を持ち始めた。

幾つかのデッキを持っているが、その殆どが“魔法使い族”モンスターが軸とされたデッキ。

また、ある程度を除いて殆どのカードを売却してしまった為、余りのカードは無いに等しい。

たまに魔法使い以外のデッキも使う。

御神新の「君は、弱いね」という発言から強くなる事を決意する。しかし、慧、基、そして幸仁と手加減……というよりは実質的に負けていた事を知つて、酷くショックを受けてしまう。

作中の“選ばれし存在”で唯一、御神新に選ばれていない存在。マナとマハーダ以外のある存在にも選ばれているが、それが何なのかは不明。

それを知つているのは燈夜のみである。

燈夜「……思ったより長かったな」

作者「うん、私も驚いてる。もつと少ないかと思つた」

燈夜「……ま、まあお疲れ様。次からは文化祭編だろ?」

作者「そうだよ。結局のところ、どれくらい長くなるかは分からないんだけど……一応、文化祭編として分けておくつもり」

燈夜「頑張れよ。俺たちもそつだばぢ……何より読者様の為こそ」

作者「ありがとう。私、頑張るつ！」と、言つ事で

燈夜「…………？」

作者「お休みなさい（――）三」

燈夜「…………えと、じやあ締めるか」

深呼吸。

燈夜「これからも、『遊戯王 LEGENDS～伝説の卡の元～』  
』を宜しくお願ひしますッ！」

## 番外編～誕生秘話（笑）と一ノ瀬燈夜～（後書き）

会話にもあつたとおり、次からは文化祭編です。多分。  
ちゃんとトコエルもありますし、遊戯王の一次創作……ですよ？

そういうえ、他の作者様の一次創作を読んでいると、人気投票なる  
ものがありますね。

私もやりたいなー、なんて……。

誰でも良いので、それに関しての意見を下さい。お願ひします m(

— ) m

感想、評価等お待ちしております！！

「暫、楽しもひやッ……」

朝は清々しいほどに晴れ渡り、暗雲は勿論白に雲さえ見当たらぬ。温かな日差しは第壱校の文化祭を祝福しているかのように俺たちを包んでいる。

文化祭開始まで、残り20分。

今頃女性陣は食堂奥で、用意された衣装に袖を通しているだろう。各言う俺も、基、幸仁、彰正先生と御神の5人と共に寮裏で着替えていた。

「……あの、今更なんだけど……彰正先生、そのモンスターで良いんですか？」

「うん、何か問題あるかな？」

「……いえ……」

いやしかし、『古代の機械騎士』は……目元以外、顔隠れてるし。流石に槍と盾は無いけれど、それでも凄くゴツイ印象だ。

……まあ、多くは突つ込むまい。

「チツ、なんか動きづれエな……」

「当たり前だろ……なんで『アックス・ドライバー』なんだよ

『一寧に翼まで。彰正先生と同じく斧は持っていない。

しかし、本當になんて『アックス・ドライバー』？ 確か基のデッキには入っていなはずだけど……。

「……落ち着かないな」

「……いや、なんかもう予想通りとこりかなんといつか

俺、実は誰が何の衣装を着るかは聞かされていない上に、ちゃんと  
とその衣装がなんなのかを見てはいない。

だから男性陣は勿論、女性陣が何を着るかは分からぬ。自由意  
志にしたからな。

それはともかく。

幸仁……お前、やつぱり『正義の味方 カイバーマン』か。基や  
彰正先生より全然コスプレっぽくない。マスク以外は普段着ていて  
も……まあ、ある程度は許容される格好だ。

……だといふのに、なんつー存在感だ。

幸仁の元々のオーラか……それとも、どこかの世界に歸ると  
いう海馬社長のプレッシャーか。

流石社長……侮れないぜ！

「燈夜君、僕はどうだい？ 似合つていたら嬉しいけれど」

「……いや、そのモンスター分からんんですけど」

「おお、これは失敗。まだカード化されてないじゃないか」

ワザとらしい……けれど、無駄に似合つているから口を挟めない。

服装はなんか、普通だ。それこそモンスターなのか、と疑問に思  
つてしまふほどには。

けれど、違うのは背中。

右側に白い翼。左側には黒い翼じくが対になつて生えていた。いや、

生えていたという言葉は語弊ごひがあるけど……生えていたといつよつ、  
映えていた、か。

「んで、お前のその格好は……」

「俺か？ 俺は見ての通り、『ブラック・マジシャンズ・ナイト』

だけビ?」

「…………それなりにマイナーなモンスターだな」

紫色の甲冑に黒マント。表側は黒いけど、その内側は赤い色をしているこのマントは、凄く格好良いと思つ。

この衣装を作ってくれた手芸部の方々…………本当にお疲れ様です。そしてありがとー。この恩はにつか覚えていたらきっと返すと思うよ?」

ちなみに、ブライダルマジナイトが持つていい剣も造つてくれたようだ。腰に下げられてる。本当に良い仕事をしてくれたよ、うん。

「さて、それじゃあ行くかい?」

「そうだね」

彰正先生と御神、キャラ被つてるよ。

俺たちが揃つて食堂の方へ向かうと、既に皆、外に出ていた。おお、皆個性的だな。つい頬が緩んでしまつ……自重せねば。

ふんつ。

「燈夜君。何変な顔をしてるのかな?」  
「…………変な顔で悪かったな」

力んだけだいっ！<sup>りき</sup>

それはともかく。

俺たちに気付いた女性陣は、小走りで俺たちに近付いて来る。

「燈夜！ どう、かな？」

真っ先に声を掛けてきたのは、<sup>慧だ。</sup>慧だ。

慧が着ているのは、『E・H E R O <sup>エクセントル・ヒーロー</sup> ブルーメ』。

緑色で、且つ葉っぱのようなドレスを身に纏っていた。胸元はオーリジナルなのか、葉で覆われていた。

「ああ、良いんじやないか？」

「そ、そうかな……えへへ」

まあ、知っている人も少ないとと思うけど。

「兄さん。私、兄さんの為だけに着替えました」

「それは嬉しいけど……この文化祭中は、密の事も考えてな？」

「はい」

雲は『セイクリッド・グレディ』だ。本当なら彰正先生のようだ。顔は見えないはずだけれど、兜を上にして顔を覗かせている。

……けれど、さ。

「なんつーか……似合っていない事は無いんだけど、違和感の塊だぞ？」

「それは、私も思っています。しかし、セイクリッドシリーズにはグレディくらいしかコスプレ出来そうに無かったので」

「それは……確かに」

その他は男性型だつたり、人間じゃなかつたりするしな。

「燈夜ちや～ん。あたしはビッグかなあ～？」

「ん……ねえさ……え？」

…………。

「姉さん……えと、それ何？」

大きく黒い翼は姉さんの手にくつつけられていて、口には嘴くちばし、だらうつか？

拘束具のよくなベルトが身体に取り付けられていて、胸が妙に強調されている。その部分は凄く……なんつーか、エロい。

えと……姉さんのデッキで、且つ翼に嘴、とすれば……まさか。

「勿論、『ヴェルズ・フレイス』よ～？」

「……やつぱりか」

ぱたぱた、と口で喋りながら翼を動かす。  
流石姉さん……予想外過ぎる。

「……アレは、手芸部もかなり手を焼いたよつだ  
「……だらうね。という凛那は……、」

『コマンド・ナイト』。赤い鎧を着込んだ、場の戦士族モンスターを強化する女性モンスターだ。

腰には剣も掛けられていて、元々の凛那の雰囲気もあつてか、かなり似合っている。

「流石凜那。自分に合ったモンスターを選んでるな」「う……そ、そんな見るな。恥ずかしいだろ？」「

そういうもんか？ 確かに、俺もずっと今の姿を見られると恥ずいな。

「あの……と、燈夜さん。私はどうでしようか？」「お？」

結姫だ。結姫の姿をまじまじと見つめる。

格好は……余り憶えていないけれど、確か《ローズ・ウィッチ》って名前の、モンスターだつたはず。

頭には大きな華の帽子を被つていて、赤と緑を混合させた服を着ていた。

赤と緑……マリオヒルイージ……いや、そんな事考えちゃ駄目だ。駄目つたら駄目だ！

「ああ、綺麗だと思うよ」

「そ、そうですか？ ありがとうございます……！」

しかし、似合つてることに間違いは無い。俺は邪念を捨て去りながら結姫にそう答えた。

「……お、ソフィアもちゃんと着替えてくれたんだな」「し、仕方ないから着てやつたんだよ。ん、んなに見るなッ！」

ソフィアは……えつと、《墮天使ナース・レフイキュル》か。背中には6枚の翼。体中を包帯で纏わせたソフィアの姿がそこにはじめて居た。

「そうか？ 結構似合つてるぜ？」「

「…………あ、ありがと……よ」

あれ、素直だな……前なら睨んできそうな感じなのにな。

昨日、友達になろうと云つて会話が実を結んだかな？ だとしたら嬉しい限りだ。

俺がその事に微笑んでいると、リリアが腕を組みながらふふん、と鼻を鳴らして云ふ姿が視界に映る。

「さあ、わたくしの姿を見て跪きなさい」、一ノ瀬様  
「いや、しないから」

リリアは《ネフティスの導き手》だ。リリアのテッキは《ネフティスの鳳凰神》を軸としたピートダウンだから、予想通りつて感じだ。

しかし、低攻撃力の導き手が偉そうに「王立ちして云ふ、というのもなんか……シユールな光景だな。

「跪きはしないけど、似合つてるぜ」

「あ、当たり前ですか」

くい、と。

俺の羽織つて云ふマントを引つ張る感触がした。

俺が振り向くと、志藤が無表情で俺を見上げていた。

「…………一ノ瀬君…………格好良い…………」

「ありがと。お前もすげえ可愛いぞ」

「…………うん」

顔を赤く染めて俯いてしまつ。照れて云ふのだろうか？ といふ

が、今思つと凄い恥ずかしい台詞言わなかつたか、俺？  
志藤に釣られたかのように、俺も赤面してしまつ。

志藤の格好は『勝利の導き手フレイヤ』だ。チアリーディングとかで使う……ボンボン？ みたいなのは背中、といつよりお尻辺りに仕舞われている。

……なんか、尻尾みたいだ、とか思つたら負けなんだろうか？

さて 文化祭が始まるまで残り10分も無いだろう。

今頃樺都町や、もしかすると他の町の人たちも船に乗つてこの島に来て、文化祭開始を今か、今かと待ち侘びている頃だろう。  
最終チェックだ。

「皆、集まつてくれ

俺の一言に合わせて、皆が皆集まつてくれれる。  
合計人数は俺含めて13人。結構な人数だ。

「最終確認だ。交代は3時間毎。最初は御神、幸仁、慧、凜那、リリア、ソフィアだ。次に彰正先生、基、結姫、雫、姉さん、志藤。それを交互に行う」

「あれ……そういえば一ノ瀬君はどうするんだい？」

「俺は仮にもリーダーを任せられてるしな。取り敢えずばぶつ続けだ」

そりや、少しの休憩は取らせて貰つつもりだけど、と続けた。

「そ、それじゃ不公平ですよ」

「そうだ。燈夜の分も」

「要らないつて。俺がしたいんだからな」

それに。

ずっと働いていた方が、余計な事を考えなくて済む。

「…………」

「話を戻すけど、基本的に俺はキッチンに入ってる。料理を出  
来るメンバーは限られてるから、多分キッチンとホールの交代は無  
いと思う」

俺を筆頭に、御神と彰正先生はずっとキッチンだらう。荷物をさ  
して暇な時に行つて貰う事はあるだらうナビ。

「以上！ 時間は無いから、異論とかは無にしてくれ。それじゃ

「

『只今より、第64回第五回 ホールアカデミア 横都校文化祭を、開  
始致します』

「皆、楽しもうぜッ！…」

多種多様の返事が、俺たちを包み込んだ。

「皆、楽しもうぜっ……」（後書き）

はい、とこり訳で文化祭編開始です！

今日は皆さんのコスプレ内容の紹介とシフトを。  
コスプレに関しては、はい、一言言つますと……。

「うわー、凄いカオスだ」

特に若菜が。次に彰正辺りかな？ 顔隠れてるし。いや、幸仁だろ  
うか……海馬、もといカイバーマンですし。

あ、それと。

書きながら思つたんですが、「あ、リリア『テュエルしてない』。  
だから『テッキが何なのかも知らされていなかつたオチ……なんとい  
う不覚。流石私、馬鹿だ。」

はい、ネフティス『テッキです。もうぶっちゃけますが。

感想、評価等お待ちしております！

「それは違いますっ！」

「燈夜～、オムライス～～～」

「燈夜、ヤキソバ～～～」

「一ノ瀬様、カレーライス～～～」

「なんで俺ばかりに頼むんだよ～～～？」

慧、凜那、リリアの順番で俺に言つてくる。

言われた通りにメニューを用意しながら、俺は次々と品をテーブルに並べていく。それを凜那とリリアが持つて行った。

「だつて……料理してるの、燈夜だけだよ？」

「ええい、御神とソフィアはどうしたつ～～～？ キッチン担当はアイツラだろ～～～？」

「えと、御神さんは食料の調達をしに購買へ～～～ソフィアさんを連れて」

「早つ～～～まだ文化祭始まつて～～～時間だぞつ～～～」

「……思つたよ～～～繁盛してるね」

お前らのおかげでな～～～！」

アカデミア屈指の美少女集団、慧、凜那、リリアが揃つてゐるんだ。結姫たちが居ないだけまだマシだけど、もし集まつたら渋滞が起きるんじゃないだろ～～～か。いや、起きるな～～～確実に。

その上、第一位の特待生旦つ、女子が設立したファンクラブの数々……その一角を担つてゐる幸「も語るんだ。

だ、としても。  
……疲れる。

「ほい、オムライスとヤキソバ」  
「うん」

慧に入れ替わるように、凜那が戻つてくる。

「大変そうだな、燈夜」

「ああ……そうだ、凜那、料理は苦手そうだったけど盛り付けは出来るだろ？ カレーは出来たから、福神漬けとか置いてくれ」

「ああ」

スプーンを添えて、カレーライスの入った皿を渡す。後は凜那に任せて大丈夫だろう。

次は……。

「やあ。頑張つてるね、燈夜君」

「労いは良いから、早く手伝ってくれ」

御神とソフィアが、手に荷物を持ってきながら帰つてきた。見たところ結構な量だけど、確かにこのペースなら、すぐにでも必要だろう。

俺には何も言わずに行つたのは止めて欲しいけれど、結果的にはこれで良い……のか？

「燈夜」

「ん……ソフィア？」

テーブルに食材を置いたソフィアが、外を指差しながら声を掛けってきた。

「3番席に、お前を呼んでる奴が居るぞ？」

「は……俺？」

「一体誰だ……？」

手を洗つて、布巾で拭いてから外に出る。

3番席、3番席……ここか。

「えっと、俺…………私に何か御用でしようか？」

そこに座っていたのは、1人の男性と3人の女性だった。  
男性は厳格そうな雰囲気を醸し出している。筋骨隆々、素手で熊と戦つていそうな体格だ。

一方で、女性3人は綺麗な人たちだ。基本的には桃色の髪形をしていて、薄い桃色だつたり濃い桃色と個性豊かだ。

つて……。

「あれ……もしかして、結姫の……！？」

「あら、やつぱり貴方が一ノ瀬燈夜さん？　お察しの通り、わたくし私は結

姫の母です」

「…………ふん」

やつぱり……！

桜都町で見た事はあった。あの時はもう一人、小さな女の子が居たけれど……。

「貴様が、結姫を誑たぶかせた男というのは」

「たぶつ…………？　そ、そんなんじゃ有りませんよ！　結姫…………さんは、階級の差なんて無いように、仲良くして貰つてはいるだけです」「どうだかな」

「うわあ……なんか、雰囲気通り怖え……。

「まさか、本当に第五位とはね……結姫の趣味って、はつきり言つて悪いわね」

「全くね。顔が良い訳でも無いし、デュエルモンスターZが強い訳でも無い。我が妹ながら、やれやれだわ」

「……スゲエ言い草。流石の俺もイラッと来たぞ。

とは言え、彼女たち（多分結姫のお姉さん方）が言つている事は確かだ。結姫の趣味は知らないけれど、俺は顔も平凡、遊戯王も微妙……。

うわ、自分で言つて泣きたくなつてきた。

「それは

「それは違いますっ！」

「ゆ、結姫っ？」

結姫が居た。

珍しく怒った表情で、席に着く家族たちを睨んでいた。もしかすると、結姫の怒った表情を見るのは初めてかもしれない。

「あらあら。結姫つたら……」

「……ふん。第五位なんぞの人間に誑かされおつて」

気付くと、俺たちは注目の的だつた。

食堂から出て来た御神たちも遠目で見ているし、お姉さんたちも俺たちに視線を集中させていた。

それはそうだ。

咲之宮家のトップは、たまにテレビ出演もしている。今や経済界

にも顔を出している結姫の姉2人も、かなり有名だ。少なくとも、俺でさえ知っているくらいには。

だからこそ、注目を浴びないはずも無かつた。

「それは、違います。私は燈夜さんが燈夜さんだからこそ、一緒に居るんです」

.....。

「燈夜さんは私が危険に陥つた時、助けてくださいました。私が泣きたい時、隣に居てくださいました。お父様たちはそういう時、傍に居てくれた事など有りませんでしたのに.....」

「.....」

「取り消してください」

静かに。

結姫が、視線を鋭くする。

「私は燈夜さんに誑かされてなどおりません。取り消してください！」

結姫はやつぱり、俺の事.....好きに、なつちやつたのか？

端から見るとバレバレだぞ、お前。

基に言われた言葉が脳裏に浮かぶ。

そう.....俺は、“あの時”からいつも鈍感のフリをしていた。もう誰も好きにならない、恋愛なんてしないって.....そう決めたから。

慧に始まり、雲と姉さん……志藤、ソフィア、凜那、リリア……そして結姫。

数人は、ほんの少し前からだ。特にソフィアは、朝……いつもと、様子が違った。それがもしかしたら恋なんじやないのか、って思つたんだ。

自惚れか、ただのナルシストか。それだつたら良かつたのに。

俺なんかを、好きになっちゃって……！

「結姫……」

けど。

俺は、逃げてたんだ。

皆の気持ちに気付いていないフリをして、正面からぶつかるのから逃げてた。なのに……。

結姫は、俺の為に、怒ってくれてる。実の親に、反抗してくれてる。

「結姫」

俺は結姫の肩に手を置いて、一步前に出る。

「確かに俺は、顔が良い訳でも、デュエルモンスターZが特別強い、という訳では有りません。特徴といえば、伝説のカードを使つたり、シンク口やエクシーズ召喚を行うところでしょうか」

そんな事を知らない一般のお客さんがざわわつくのを尻目に、俺は

結姫の家族を1人ずつ順番に見つめていく。

その最後。

結姫の父……咲之宮家のトップの眼を、真っ直ぐに見据える。

「けれども俺は、結姫さんの……結姫の大変な友達です。彼女が困つていれば助けるし、笑つていれば一緒に笑います」

「燈夜さん……」

逃げちゃ、駄目なんだ。  
どんな事にも、俺は。

「もしも、第五位の俺なんかでは、娘さんを任せるのが不安だとうのなら……」

いつの間に居たんだろう。

御神が隣に居て、俺のデュエルディスクを手に持つていた。  
俺はそれを受け取りながら、左腕に装着する。

「コレで、俺の実力を見極めてください」

燈夜さんの言葉が、胸に響く。

初恋 私はやっぱり、燈夜さんが好きです。

優しくて、明るくて、けれどどこか寂しげで……ドローパンが好

きで、甘い物が好きで、鼻にクるような辛い物は嫌い。

私は、やっぱり。

例え燈夜さんが私じゃない誰かを好きになつたとしても、一緒に

居たいです。

「そ、う……良いわ。なら、アタシが試してあげるー。」

「う……ー？」

声が聞こえたのは後ろからだつた。

振り向くと。

「ゆ、結羅ー！」  
ヨウラ

咲之宮結羅……私の妹で、最年少のプロデュエリストとして活躍  
している子。

「結姫、あの子は……？」

「……私の、妹です

「妹、つて言つと……プロデュエリストの？」

こく、と私は頷く。

燈夜さんが、結羅とデュエル……いへら燈夜さんとは言え、プロ  
のデュエリストでは……。

「結姫

「燈夜さん

「……俺を、信じてくれ

「……」

「…………はい」

燈夜さんが信じて、と言つのなら、私は信じる以外の選択肢なんて有りません。

「「「デュエルッ!!」」

お客様の全員が全員、そのデュエルに注目している。有名なプロデュエリスト、咲之宮結羅のデュエルを生で見られるのだから当然と言えば当然なかもしれない。

勿論、慧さんや凜那さん……お父様やお母様も、そのデュエルを静かに見据えていた。

「アタシの先攻よ、ドローッ!! アタシは魔法カード、『E・エマージョンシー・コール』を発動!! デッキから『E・HERO エアーマン』を召喚!!」

「HEROデッキ……!?」

「エアーマンの効果を発動するわ!! サーチ効果により、アタシは『E・HERO オーシャン』を手札に加える。カードを一枚伏せて、ターンtrandよ」

そう、結羅のデッキはE・HERO……何度も融合し、相手を追い詰めるデッキ。

燈夜さんの話では、遊戯王GXという漫画、及びアニメの主人公がE・HEROを使っているらしいです。

「俺のターン、ドローッ!!

…………あ

今初めて手札を確認した燈夜さんが、呆けた声を上げました。  
どうしたんでしょう？

「……で、」

で？

「デッキ間違えたーッ！！」

え、えええつ！？

「ぶ、ドラマジデッキじゃないのか……くう、仕方ない。このままやるしかないか。俺は『テラ・フォーミング』を発動！ デッキからフィールド魔法、『フューチャー・ヴィジョン』を手札に加える！」

『フューチャー・ヴィジョン』……？

効果は知っていますけど、燈夜さんが使うのは初めて見ます。一体どんなデッキなのでしょう？

「『フューチャー・ヴィジョン』発動！ 自分、または相手が通常召喚に成功した時、そのモンスターは次の自分のスタンバイフェイズまでゲームから除外される！」

「つ……厄介ね」

「『フォーチュンレディ・ライティー』を召喚！」

フォーチュンレディ！

しかし、本当に燈夜さんは魔法使いが好きですね。新たな好み、発見です。

「ヴィジョンの効果により、ライティーは除外される。その時、ライティーの効果を発動！ カードの効果により場を離れた時、デッキからフォーチュンレディを特殊召喚する事が出来る！ 来い、『フォーチュンレディ・アーシー』！」

地属性のフォーチュンレディ、ですね。

フォーチュンレディはLVによって攻撃力と守備力が増減するモンスター。アーシーは確か、LV×400ポイントでしたから……。攻撃力は、2400です。

「バトル！ アーシーでエアーマンを攻撃！」

「つ……！」

結羅 LP 4 0 0 0 3 4 0 0 .

「ここの時、リバースカードオープソ！ 『ヒーロー・シグナル』！ E・HEROが戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、デッキからE・HEROを特殊召喚出来るわ！ 『E・HERO フォレストマン』を守備表示で特殊召喚よ！」  
「くう……次のターン、融合されるかもな……俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

結羅の手札にはオーシャンが居るのは分かつていています。そしてスタンバイフェイズ、フォレストマンの効果で融合が手札に加わる……。

となると、結羅は少なくとも氷のHEROと大地のHEROは出す事が出来る、という事になります。

「アタシのターン、ドロー！ スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果でデッキから『融合』を手札に加えるわ！ ……『融合』

発動！ 場のフォレストマンと、手札の《E・HERO ザ・ヒート》を融合！ 融合召喚、《E・HERO ノヴァマスター》！

「そ、そっちか！」

火炎のHERO、ノヴァマスター。大地でも氷でも無かったのは予想外だったのか、燈夜さんの顔が驚愕に染まる。

「さらに《E・HERO オーシャン》を召喚！ このカードはヴィジョンによつて除外されるわね。安全だわ、ありがとう」「……どういたしましてっ」

「维い、ヴィジョンを利用されちゃいました……。

オーシャンは自分のスタンバイフェイズ、墓地のHEROを回収出来るモンスター。戦闘破壊される心配は無くなつたので、結羅が笑みを浮かべた。

「バトル！ ノヴァマスターでアーシーにアタック！」  
「つ……」

燈夜 L P 4 0 0 0 0 3 8 0 0

「ノヴァマスターがモンスターを戦闘破壊したら、一枚ドロー出来るわ。カードを一枚伏せて、ターン終了よ」

「まだだぜ！ エンドフェイズ時、俺はこのカードを発動する……！」

一枚の伏せカードが、オープンする。

「《フォーチュン・インハーリット》ツ……」

デュエルはまだ、始まつたばかりでした。

「それは違いますっー！」（後書き）

『デュエルは途中で止めました。残りは次回（笑）

しかし、アレですね。結姫の妹、結羅ちゃん……なんか、大人びてる？

確か設定年齢は12歳程度だつた気がする……あれか、姉（結姫以外）の影響か。そういうことにしておこう。

感想、評価等お待ちしております！

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」

『フォーチュン・インハーリット』。

「フォーチュンレディが破壊されたターンに発動可能の、通常属性カードだ。

効果を知らないのか、結姫の妹……結羅ちゃんは眉を潜めていた。

「このカードはフォーチュンレディと名の付いたモンスターが破壊されたターンに発動出来る。次の俺のスタンバイフェイズ、手札からフォーチュンレディと名の付いたモンスターを2枚まで特殊召喚することが出来る」

「……へえ。良いわ。アタシはこのままエンドよ」

「俺のターン、ドロー！」

手札を確認する。

「これは……？」

「スタンバイフェイズ、ライティーが帰還！ そしてインハーリットの効果により」

手札のフォーチュンレディは3体。

その中の炎のフォーチュンレディは出して意味は無い……と、すれば、だ。

「俺は手札より、『フォーチュンレディ・ウォーテリー』を2体特殊召喚する！」

「水のフォーチュンレディ……？」

「ああ。このカードは、フォーチュンレディが表側表示で存在する

時に特殊召喚に成功した場合、カードを2枚ドローする！　俺はウ  
オーテリー2体の効果により、4枚ドローする！

「4……つー？」

一気に手札が肥えた。

……ドラマジと違つて、手札が潤沢してくれるのはフォーチュン  
レディの良いところであり、悔しいところだな。閑話休題、今はそ  
んな事考えている暇は無いな。

「さりにスタンバイフェイズ、場のフォーチュンレディ達はレバが  
上がる。メインフェイズ魔法カード、《ワーム・ホール》！　俺の  
場のモンスターを1体、次の俺のスタンバイフェイズまでゲームか  
ら除外する！　対象はライティー！」

「つ……！？」

「そして、ライティーが“効果”によりフィールドを離れた為、効  
果を発動！　来い、《フォーチュンレディ・ファイリー》！」

今度は炎のフォーチュンレディだ。

「コイツは、強力だぜ？」

「ファイリーの効果を発動！　このカードがフォーチュンレディと  
名の付いたモンスターによつて、表側攻撃表示で特殊召喚に成功し  
た時、相手の表側表示モンスターを1体破壊し、その攻撃力分のダ  
メージを相手に与える！」

「なつ……！？　それじゃ、《破壊輪》と同じじゃない！」

「ああ。《破壊輪》と違うのは、俺はダメージを喰らわないところ  
だな　俺はファイリーの効果で、《E・HERO　ノヴァマスター》を破壊する！」

「つ……ちつ！」

結羅 L P 3400 800 .

後ファイリー1体でも倒せるライフポイント。

「バトル！ ウォーテリーで、プレイヤーにダイレクトアタック！」  
「通さないわ！ リバース罠、《和睦の使者》！ このターン、アタシが受けるダメージは0のみ！」

「くつ……！」

この世界では、《和睦の使者》や《ガード・ブロック》の採用率が比較的高い。

俺の考えだけど、理由としては、やっぱりライフポイントが4000と少ないからだろう。地球なら8000だから、別に入れなくて生き残る確立は高かつた。少なくともこの世界よりは、格段に。俺ももしかしたら、ライフが4000と考えると採用してしまうかもしれない。

……売つちまつたけど。

「俺はカードを3枚伏せて、ターン終了だ」  
「……アタシのターン……」

結羅ちゃんの手が、震えていた。それこそ遠目から見ても分かるくちこみ。

『成る程、のう……。どうする、新たな主人？ 咲之宮家の娘の為に、このデュエル始めたのは自分でも分かつておうつ？』

脳内に響く、女性の甲高い声。どこか近くに聞こだらつマハード

やマナが何も言わないので見ると、この声には気が付いていないんだ  
わい。

俺は心中だけで返事をする

(ああ)

v - r b > v r p > ( v - r p > v r t > ..... v - r t > v r p > v - r p > v - r u b y >

周囲の視線はまだ、慣れたものだろう。仮にもプロデュエリスト、

しかし、多分、彼女を縛り付けているのは父親の眼差しだ。

ない。

『さて、どうするのかのう……？』

10

良し。

「結婚せりやん！」

「…………な、何よ？」

「 そ う い え ば 、 ま だ 自 己 紹 介 し て 無 か つ た よ ね ？ 」  
「 結 姉 と は 、 い つ も 仲 良 く し て 貰 つ て る 」

「.....咲之宮、結羅よ」

しかし、なんか口調が鋭いな。見たところ12・3歳くらいの  
に……結姫とは、やつぱり環境の違いか。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」

「え……?」

「ど、燈夜さん?」

「……樺都町で俺を見た時、結羅ちゃん、結構俺を敵視してたよね  
?」

沈黙。

もし……俺の考えが正しければ、だけど。

「そして今回も、ただ俺とデュエルしたかった、なんて理由じゃな  
いよね……姉……結姫を、取られる気がしたの?」

「……！ アタシは……！」

「大丈夫だよ」

大丈夫。

「結姫は、君の傍から居なくならないから」

「ツ……！」

結羅ちゃんが、結姫を見つめる。暫し、視線が絡み合つ。

「……そつか……そつだよね……だって、アタシのお姉ちゃんだも  
んね」

顔に笑みが浮かぶ。

フレッシャーなんて無かつたように、その姿は自然体だった。そ

れこそ、結姫の母親があらまあ、と眼を細め、上の姉2人が驚き、父親が暫く呆けてしまつくらいには。

『お前も、罪な男よの』

（……さて、ね）

俺は、負けたかな？

「アタシのターーん……ドロー！　スタンバイフェイズ、《フューチャー・ヴィジョン》で除外されていたオーシャンが帰還して、効果を発動！　アタシは墓地の《E・HERO ハーマン》を手札に加えるわ！　そして、《大嵐》！」

「げつ……ー？」

まだ《運命湾曲》とか引いてねえよつ！？

「チヒーん！　《強制脱出装置》！　対象はオーシャンで、さらにチヒーん！　《垂空間物質転送装置》！　ウォーテリーをゲームから除外しておく！」

そこでチヒーんは終了。オーシャンは手札に戻り、《フューチャー・ヴィジョン》と《死靈の巣》を巻き込んで《大嵐》の処理は終了。

「《E・HERO ハーマン》を召喚して、サーチ効果を発動！　デッキから《E・HERO プリズマー》を持つてくる。魔法力ード《融合》！　場のハーマンと手札の《E・HERO オーシャン》を融合！　来て、《E・HERO アブソルートZero》！」

「来たか……」

氷のHERO……一番厄介で、且つ俺が一番好きなHEROだ。HEROの中でトップを誇っているのは、アブソとネオスが同率だつたりする。

「《融合回収》！」墓地の《融合》と《E・HERO オーシャン》を手札に戻すわ。そして再び《融合》！ 場に居るアブソルートと手札のプリズマーを融合して、再びアブソルートZeroを融合召喚！

「そして、フィールドの離れたアブソルートZeroの効果で俺のモンスターは全破壊、か……」

「そういうこと」

やれやれ……デュエルで力を証明するとか言いながら、

「魔法カード……《ミラクル・フュージョン》！」

負けちまつたら、意味無いじゃんか。

「墓地の《E・HERO ハーマン》と《E・HERO プリズマー》を除外し、融合！ 《E・HERO The シャイニング》！」

《E・HERO The シャイニング》ATK2600 3200.

「バトルよ！ The シャイニング」でダイレクトアタック！

おつと、シャイニングからアタックしてきたのか。

燈夜 L P 3800 600 .

「トドメ！ 『E · HERO アブソルートZero』でダイレクトアタック！ —瞬間氷結(Freezing at mom ent)！—」

「うわああああっ！」

寒ッ…………！

名前の通り、絶対零度の攻撃を受けて、俺のライフポイントは0を示した。

負けた、か。  
はあ、と俺が肩を落としていると、結羅ひちやんが俺の元へ歩いてきていた。

その顔はとても清々しい。それは多分、“勝利”とこう二文字が全てではないんだろう。

「ありがとう、燈夜お兄ちゃん」

「あ……っ？」

お兄ちゃん？

萌える、なんて言つてゐる暇も余裕も無い。ただただ驚いて、俺は呆けてしまつていた。

「あたしね……確かに、お姉ちゃんが取られちゃったんじゃないかな、つて不安だったの」

あれ……誰、この子。別人？

「上のお姉ちゃんたちはいつも仕事ばっかりで……あたし、いつも結姫お姉ちゃんの後ろをくつ付いてばかりだった」

親は、仕事で。姉も、仕事で。

結羅ちゃんの傍に居てあげられた家族は、結姫だけだった。だから、居なくなるのが怖かったんだ。

「けど……違つたんだね。例え結姫お姉ちゃんが別の場所で住むようになつちゃつても、アカデミアに通いだしても……結姫お姉ちゃんは、結姫お姉ちゃんなんだね」

「……そうだよ。君にとつて、代わりなんて居ない……たつた1人の、”咲之宮結姫”という姉だから。心配しなくて良いんだよ」

そう言つて、俺は結羅ちゃんの頭を撫でた。  
少し驚いたように眼を見開いた結羅ちゃんだけど、頬を赤く染めて、嬉しそうに顔を緩めた。

「…………そうだろ、結姫？」

「…………燈夜さん」

いつの間にか、俺たちの傍に結姫が……いや、結姫だけじゃない。咲之宮家大集合だ。

「……俺は、力を証明出来ませんでした。すみません」

「……ふん。確かに前は結羅に負けた。だが」

「貴方はどうやら、ちゃんと結姫を……会つて間もない結羅のこと

も、見てくれていたようですし」

「まあ……良いんじゃない？ テュエルしてると、ちよつと……

ちよつと、格好良かつたし」

「お姉様、顔が赤いわよ」

「う、うるせー！」

……………、多少は認めてくれたようだ。結果オーライだな。

後は、家族水入らず……俺は喫茶店のオーナー（役）として、1つ咳払いをして頭を下げた。

「どうぞ、この喫茶にてお寛ぎを。幸福な時間を、貴方に」

休憩時間。

俺は寮裏に廻つて、壁に寄りかかりながらふう、と息を吐いた。煙草でも吸つていたら様になつていただろうか、なんて変な事を考えてしまう。

『マスター……大丈夫？』

「ああ……うん、大丈夫だよ」

多分。

精靈化しているマナが実体化して、俺の隣に腰掛ける。そして俺の肩に頭を乗せる形で寄りかかってきた。

軽めの重力感が俺に圧し掛かる。

普通の人間と大差ないような暖かい温もり。静かな時間。柔らかな一時。

「俺……また、負けたんだよな」

「……マスター……」

「俺……また、また……ツ！」

負けた。

この世界に来て、俺は負けばかりを味わっている。

アカデミアに来て……慧の『聖なるバリア・ミラー・フォース』然り、基の『激流葬』然り、幸仁の『死者蘇生』然り……今回然り。その他、この世界に来て何回もデュエルした。

いつものメンバーの中でも、御神以外とは全員デュエルをした。けれど。

「俺……弱いなあ」

零の『セイクリッド・ブレアデス』のバウンスに勝てず。

姉さんの『ヴエルズ・バハムート』のコントロール奪取にやられ。

結姫の『椿姫ティタニアル』の制圧力に負けて。

凜那の『アルカナ・ナイトジョーカー』のパワーに押され。

リリアの『ネフティスの鳳凰神』で成す術も無く終わり。

ソフィアの『墮天使ゼラート』による効果により、ワントーンキ

ル。

志藤の『神聖騎士パーシアス』に圧倒された。

「つ……」

「マスター……！」

涙が、出て來た。

もう、俺は18歳だって言つのに……何、泣いてんだよ、俺？  
膝を畳んで、俺はその間に顔を挟んだ。

俺の精靈だとは言え、余り泣き顔は見られたくない。

まだ、俺は子供なんだ。  
カードゲームで負けて、泣いてしまつ子供。

「俺……つ！ 皆を…………ッ！」

守れないんだなあ…………！

涙が、折角の衣装を濡らしていく……。

「結羅ちゃんは、お姉ちゃんの事、好き?」（後書き）

いえーい、結羅ちゃんフラグ立てたぜー。  
これはヒロイン増加かーつ？

私の馬と鹿。ただでさえヤバイ人数のヒロインなのに、そろそろ把握し切れませんで。私と読者様が。  
いやしかし、元々見切り発車で投稿始めた小説だから別に云々。

てか、この小説……メインの小説のPV超えちゃつたつ！？ 馬鹿な、まだ1ヶ月も過ぎてないのに！

燈夜の涙。悔しが、辛さ。  
共感出来る人、出来ない人、それぞれだと思います。  
妹を、姉を、友達を守りたい。なのに、自分が弱いせいで守れない。  
それどころか、自分は“守られてしまつ”。  
それに、燈夜は涙を流しました。

これから彼は、どんな道を歩むのか……自分でも分かりません（笑）

感想、評価等してくださりお願いします（切実）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1158y/>

遊戯王 LEGENDs～伝説の名の元に～

2011年11月27日14時53分発行